陸前高田市文化財等保存活用計画策定調査業務

報 告 書

平成２６年９月

陸前高田市教育委員会

目 次

はじめに……1

１．陸前高田市の地域文化財等の特徴……5
（１）原始からの切れ目ない時代ごとの資源や郷土への誇りがあるまち……5
（２）市内８町それぞれに、固有の地域資源や記憶があるまち……6
（３）豊かな自然環境からの恵みに育まれた生活文化のあるまち……8
（４）陸前高田の歴史文化資源をつなぐ関連文化財群……11
（５）「４つの関連文化財群」をめぐる「１２の物語」……14

２．活用を急ぎたい陸前高田らしい歴史文化資源の抽出……17

３．陸前高田市の文化財等の被災状況……23
（１）陸前高田市における文化財等被害の概況……23
（２）分野別の文化財の被災状況……24
（３）博物館レスキューの概況……29

４．文化財等保存活用計画……35
（１）文化財等保存活用の基本理念と基本方針……35
（２）保存活用の方策・施策……37
ア）「気づき」……38
イ）「つたえ」……52
ウ）「活かす」……60
エ）震災復興に向けた緊急対策……72
（３）保存活用の方策・施策一覧……78

はじめに

平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災により、陸前高田市は壊滅的な被害を受けました。その中には、博物館、図書館などの文化施設や国指定名勝である高田松原、国登録文化財である酔仙酒造、県指定文化財である吉田家住宅などを始めとする多くの貴重な文化財や資料も含まれておりました。

このような状況の中、当市では平成 23 年度に文化庁が進めていた「地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の補助を受け、平成 24 年３月に「陸前高田市における歴史・文化遺産を活用した復興計画」を策定しました。

本事業では、この復興計画の内容を受け、市内全域に点在する自然・歴史文化資源を、今後のまちづくりの中で活かすための施策提案とともに、復興事業に関連して緊急性の高い浸水被災地域の自然・歴史文化資源の保存・継承に向けた検討を行い、「陸前高田市文化財等保存活用計画策定調査業務報告書」としてまとめました。

この保存活用計画においては、「気づき」「つたえ」「活かす」という３つの視点に立った、１２の方策をもとにし、「陸前高田らしさ」を主眼に置き、調査研究、博物館での展示等のみではなく、観光、教育、地域づくりなど幅広い視点での施策を提案しております。具体的な施策の実施に向けては、市内各地区の特性や、復興事業等の進展も考慮し、教育委員会だけでなく多様な部局間の連携によって、文化財等の保存活用を進めることとしております。

さらに、長期的な取り組みとしては、当市をより魅力あるまちとするため、本事業が掲げる「豊かな風土と生活文化を伝えるまち」「陸前高田のアイデンティティを育むまち」「地域のＤＮＡが活かされたまち」の３つのビジョンを柱にし、文化財等を新しいまちづくりの中に活かしてまいりたいと考えております。

本書がふるさとの自然・歴史文化の保存活用に向け周知されるとともに、これからの陸前高田市の復興計画の中で、将来を担う子どもたちにとっても有意義なものになるよう心から願うものであります。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、関係各位からご協力ご指導を賜りましたことに対し、心から感謝を申し上げあいさつといたします。

平成２６年９月

陸前高田市教育委員会
教育長　　山　田　市　雄

●陸前高田市文化財等保存活用計画の位置付け

陸前高田市は、三陸の豊かな自然環境を背景に先史時代から数千年にわたり人々の生活が営まれ、市内各地に各時代の豊富な歴史文化資源が残されている地域である。

平成 23 年３月 11 日の東日本大震災により、浸水被災地域を中心に甚大な被害を受け、自然や歴史文化資源の多くも被災したが、歴史文化を活かした「陸前高田らしい」特性を、震災復興やその後の長期的なまちづくりに受け継いでいくことが望まれる。

「陸前高田市民憲章」（昭和 60 年）では、「わたくしたちの陸前高田市は、白砂青松の高田松原をはじめ、海・山・川の資源に恵まれ、先人ののこした歴史と伝統のあるまちです。
わたくしたちは、陸前高田市を愛し、豊かな心をもち、広い視野にたって力をあわせ、より住みよいまちづくりに努めるため、この憲章を定めます。」とし、「自然をたいせつにし、美しいまちをつくります。」、「家族の和と、健康に心がけ、明るいまちをつくります。」、「働くことに意欲をもち、活気にみちたまちをつくります。」、「思いやりの心をもち、うるおいのあるまちをつくります。」、「教養を深め、文化の高いまちをつくります。」の５項目が定められている。

また、「陸前高田市総合計画基本構想」（平成 13 年）では、「恵まれた自然や歴史、文化を活用した里づくりを進めながら、市民が地域に誇りを持ち、住み続けたいまち、住んでみたいまちとして、内に外に陸前高田を発信出来るまちづくりを進める」ため、３つのまちづくりの理念「市民が主役のまちづくり」、「誇りの持てるまちづくり」、「交流と連携によるまちづくり」を推進するとしている。

さらに、「陸前高田市震災復興計画」（平成 23 年）では、「世界に誇れる美しいまちを共に創ります」、「ひとを育て、命と絆を守るまちを共に創ります」、「活力あふれるまちを共に創ります」という３つの基本理念のもと、「海と緑と太陽との共生・海浜新都市の創造」に取り組んでいる。同計画の各論の中では「歴史的な建物等の復元に配慮しながら歴史を受け継ぐ新しいまちを再生」、「地域の祭りの復興」など、歴史文化への配慮が求められている。

こうした上位計画の理念を実現するため、市民とともに地域の自然・歴史文化資源を継承し、教育・観光・産業などに幅広く自然、歴史文化を活用していくため、文化財保護行政の総合的な指針を定める「文化財等保存・活用計画」を策定する。

加えて、これを歴史文化資源相互の関係性や周辺の文化的景観を含む、陸前高田市の自然・歴史・文化を総合的に保存・継承・活用していくため、歴史文化基本構想など関連計画への将来的な展開も見すえた保存活用計画として位置づける。

本計画を陸前高田市だけの取り組みとするのではなく、文化財レスキューをはじめとする対応や技術の発信は、当市の義務であると考えている。このような立場から、今後は広く情報発信も行いたい。

●陸前高田市文化財等保存活用計画の検討経緯と検討体制

［平成 23 年度］

文化庁「地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」により、「陸前高田市における歴史・文化遺産を活用した復興計画」の策定が実施された。

陸前高田市における歴史・文化遺産を活かした復興まちづくり検討委員会（西村幸夫委員長）が設置され、計２回の委員会を開催した。主に、高田松原と今泉地区の復興に向けた方向性が話し合われ、「歴史・文化遺産を復興まちづくりにどう活かすか」、「今泉地区のまちの骨格の受け継ぎ方と気仙大工の技術の継承」、「高田松原や海岸植生の回復」、「地域資産や風景資産の継承」、「生活者を軸にした復興まちづくり」、「景観生態系史にもとづいた復興まちづくりのあり方」、「環境共生型の減災のコンセプト」、「高田松原の植林再生と文化財としての位置付け」、「今泉集落と気仙大工」、「文化的景観と地震・津波被害」などの提案がされた。

【委員会開催日程】

第１回検討委員会　平成 23 年 11 月 18 日

第２回検討委員会　平成 24 年 3 月 21 日

【委員構成】

委員長	西村　幸夫	東京大学先端科学研究センター教授	
副委員長	羽藤　英二	東京大学工学系研究科准教授	〈今泉町並み分科会兼務〉
委員	金子　忠一	東京農業大学地域環境科学部教授	〈高田松原分科会兼務〉
委員	高見　公雄	法政大学デザイン工学部教授	〈今泉町並み分科会兼務〉
委員	辻　誠一郎	東京大学大学院教授	〈市域の歴史・文化分科会兼務〉
委員	中村　英俊	岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課文化財・世界遺産課長	
委員	濱野　周泰	東京農業大学地域環境科学部教授	〈高田松原分科会兼務〉
高田松原分科会	入江　彰昭	東京農業大学短期大学部准教授	
	粟野　隆	東京農業大学地域環境科学部助教	
今泉町並み分科会			
	高橋　恒夫	東北工業大学工学部教授	
市域の歴史・文化分科会			
	温井　亨	東北公益文科大学大学院准教授	
自治体	岩手県教育委員会	陸前高田市教育委員会	
文化庁	鈴木　地平	文化財部記念物課　技官	
事務局	株式会社プレック研究所	株式会社日本都市総合研究所	

［平成 24～26 年度］

文化庁管轄の復興交付金事業により、陸前高田市教育委員会を事業主体として、文化財等保存・活用計画策定調査事業を実施した。平成 23 年度の調査結果を受け、本市の特徴的な文化財の保存や、今回の震災で被災した文化財の再生を図る計画の策定と、今後の文化財を活かした地域振興を図ることを目的としている。

陸前高田市文化財等保存活用計画策定委員会（池邊このみ委員長）が組織され、計４回の本委員会、５回の部会を開催した。市全域の自然・歴史文化資源の活用を視野に入れた「文化財等保存活用計画」の策定と、復興事業に関連して緊急性の高い浸水被災地域の歴史文化資源の保存・継承に向けた検討を主要課題とした。

【委員会開催日程】

第１回全体委員会　平成 25 年 4 月 15 日

第２回全体委員会　平成 25 年 9 月 30 日

第３回全体委員会　平成 26 年 5 月 13 日

第４回全体委員会　平成 26 年 6 月 22 日

第１回調査・保存部会　平成 25 年 4 月 15 日

第２回調査・保存部会　平成 26 年 6 月 22 日

第１回今泉部会　　平成 25 年 3 月 9 日

第２回今泉部会　　平成 25 年 4 月 15 日

第３回今泉部会　　平成 26 年 5 月 13 日

【委員構成】

［全体委員会委員］

委員長	池邊　このみ	千葉大学大学院教授	〈保存部会兼務〉
副委員長	中井　検裕	東京工業大学大学院教授	
委員	朝日田　卓	北里大学海洋生命科学部教授	
委員	石川　日出志	明治大学教授	〈保存部会兼務〉
委員	遠藤　祐太郎	元もりおか歴史文化館学芸員	
委員	熊谷　常正	盛岡大学文学部教授	〈保存部会兼務〉
委員	高橋　恒夫	東北工業大学教授	〈今泉部会兼務〉
委員	辻　誠一郎	東京大学大学院教授	〈調査部会兼務〉
委員	平川　南	人間文化研究機構理事	〈調査部会兼務〉
委員	細谷　英男	陸前高田市文化財調査委員会委員	〈調査部会兼務〉
委員	本多　文人	陸前高田市立博物館館長	〈保存部会兼務〉
委員	山田　市雄	陸前高田市教育委員会教育長	

［調査部会委員］

部会長	平川　南	人間文化研究機構理事
委員	佐藤　信	東京大学大学院教授
委員	辻　誠一郎	東京大学大学院教授
委員	七海　雅人	東北学院大学教授
委員	細谷　英男	陸前高田市文化財調査委員会委員

［保存活用方針計画策定部会委員］

部会長	石川　日出志	明治大学教授
委員	池邊　このみ	千葉大学大学院教授
委員	熊谷　常正	盛岡大学文学部教授
委員	中野　泰	筑波大学大学院准教授
委員	平川　新	宮城学院女子大学学長
委員	本多　文人	陸前高田市立博物館館長

［今泉地区文化財等活用計画策定部会委員］

部会長	高橋　恒夫	東北工業大学教授
委員	月舘　敏栄	八戸工業大学教授
委員	村上　孝嘉	明日へのまちづくり協議会会長
委員	村上　徳彦	明日へのまちづくり協議会部長

（五十音順）

事務局　　陸前高田市教育委員会生涯学習課
株式会社スペースビジョン研究所　　株式会社ディーワーク

１　陸前高田市の地域文化財等の特徴

（１）原始からの切れ目ない時代ごとの資源や郷土への誇りがあるまち

温暖な気候と海・山・川の自然環境、そしてそれらからの産物・資源に恵まれた陸前高田市は、早くから人々が定住して市域各所に集落を形成してきた。古代から気仙郡の政治の中心として発展し、その後の今泉、浜、遠野高田の各街道を通じた陸路の発展も含め、平泉や仙台・遠野などとの交流を通して、現代に至る歴史を刻んできた。

陸前高田市は、時代ごとに、町ごとに地域文化が育まれ、それらが重なり合いながら、原始・古代から中世・近世・近代・現代までの時代ごとの資源や郷土への誇りが、現在に至っても色濃く受け継がれているまちである。

表１：陸前高田市の歴史文化

時　代	トピック
地質時代	●横田町小坪沢の石炭紀化石、矢作町飯森のペルム紀化石など、市内には古生代の化石を産出する地域があります。
原始	●縄文時代から多数の遺跡が存在し、広田湾や外海の恵みを享受した人々の暮らしの痕跡が見られます。中でも、国史跡・中沢浜貝塚に代表される、貝塚を伴う遺跡が多い事が特徴です。
古代	●蕨手刀が出土し、豊かな産物を背景とした勢力の存在をうかがわせます。『日本後紀』から、９世紀初頭には「気仙郡」の存在が確認できます。高田町の小泉遺跡からは、「厨」の文字の残る墨書土器が出土しており、気仙郡の政治の中心が置かれていたことが推察されます。古くから崇敬されてきた氷上神社の存在や、高田町に残る武日長者の伝説などもあり、北方交易の拠点地として古代から繁栄した地域であったと考えられます。市内各地で古代からの産金伝説があり、当市から産出した金が平泉の黄金文化の一翼を担ったとされています。また、横田町を拠点に勢力を拡大したと見られる気仙郡司・金氏の活動も、古代から始まっています。
中世	●平泉藤原氏が滅亡すると、鎌倉幕府の有力御家人・葛西清重が、気仙郡の領主となりました。鎌倉時代末期には、千葉氏の入部も想定され、室町時代以降、国人領主として発展します。市内には 50 ヶ所以上の中世城館が確認され、複数の曲輪をもつ二日市城・高田城・米ヶ崎城は広田湾を押さえる大規模な城館として注目されます。中世末期には高田城前面のかぎ型の道も整備され、また市内各所の市場地名や横田町の舞出御前の伝承などから、定期市の開催や土地の開発も進展したと考えられます。
近世	●近世に入ると、当市一帯は仙台藩の直轄領となりました。当初は二日市城、次いで高田城に城代が置かれますが、その後は今泉に代官所、大肝入、御足軽隊が置かれ、気仙郡の政治の中心地となりました。街道の整備が行われ、今泉が宿場町として発展したのもこの時期です。名勝・高田松原の植林や竹駒町の「松坂堰」に代表される農業土木整備、産金に代わって矢作町で発展した炯屋（製鉄業）、漁具の発展により大謀網漁など大規模化した漁業、普門寺に代表される気仙大工の技術など、様々な産業が発展しました。
近代	●当市域は数度の変遷の末、明治９年に岩手県に編入されます。郡政の中心地は盛に移りますが、三陸汽船や道路整備など近代交通の発展により、高田町は気仙郡を代表する商業中心地に発展します。矢作町や横田町等の製糸業や、米崎町の果樹栽培が明治期に始まり、江戸時代に栽培の始まった気仙茶は、明治期には一大産業に成長しました。近代から戦後にかけて、遠洋漁業が盛んになりましたがその後廃れ、現在では近海と養殖を中心とした漁業が営まれています。一方、明治・昭和に発生した三陸津波は、沿岸部に深い傷跡を残しました。
現代	●昭和 30 年の合併により陸前高田市が誕生しました。都市基盤の整備と共に、博物館や図書館、公民館等の公共施設も整備されました。合併後も江戸時代以来の旧村境をほぼ継承した８町の構成が引き継がれ、旧来の字名もほぼ残されています。また、各コミュニティで講組織や祭礼、伝統芸能等、多様な歴史文化が受け継がれています。

中沢浜貝塚

あかまい館跡

高田城跡

普門寺三重塔

吉田家住宅

松坂重兵衛開墾碑

閑董院
（気仙大工）

広田村津波記念碑

けんか七夕
（出典：陸前高田市観光協会ＨＰ）

（２）市内８町それぞれに、固有の地域資源や記憶があるまち

陸前高田市域の行政区分は明治初期の村落 10 村の区分が基本的に継承されている。明治期や昭和 30 年の町村合併においても基本的な区分は変わっていないため、町ごとに生活文化や土地の記憶などの固有の地域性が受け継がれている。

現在、高田・竹駒・気仙（今泉・長部）・米崎（浜田・勝木田）・小友・広田・横田・矢作の８町から構成されており、町ごとの歴史文化の特徴を以下の表に整理した。

表２：陸前高田市の主な歴史文化資源

町	地区	指定文化財	主要遺跡	その他の文化財	産業関連資産	神社・寺院等
高田町		・（村上道慶塾のアカマツ） ・高田松原 ・（酔仙酒造） ・光照寺の梵鐘 ・陸前高田の漁労用具（博物館所蔵） ・米谷欣司氏寄贈考古資料コレクション（博物館所蔵）	・貝畑貝塚 ・小泉遺跡 ・高田城跡	・うごく七夕 ・墨書土器（厨） ・オシラサマ ・（川原一里塚） ・浜街道 ・高田遠野街道 ・（石川啄木、新沼兄弟歌碑） ・（高浜虚子句碑） ・（菅野杢之助翁頌徳碑） ・氷上花崗岩	・（三斉市） ・（高田宿） ・新田開発（立神浜） ・気仙川漁 ・定置網漁 ・製材・（養蚕・葉タバコ・製糸） ・酒造・醸造 ・気仙大工、左官 ・（因幡堰）・ため池 ・道慶翁碑	・氷上神社 ・天照御祖神社 ・八坂神社 ・市神社 ・市神様 ・本称寺 ・浄土寺 ・光照寺 ・大石観音 ・坂口観音 ・氷上本地
気仙町	今泉	・（龍泉寺のモミジ） ・吉田家住宅 ・吉田家文書 ・高田松原 ・金銅笈双塔紋 ・気仙町けんか七夕祭り		・荒川一里塚 ・オシラサマ ・（カマガミサマ） ・（川口一里塚） ・今泉街道 ・浜街道 ・（松坂新右衛門翁定宣顕彰碑） ・蕨手刀 ・（足軽屋敷・代官所跡） ・ビスカイノ寄港	・（八日町） ・（今泉宿） ・今泉市場 ・気仙川漁 ・製茶 ・製材 ・酒造・醸造 ・（馬産・葉たばこ） ・気仙大工、左官 ・ため池	・諏訪神社 ・今泉天満宮 ・龍泉寺 ・金剛寺 ・泉増寺 ・妙恩寺
	長部	・二日市寅舞 ・長部湊七福神舞 ・要谷たるこ踊り	・二日市貝塚 ・牧田貝塚 ・二日市城跡 ・要谷館跡	・気仙隕石 ・中世板碑 ・津波記念碑 ・オシラサマ ・浜街道	・（二日市） ・（製塩） ・定置網・養殖漁業・（まき網漁・鰯漁） ・（東京湾汽船） ・（漆・葉たばこ・馬産） ・気仙大工・左官 ・ため池 ・長部港「東京湾汽船」 ・中野翁頌徳碑「漁業」 ・熊谷茂三郎翁碑「林業」	・月山神社 ・鹿島神社 ・長圓寺 ・古谷観音 ・要谷観音 ・上長部観音
広田町		・中沢浜貝塚 ・椿島ウミネコ繁殖地 ・青松島 ・黒崎神社の懸仏 ・広田御祝い ・根岬梯子虎舞	・大陽台貝塚 ・袖野Ⅰ遺跡 ・金室遺跡 ・集遺跡 ・大陽崎遺跡 ・高館跡	・失せもの絵馬 ・鯨神 ・行屋 ・津波記念碑 ・津波教訓碑 ・津波供養碑 ・オシラサマ ・（カマガミサマ） ・船玉碑 ・黒崎海岸の大船渡層群と広田石英モンゾニ岩の接触部	・定置網・鮃一本釣り・（鰯漁）・養殖漁業 ・広田泊港（近世貿易港） ・（製塩） ・（漆・馬産・養蚕・酒造） ・気仙大工、左官 ・ため池 ・小松潮流翁碑「漁業」 ・佐々木大三郎翁頌徳碑「漁業」	・黒崎神社 ・鶴樹神社 ・稲荷神社 ・小舘観音 ・御伊勢堂 ・慈恩寺

町	地区	指定文化財	主要遺跡	その他の文化財	産業関連資産	神社・寺院等
小友町		・常膳寺の姥杉 ・華蔵寺の宝珠のマツ ・華蔵寺のモミ ・蛇ケ崎 ・毛抜型蕨手刀 ・常膳寺観音堂 ・常膳寺算額 ・銅鰐口 ・田東念仏剣舞	・門前貝塚 ・獺沢貝塚 ・雲南遺跡 ・岩井沢遺跡 ・松山前遺跡 ・蛇ケ崎城跡	・（海上七夕） ・志山梵俊揮毫碑 ・オシラサマ ・カマガミサマ ・津波供養碑 ・（中吉丸）	・（三日市） ・定置網・養殖漁業・（海苔養殖） ・製茶・（製塩） ・（漆、葉たばこ・養蚕・馬産） ・気仙大工、左官 ・中里炯屋遺跡 ・堰並千間、雲南隧道 ・ため池	・常膳寺 ・正徳寺 ・華蔵寺 ・善性寺 ・八幡神社 ・稲荷神社 ・熊野神社 ・田東観音
米崎町	浜田	・普門寺のサルスベリ ・普門寺三重塔 ・絹本著色愛染明王画像 ・木造伝聖観音菩薩坐像	・川内遺跡 ・重倉金山跡 ・米ケ崎城跡 ・中山館跡	・佐野一里塚 ・浜街道 ・（津波記念之碑） ・カマガミサマ ・オシラサマ ・万人施宿塔 ・氷上花崗岩	・定置網・養殖漁業・（海苔養殖） ・脇之沢港（三陸汽船） ・製茶 ・果樹栽培 ・（葉たばこ，養蚕） ・気仙大工、左官 ・吉田勘之助翁頌徳碑「果樹」	・普門寺 ・天照御祖神社
	勝木田		・堂の前貝塚	・勝木田大名行列 ・中世板碑 ・（中吉丸）	・定置網・養殖漁業・（海苔養殖） ・果樹栽培 ・製茶 ・（製塩・馬産・漆・養蚕） ・気仙大工、左官 ・ため池	・松月寺 ・秋葉神社 ・薬師堂 ・立山観音
矢作町		・円城寺の枝垂性トウヒ ・タラヨウの巨木 ・閑薫院宥健尊師堂 ・小田家のおしらがみ ・漆絵曳馬絵馬 ・生出神楽 ・三ノ戸剣舞 ・生出鹿踊 ・中平神楽 ・雪沢田植踊	・古館遺跡 ・片地家館跡遺跡 ・寺前Ⅱ遺跡 ・梅木遺跡 ・女神洞穴遺跡 ・山崎遺跡 ・寺前Ⅰ遺跡 ・東角地遺跡 ・打越遺跡 ・鶴崎城跡 ・外館城跡	・小黒山一里塚 ・坂下一里塚 ・湯漬畑一里塚 ・（二又一里塚） ・今泉街道 ・経壺（越戸内経塚出土） ・内耳鉄鍋（東角地遺跡出土） ・人面付石棒（石橋山遺跡出土） ・蕨手刀 ・飯森のペルム紀、雪沢の石炭紀化石産地 ・オシラサマ	・金山（枡内、雪沢、太子、琴平） ・炯屋跡（的場、仏地野） ・湯漬畑窯跡 ・酪農・（馬産） ・（製糸、養蚕） ・製炭 ・（製材） ・（葉たばこ） ・（酒造） ・矢作川漁 ・気仙大工、左官 ・銀蔵堰	・天照御祖神社 ・駒形神社 ・円城寺 ・観音寺 ・閑薫院宥健尊師堂
竹駒町		・玉御前の石割ケヤキ ・青銅製さしなべ ・新田梯子虎舞	・軍見洞遺跡 ・細根沢石塚遺跡 ・細根沢遺跡 ・玉山金山跡 ・壺館跡 ・花館跡	・（東前一里塚） ・高田遠野街道 ・松坂堰 ・カマガミサマ ・オシラサマ ・壺の沢変成岩 ・氷上花崗岩	・（十日市場） ・製材 ・（葉たばこ、漆、養蚕） ・（製炭） ・酪農 ・気仙川漁 ・気仙大工、左官 ・ため池、松坂堰 ・松坂十兵衛定成「松坂堰」	・竹駒神社 ・玉山神社 ・荘厳寺 ・正覚寺 ・延命寺 ・無極寺 ・羽縄観音
横田町		・槻沢剣舞 ・槻沢梯子虎舞 ・舞出鹿踊 ・本宿梯子虎舞	・釘の子Ⅳ遺跡 ・友沼Ⅲ遺跡 ・西宿遺跡 ・あかまい館跡 ・橋の上金山跡 ・三日市館跡 ・本宿館跡	・本宿一里塚 ・（南行一里塚） ・南行追分地蔵尊 ・高田遠野街道 ・オシラサマ ・舞出御前 ・小坪沢の石炭紀化石産地 ・氷上花崗岩	・（三日市） ・（製糸，養蚕） ・（製炭） ・製茶、（漆、葉たばこ） ・酪農 ・気仙川漁 ・気仙大工、左官 ・ため池 ・荻原兼吉翁顕徳碑「林業」	・熊野神社 ・山神社 ・舞出神社 ・八幡神社 ・常光寺 ・長徳寺

※地区の順は、陸前高田市区長に関する規則（昭和３５年）に記載された行政区分順とした。
※滅失・流出している文化財、現在生産活動していない産業、休止している民俗芸能は（　　）内に表記した。被災した寺社もあるが、再興の動きもあるため、そのまま記した。

（３）豊かな自然環境からの恵みに育まれた生活文化のあるまち

三陸の海は親潮と黒潮が交錯する海域で、約 500 種にも及ぶ魚類が見られる豊かな海である。広田湾に注ぐ気仙川は、氷上山や住田町清水山などの山々を源に矢作川などが合流し、山の豊かな栄養分を運び、沿岸地域に豊かな水産物をもたらす重要な役割を担っている。この山と海の恵みを背景に育まれた豊かな自然環境は、縄文時代において高度な漁撈文化を生み出し、陸前高田の歴史的基礎を築いた。また、氷上花崗岩の貫入浸食により形成されたなだらかな山稜と石灰岩体の浸食地形が陸前高田の自然の骨格をなしている。さらに海がもたらす温暖な気候は、トベラやタブノキなどの亜熱帯性植物を育て、市域の大半を占める山地の植生や風景は、陸前高田らしさを特徴づけている。このように市域各所に暮らす人々は、自然環境と共生しながら生活技術を獲得し、町ごと・集落ごとの生活文化を後世に受け継いできた。

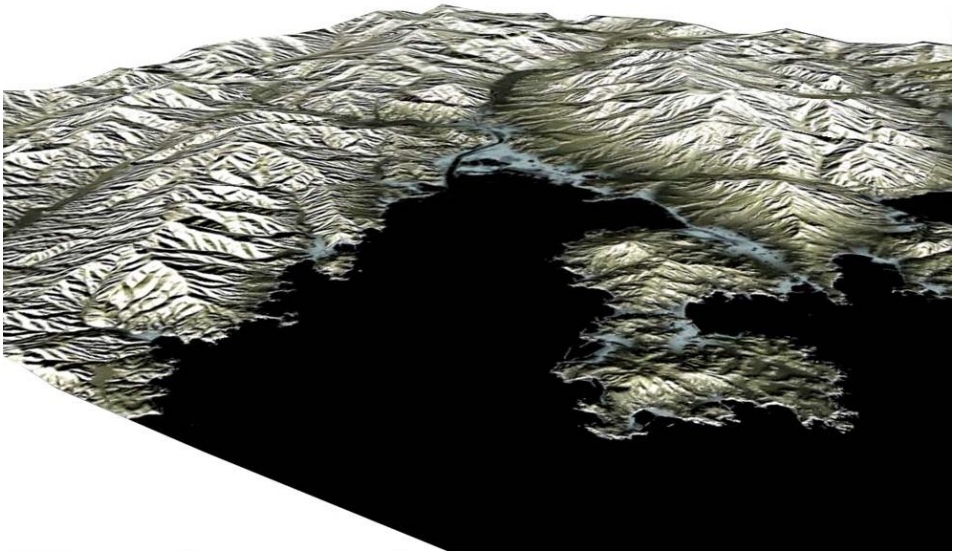


図１：南東方向から見る陸前高田の地形

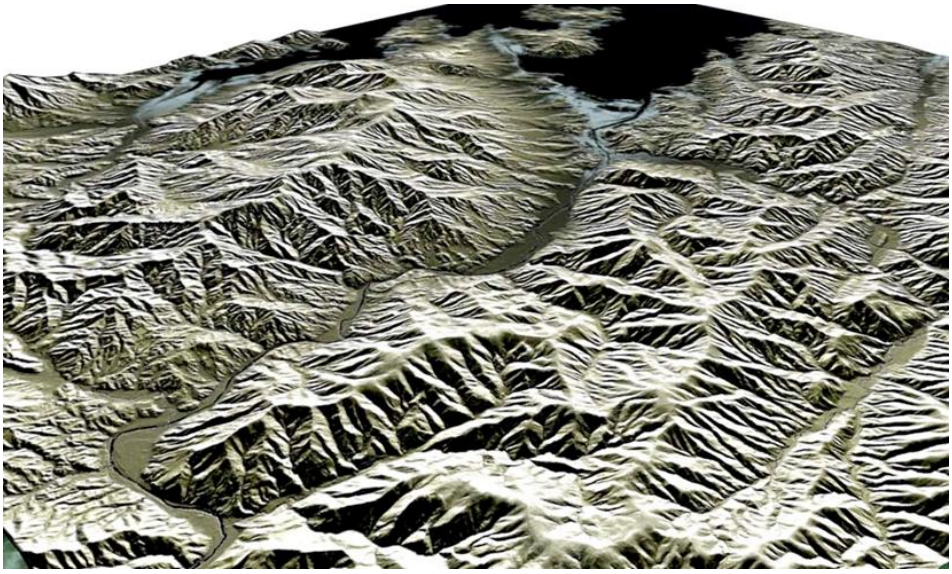


図２：北西方向から見る陸前高田の地形

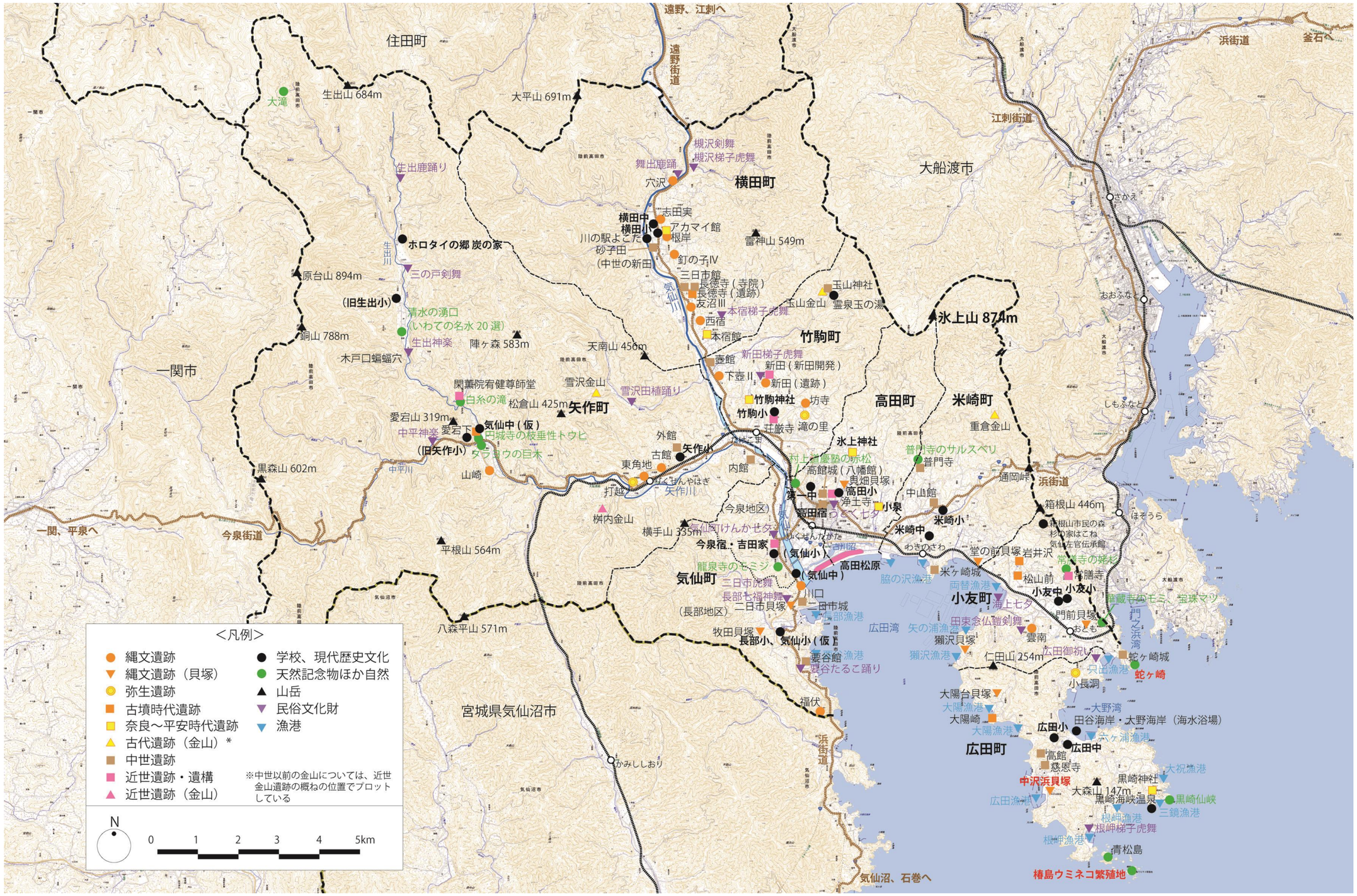


図３：陸前高田市の代表的な歴史文化資源

（４）陸前高田の歴史文化資源をつなぐ関連文化財群

陸前高田の歴史文化資源は、豊かな自然環境を背景として時代別・町別に特徴があり、それらは陸前高田市域や周辺との関わりのなかで、様々な意味や価値を有している。こうした重層的な歴史文化を、市民が認識し、市民の力で保存・活用していくために、「関連文化財群」という考え方に基づき、有形・無形の文化を整理し、位置づける。

関連文化財群とは、陸前高田市の歴史や風土を含めた歴史文化資源をより分かりやすく理解し、その魅力を多くの人々に伝えていくことを重視した考え方である。有形文化財や民俗文化財のような歴史文化資源をつなげ、そこに周辺の自然環境や文化財等を保存修復する技術、地域の歴史や文化を護り受け継ぐ活動をする人々などを含めて一体のものとして把握し、様々な方面で保存活用するための概念である。

◯陸前高田の歴史文化の特徴と関連文化財群

これまでの検討で陸前高田の自然や歴史文化は、以下に示す特徴にまとめることができた。これらは、保存活用計画を立案する際に留意する「大きな特徴」であり、保存活用の理念や方針を策定するときの基本的な考え方となる。また、これは関連文化財群の選定やストーリー化を行う際にも、原点・ベースとして、常に配慮する必要がある。

［保存活用計画の基本理念に関わる歴史文化の特徴］

◯原始からの切れ目ない時代ごとの資源や郷土への誇りがあるまち

◯市内８町それぞれに、固有の地域資源や記憶があるまち

◯豊かな自然環境からの恵みに育まれた生活文化のあるまち

◯４つの関連文化財群

前項でまとめた「保存活用計画の基本理念に関わる歴史文化の特徴」を念頭に、「市全域及び町ごとの主な歴史文化資源」、「自然環境という観点に配慮した歴史文化資源」等を基に、歴史文化資源のつながりから、陸前高田の歴史文化の特徴を示す「関連文化財群」として以下の４つを導いた。

さらに、「町ごとの主な自然・歴史文化資源から導かれる関連文化財群の関連表」を作成して、具体的な歴史文化資源を位置づけ、次頁に示した。

［４つの関連文化財群］

Ａ．「海と川の恵みと生活」にまつわる歴史文化

～広田湾、気仙川・矢作川、沿岸部の漁撈の歴史・文化など

Ｂ．「山の恵みと生活」にまつわる歴史文化

～氷上山や丘陵地、産金・製鉄、農林業、新田開発、気仙茶・椿油など

Ｃ．「交通・交易・交流」にまつわる歴史文化

～海の道・物資の交易、陸の道・街道文化・宿場・市場など

Ｄ．「まちとコミュニティ」にまつわる歴史文化

～寺社の建築や文化、中世城館、大肝入屋敷、気仙大工左官、祭り、民俗芸能、食文化など

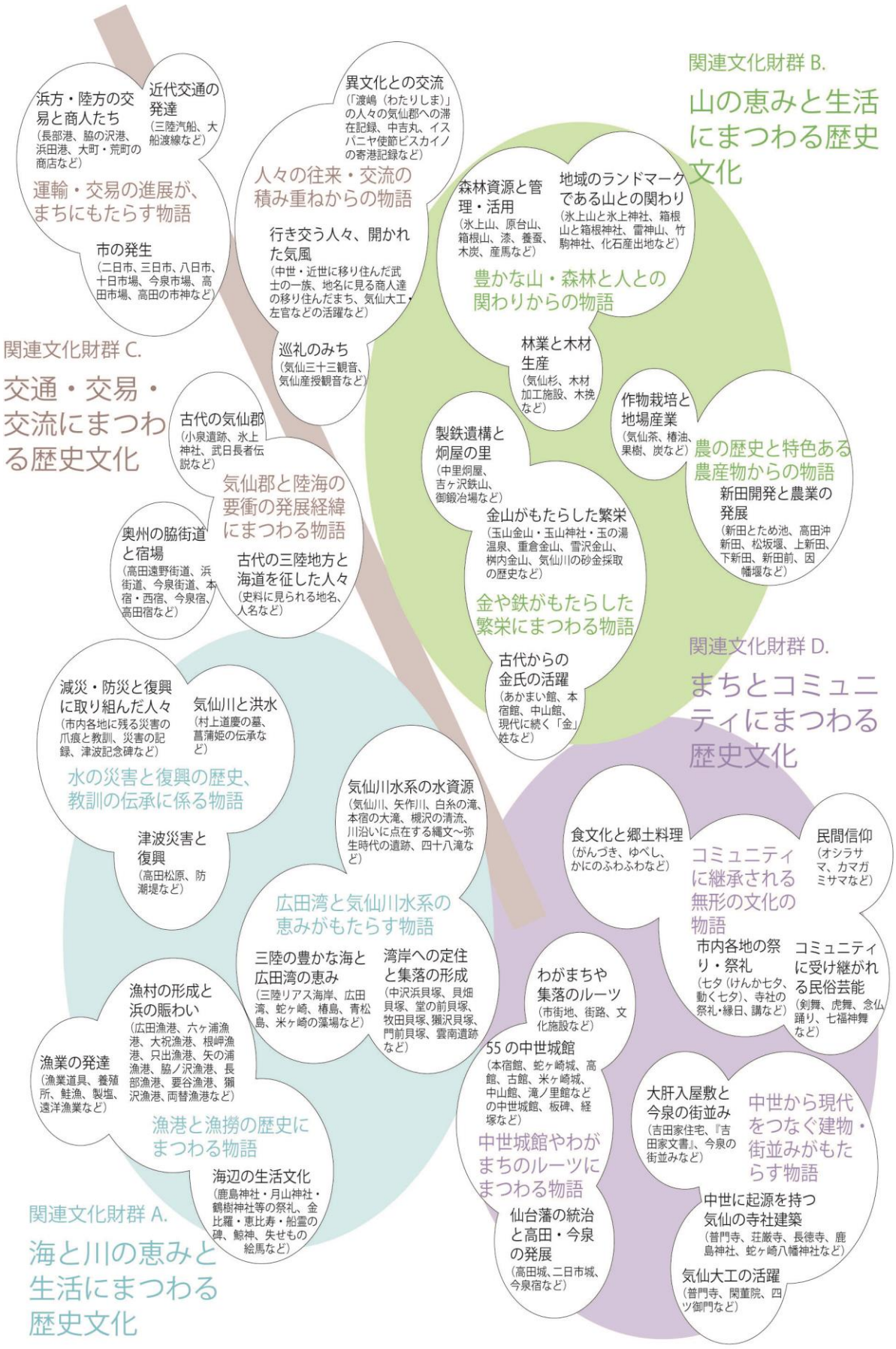


図４：４つの関連文化財群と１２の物語

（５）「４つの関連文化財群」をめぐる「１２の物語」

16 ページの表は、４つの関連文化財群に含まれる歴史文化資源の概要と相互の関連性を示したものである。関連文化財群は、陸前高田市の歴史文化や自然環境・風土を物語る、陸前高田らしさの象徴といえる。これまで個別に認識していた文化財を、ストーリーで結ばれた総体（物語）として捉えることによって、陸前高田市の歴史や風土、文化財をより分かりやすく理解し、市民をはじめとする多くの人々に、陸前高田が有している文化財等の魅力や価値を伝えていくことに大きなねらいがある。

◯関連文化財群Ａ．「海と川の恵みと生活にまつわる歴史文化」からのストーリー

- Ａ−１．広田湾と気仙川水系の恵みがもたらす物語
- Ａ−２．漁港と漁撈の歴史にまつわる物語
- Ａ−３．海・川の災害と復興の歴史と教訓の伝承に係る物語

［基本ストーリー］

波荒い三陸海岸にありながら穏やかな入江を持つ広田湾と、山から湾に注ぎ込む気仙川水系。海と川の豊かな水の恵みは、古代から人々の生活を潤し、漁撈の歴史を培ってきた。一方、時に津波や洪水として襲いかかる水の災害を、人々は知恵と技術でのりこえてきた。

［保存活用に向けた文化財等の現状と課題］

- 高田松原、椿島、青松島、蛇ヶ崎などの自然・地形、中沢浜貝塚、伝統芸能、樹木等の天然記念物、市立博物館所蔵の漁撈用具などが文化財指定を受けている。
- 沿岸部は甚大な浸水被害にあっており、高田松原など被災文化財の復興・復旧、海辺の生活文化の再生と継承が喫緊の課題である。活用の観点からは、中沢浜貝塚など整備を進めるとともに、各資源を繋ぐ見学ルートの整備を含め、観光面での活用などが課題である。

◯関連文化財群Ｂ．「山の恵みと生活にまつわる歴史文化」からのストーリー

- Ｂ−１．豊かな山・森林と人との関わりからの物語
- Ｂ−２．金や鉄がもたらした繁栄にまつわる物語
- Ｂ−３．農の歴史と特色ある農産物からの物語

［基本ストーリー］

金や鉄などの鉱物資源を有し、広大な森林を有する山村地域は、各時代において人を集め、独自の生活文化や信仰を培ってきた。また人々は急峻な地形の中を耕作し、温暖湿潤な気候を活かしながら特色ある農林作物を栽培し、地場産業を育成してきた。

［保存活用に向けた文化財等の現状と課題］

- 小田家のおしらがみや伝統芸能の一部が文化財指定されているが、金山や炯屋などの遺構、氷上神社などの山への信仰に関わる宗教施設、松坂堰などの農業土木遺構など、「山の資源と生活」を伝える歴史文化資源などについて調査研究を含めた対応が必要である。
- 活用の観点からは、個別の文化財等の公開と屋外展示整備、歴史文化資源を繋ぐ見学ルート設定、農業・林業の伝統的な地場産業の復活・育成、生活文化の継承などが課題である。

◯関連文化財群Ｃ.「交通・交易・交流にまつわる歴史文化」からのストーリー

- **Ｃ−１．気仙郡と陸海の要衝の発展経緯にまつわる物語**
- **Ｃ−２．運輸・交易の進展が、まちにもたらす物語**
- **Ｃ−３．人々の往来・交流の積み重ねからの物語**

［基本ストーリー］

古代より水陸交通の要路が交わり、山海の資源に恵まれた陸前高田。街道・宿場の整備や市の発生など運輸・交易の進展は、まちを大きく発展させてきた。また様々な人が行き交い、文物が交流する土地は、来訪者を受け入れ、外の世界に開かれた気風を醸成してきた。

［保存活用に向けた文化財等の現状と課題］

- 産業との関わりを示す登録文化財として酔仙酒造（旧片倉製糸場）の建物があったが、津波被害により全壊している。また、人々の交流や交易等に関する歴史文化資源は、地域住民とともに保存活用を検討することが望まれる。
- 古代気仙郡の官衙跡と考えられる小泉遺跡は、遺構検出のための発掘調査・分析を進めることで陸前高田の古代史を解き明かす鍵となると考えられる。将来の保存・活用に向け、文化財指定等の適切な方策が望まれる。
- 近世の街道、浜街道、今泉街道沿いの文化資源や気仙三十三観音などは、地域間の関係性を伝える歴史文化資源であり、積極的な活用が望まれる。

◯関連文化財群Ｄ.「まちとコミュニティにまつわる歴史文化」からのストーリー

- **Ｄ−１．中世城館やわがまちのルーツにまつわる物語**
- **Ｄ−２．中世から現代をつなぐ建物・街並みがもたらす物語**
- **Ｄ−３．コミュニティに継承される無形の文化の物語**

［基本ストーリー］

中世には数多くの城館が置かれ、近世は仙台藩の統治のもと栄えた陸前高田。それらの時代のつながりは、多様な時代・文化の建築や街並み、祭りや食文化に見ることができる。

［保存活用に向けた文化財等の現状と課題］

- 普門寺三重塔ほか気仙大工の技を伝える建造物、気仙町けんか七夕祭りなどの伝統芸能が文化財に指定されている。高田町動く七夕祭りなど、今後も陸前高田を代表する地域文化の掘り起こしと指定に向けた検討が望まれる。
- 近世宿場町の姿を伝えてきた、気仙町今泉地区の街並みが津波により全壊、県指定文化財の大肝入屋敷も全壊した。大肝入屋敷再建、道路形状、街道沿いの街並みなど、歴史文化を活かしたまちの復興に向けた取組みが望まれる。
- 城館遺構など、陸前高田の中世の歴史を伝える遺跡・遺構等については、充分な調査の実施や文化財指定、公開に向けた取組みが望まれる。
- 活用の観点からは、歴史文化資源を繋ぐ見学ルート設定、生活文化の継承、食文化や伝統芸能の学習・観光活用、地域の民話・伝承の継承などが課題である。

表３：歴史文化資源の概要と相互の関連性

				市全域	高田町	気仙町（今泉）	気仙町（長部）	広田町	小友町	米崎町（浜田）	米崎町（勝木田）	矢作町	竹駒町	横田町
関連文化財群Ａ	海と川にまつわる歴史文化	広田湾と気仙川水系の恵みがもたらす物語	・三陸の豊かな海と広田湾の恵み ・気仙川水系の水資源 ・海岸への定住と集落の形成	広田湾、気仙川	気仙川、貝畑貝塚	気仙川	広田湾、二日市貝塚、牧田貝塚	広田湾、中沢浜貝塚、大陽台貝塚	広田湾、門前貝塚、獺沢貝塚、雲南遺跡	広田湾、川内遺跡	広田湾、堂の前貝塚	気仙川、矢作川、女神洞窟遺跡等、愛宕下遺跡等	気仙川、細根沢遺跡、軍見洞遺跡	気仙川、釘の子遺跡、友沼遺跡
		漁港と漁労の歴史にまつわる物語	・漁村の形成と浜の賑わい ・漁業の発達 ・海辺の生活文化	沿岸部の漁労の歴史、漁労用具、漁神（恵比須講、金毘羅、竜神、鯨神）信仰、浜言葉	定置網、道慶翁之碑	鮎・鮭等の川漁	長部、要谷漁港、（まき網）、定置網、養殖漁業・中野翁頌徳碑	泊、六ヶ浦、大陽、袖野漁港、定置網、養殖漁業、鮃一本釣り ・小松潮流翁碑 ・佐々木大三朗翁頌徳碑 ・熊谷翁積徳碑	只出、両替、矢の浦、獺沢漁港、定置網、養殖漁業、（海苔養殖）	脇の沢漁港、養殖漁業、定置網、（海苔養殖）	脇の沢漁港（勝木田地区）、養殖漁業、（海苔養殖、定置網）	鮎・鮭等の川漁	鮎等の川漁、サケの大助伝説	鮎等の川漁
		海・川の災害と復興の歴史、教訓の歴史に係る物語	・津波災害と復興 ・気仙川と洪水 ・減災・防災と復興に取り組んだ人々	津波・洪水等の自然災害の爪痕	高田松原（菅野杢之助翁頌徳碑）	高田松原（松坂新右衛門定宣顕彰碑）	津波記念碑	津波記念碑・津波教訓碑、津波溺死者供養碑	津波溺死者供養碑	大津波記念之碑				舞出御前
関連文化財群Ｂ	山とその恵みにまつわる歴史文化	豊かな山、森林と人々との関わりからの物語	・森林資源と管理、活用 ・林業と木材生産 ・地域のランドマークである山とのかかわり	地区のランドマークとなる山々・丘陵地、化石産地	氷上山、氷上神社、氷上花崗岩、製材業	横手山、製材業	熊谷茂三郎翁碑	大森山、黒崎海岸の大船渡層群と広田石英モンゾニ岩の接触部	箱根山、仁田山	氷上山、箱根山、姥石伝説、氷上花崗岩	箱根山	原台山、飯森・雪沢化石産地、製材業	氷上山、氷上花崗岩、壺の沢変成岩、（製材業）	雷神山、雷神様、氷上花崗岩、小坪沢化石産地、荻原兼吉翁顕徳碑
		金や鉄がもたらした繁栄にまつわる物語	・古代からの金氏の活躍 ・金山のもたらした繁栄 ・製鉄遺構と炯屋の里						中里炯屋跡	重倉金山跡		雪沢・枡内・太子金山跡、湯漬畑窯跡	玉山金山跡	吉ケ沢鉄山跡、御鍛冶場跡
		農の歴史と特色ある農産物からの物語	・新田開発と農業の発展 ・作物栽培と地場産業 ・農山村と生活文化	椿油や気仙茶等の伝統的な農産物と産業、用水（堰とため池）	（因幡堰）、ため池	製茶、ため池		ため池	雲南隧道、堰並千間、製茶、ため池	果樹栽培（リンゴ・ナシ・ブドウ）、熊谷福松・吉田勘之助翁頌徳碑・ため池	果樹栽培（リンゴ・ナシ・ブドウ）、製茶、ため池	銀蔵堰と隧道	松阪堰、ため池	ため池、舞出の大堰
関連文化財群Ｃ	交通・交易・交流にまつわる歴史文化	気仙郡と陸海の要衛の発展経緯にまつわる物語	・古代の三陸地方と海道を征した人々 ・古代の気仙郡 ・奥州の脇街道と宿場		（川原一里塚）、浜街道、高田遠野街道、高田宿、小泉遺跡、武日長者伝説	荒川一里塚、（川口一里塚）、今泉街道、今泉宿、浜街道、蕨手刀	浜街道	泊港	蕨手刀、常膳寺（気仙三観音）	佐野一里塚、浜街道		小黒山一里塚、坂下一里塚、湯漬畑一里塚、（二又一里塚）、今泉街道、経壺、内耳鉄鍋、蕨手刀、観音寺（気仙三観音）	（東前一里塚）、高田遠野街道、さし鍋	(南行一里塚）、本宿一里塚、高田遠野街道
		運輸、交易の進展がまちにもたらす物語	・市の発生 ・浜方、陸方の交易と商人たち ・近代交通の発達		高田市場、市神様、大船渡線高田駅	今泉市場	長部港(東京湾汽船）、(二日市）	泊港	大船渡線小友駅、（三日市）	大船渡線脇の沢駅、脇の沢港、（三陸汽船）		大船渡線矢作駅	大船渡線竹駒駅、（国鉄バス）	(南行一里塚）、本宿一里塚、（三日市）、（国鉄バス）
		人々の往来、交流の積み重ねからの物語	・異文化との交流 ・行き交う人々、開かれた気風 ・巡礼の道	気仙三十三観音の観音巡り、気仙大工・左官	大石観音、氷上本地、坂口観音、浄土寺	泉増寺、金剛寺、ビスカイノ寄港	古谷・要谷・上長部観音	小舘観音、船玉碑	常膳寺、田束観音、中吉丸	普門寺	立山観音、中吉丸	観音寺、馬頭観音	延命寺、正覚寺、羽縄観音、「鮭の大助」伝説	常光寺、平栗福寿庵
関連文化財群Ｄ	まちとコミュニティにまつわる歴史文化	中世城館やまちのルーツにまつわる物語	・55の中世城館 ・仙台藩の統治と高田、今泉の発展 ・わが町や集落のルーツ	金氏・千葉氏等の城館跡	高田城、八幡舘		二日市城、要谷舘、中世板碑	高舘(広田城）	蛇ケ崎城、中世板碑	米ケ崎城、中山舘	中世板碑	鶴崎城	壺舘、古舘、花輪舘	あかまい館、本宿館、三日市舘
		中世～現代をつなぐ建物、街並みがもたらす物語	・中世に起源をももつ気仙の寺社建築 ・大肝入り屋敷と今泉の街並み ・気仙大、左官の活躍		天照御祖神社、八坂神社、市神社、本称寺、浄土寺、光照寺	諏訪神社、今泉天満宮、龍泉寺、金剛寺、泉増寺、妙恩寺、大肝入屋敷、足軽屋敷、代官所跡	月山神社、鹿島神社、長圓寺	黒崎神社、鶴樹神社、稲荷神社、御伊勢堂、慈恩寺	八幡神社、熊野神社、稲荷神社、華蔵寺、正徳寺、常膳寺、善性寺	天照御祖神社、普門寺	秋葉神社、薬師堂、立山観音、松月寺	天照御祖神社、駒形神社、観音寺、圓城寺、閑薫院宥健尊師堂	竹駒神社、玉山神社、無極寺、正覚寺、延命寺、荘厳寺	熊野神社、八幡神社、山神社、常光寺、長徳寺
		コミュニティに継承される無形文化財の物語	・市内各地の祭り ・コミュニティに受け継がれる民俗芸能 ・食文化と郷土料理 ・各地域に引き継がれる講文化（庚申講・恵比須講・金毘羅講等）	オシラガミ・カマガミサマ等の信仰と各地区の民俗芸能、庚申・恵比須・金毘羅講等、がんづき、ゆべし、ひっつみ等の食文化	動く七夕、天照御祖神社、氷上神社、八坂神社等の祭り、虎舞・権現舞等	けんか七夕、諏訪神社の祭り、中井獅子舞、仲町虎舞等	長部湊七福神舞、要谷たるこ踊り、二日市虎舞、月山神社の祭り、上長部大名行列	広田御祝、根岬梯子虎舞、虎舞・権現舞等、根岬・喜多七福神舞、黒崎神社、鶴樹神社の祭り、小袖大名行列	田束念仏剣舞、（門前七福神舞）、三日市虎舞、海上七夕、八幡神社、熊野神社の祭り、虎舞・権現舞・獅子舞等	動く七夕、地竹沢虎舞、脇の沢虎舞、天照御祖神社の祭り、虎舞・権現舞・獅子舞等	勝木田大名行列、秋葉権現舞、（動く七夕）、秋葉神社の祭り	生出神楽、生出鹿踊、三の戸剣舞、中平神楽、（行灯七夕）、天照御祖神社の祭り、虎舞	竹駒神社の祭り、新田梯子虎舞、虎舞・権現舞等、壺の沢大名行列	槻沢剣舞、舞出鹿踊り、槻沢梯子虎舞等、熊野神社の祭り、かにのふわふわ料理

（地区の順は、陸前高田市区長に関する規則（昭和 35 年）に記載された行政区順とした）

２．活用を急ぎたい陸前高田らしい歴史文化資源の抽出

陸前高田市は、震災により大きな被害を受けたが、あらためて陸前高田の歴史文化を掘り起こして現状を確認し、まちづくりの展開に歴史文化資源の保存活用をつなげていくことが重要である。各時代にわたって、様々な活動や、人々の往来があった陸前高田は、三陸地域の豊かな自然と資源に恵まれた地域だった。こうした各時代の歴史の意味を紐解き、「陸前高田らしさ」の特性を明らかにしながら、これまでに知られていた歴史文化をより重層的に捉えつつ、歴史文化資源の保存活用を行っていく視点が大切である。また、現代の生活文化につながる特性を掘り起こして明確化することは、市民にとって自らの故郷の特徴を理解しやすくし、来訪者にも分かりやすく紹介する上で、欠くことのできない視点である。

これまでに、陸前高田市文化財等保存活用計画の策定に向け、市内における歴史文化資源の活用を念頭に、各分野の専門家による調査を実施してきた。以下の内容は、「陸前高田らしさ」の特性を踏まえ、自然や歴史文化資源の活用に向け、各時代の歴史文化で特に注目される事項とともに、早期に活用を進めたい歴史文化資源をまとめたものである。

○縄文・弥生
～縄文・弥生の遺跡から、豊かな資源を背景とした当時の生活の営みを読み解き活用する～

・ 全国的に見ても、陸前高田市を含む三陸沿岸貝塚群は、縄文時代の漁撈文化を研究する上で重要な貝塚が多く所在し、その学術的価値は高く評価されている。これまでの発掘調査結果からみても縄文時代の人々の生活が豊かな三陸の海の恵みによって支えられていたことが分かる。

南の黒潮と北の親潮が出会う三陸海岸の海が縄文時代の漁撈文化を高度に発達させ、水産日本の基礎を育んだといわれているが、その代表的な貝塚が広田町の中沢浜貝塚で、縄文時代における墓域の存在、土器棺墓、貝輪を装着した人骨、赤色人骨など考古学史的にも重要な発見がなされ、昭和９年に国の史跡として指定を受けた。

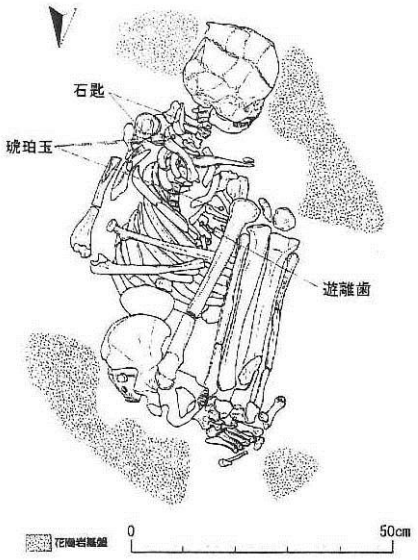


図５：中沢浜貝塚出土人骨（縄文中期）
1997 年度の発掘調査で発見された 20 代前半の女性。ほぼ完全な状態で出土し、副葬品に琥珀玉、石匙がある。保存状態も非常に良好である。

【保存と活用の方向性】

・ 各遺跡の立地環境と、遺物の広がりの現状を把握し、発掘遺跡の情報と関連づけることで、

これまでに発掘されていない遺跡の概略情報をまとめることが必要である。

・ 貝塚を伴う遺跡の発掘調査結果を集約し、遺跡全体を復元的に理解することが課題である。加えて、遺跡の特色を誰もが理解できるようにすることが求められる。

・ 専門家による調査は必須であるが、遺跡のある土地の所有者や、地元の市民の力を借りながら調査を進めることが大切である。個別の遺跡情報を集約し、地域的特性を描き出すことも、地域住民の理解を得る上で必要な条件である。

・ 遺跡の意味・意義を市民に理解していただくためには、中核となる遺跡が必要である。そのためには、広田湾の水産資源を生活の基盤とした縄文時代の人々の姿を知る格好の材料である、史跡・中沢浜貝塚が適切と考えられる。誰もが体感的に知る場として、観光資源化する可能性もある。

◯古代

～武日長者伝承から古代からの交易拠点・気仙郡の姿を読み解き活用する～

・ 陸前高田に残される代表的な伝承として、「武日長者」がある。この伝承がなぜ当地に伝えられているのかを解明することは、古代の気仙郡の歴史文化の特性を明らかにする事につながると考えられる。「武日長者」は、ヤマトタケルの東征に従ってきた「大伴武日連」の伝承と見られる。市内に残る糠の森、畳石、姉歯橋などに関する伝承に加え、姉歯の松に係わる伝承は、古代の人・モノの貢進ルートを推測する貴重な史料と考えられる。

図６：武日長者伝承と朝日姫・夕日姫の都へのルートの想定

・ 『日本後紀』には、弘仁元年（810 年）に渡嶋の狄（てき）二百余名が来着したことが記録されており、気仙郡が北方交易の拠点となっていたと考えられる。また、『源平盛衰記』には、気仙郡を含む地域を知行した平重盛に、気仙郡から金千三百両が届けられたとあり、気仙地方は金を含む鉱物資源の集積地となっていたと考えられる。

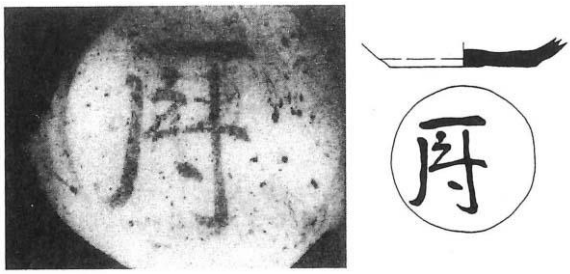


図７：小泉遺跡出土の厨の文字の残る墨書土器

・ 高田町にある小泉遺跡からは、８世紀～９世紀にわたる、大量の墨書土器が出土した。「厨」と書かれた墨書土器が出土したことで、小泉遺跡が古代官衙関連の施設・機能を示す可能性を見ることができる。

○中世

～市内の中世の遺構・遺物から陸前高田の中世を位置づけ活用する～

・ 陸前高田の歴史を伝える中世の文書は、ほとんど残されていないが、当時の歴史を考える素材は、市内に豊富に残されている。

・ 陸奥国の在来の領主として、気仙郡司の系譜をひく金氏がある。陸前高田の中世史を考える上で、金氏の展開を再構成することが課題である。前九年合戦から奥州合戦にいたるまで、中世においても磐井・気仙地域に拠点を持った金氏は、平泉藤原氏の膝下勢力の中でも大きな比重を占めていたと想定される。金氏の活動をつたえる遺構として、横田町、矢作町、気仙町などに、当時の経塚が残されており、今後の調査が望まれる。

・ 中世に入り、関東の有力御家人である千葉氏がこの地域に展開したが、千葉氏を含む当時の重層的で多様な人間関係、水運を介した沿岸部と北関東とのつながりを探っていくことも課題である。

・ 陸前高田市内には、中世の板碑（13 世紀前半に関東地方から始まったと考えられている中世の石製供養塔の一種）が、現在不明なものを含め、11 点確認されている。これらは、中世の信仰や被供養者・造立者のあり方を知ることのできる貴重な史料であり、今後の調査が望まれる。

・ 市内には多数の中世城館があるが、二日市城・高田城・米ヶ崎城のような複数の曲輪を持つ大規模な城館に加え、小規模な中世城館についても、歴史的な位置付けを考えていく必要がある。

図８：花館跡の発掘状況

【保存と活用の方向性】

・ 陸前高田市の中世を明らかにする調査研究が必要である。調査・保存・活用に際しては、市民とともに検討していく必要がある。議論を重ねていくための基礎的なデータベース作成も必要である。

・ 経塚、板碑などの中世の遺構・遺物については、さらなる調査が望まれる。

・ 大規模な中世城館については、陸前高田市の歴史文化を学ぶための最良の題材であり、保存・活用のための整備の進展が望まれる。

○現代の民俗
～民俗の読み解きから現代のコミュニティのあり方を考える～

・ 津波常襲地である陸前高田市の沿岸集落では、リアス式海岸の岬状の尾根が部落の境界としての性格を持ち、行政区よりも部落・コブラクと呼ばれる単位が年中行事や自治を担ってきた。また、過去の津波の際にも、築堤や高台への集落移転が行われてきたことも、集落景観を形作ってきた要素である。

図９：気仙町湊における津波の痕跡と市街地拡大

・ 根岬地区、長部地区では、観音講と呼ばれる女性を構成員とする講集団が注目される。信仰の上では、根岬では修験的要素が、長部では観音菩薩信仰が強く現れている。また、経済的な補助機能にも違いがある。

図 10：小屋観音堂と道内に上げられた「お幕」

・ 陸前高田市内では、広田半島の広田町、小友町に特有の、「行屋＊1」と呼ばれる様々な講や集落活動の拠点がある。行屋は、草分けの旧家を中心とする集落の人々が集い、飲食を共にしながら、多様な神仏に祈願する忌み籠もりの場だった。今日では、公民館などに機能の多くが代替され、衰退している例もあるが、集落の人々が親交を深める場として、多くの行屋が継承されている。行屋は多様な祭祀の場であるが、八日行、ウジガミ、オシラサマの祭祀、ミチビキ地蔵信仰など、宮城県北部や東北広域とつながる祭祀が行われてきた。

・ 市域の一部では、講と呼ばれる男性中心の社会組織が、現在でも地域社会の中で重要な組織となっている。村落全体を対象としたもの、コブラクを中心としたもの、マケ*2 と呼ばれる本分家関係にもとづくものなど、多様なものがあり、旧仙台藩領特有の「契約講」に比べると、信仰に基づく講が多く見られる特徴がある。今回調査した信仰を中心とした講は、部落やコブラクの単位にすべてが収斂せず、地域の祭祀など信仰によって範囲が決まる特徴がある。

図 11：越田の行屋

図 12：志田の行屋の祭壇

【保存と活用の方向性】

・ コブラクのような集落単位が、近世史料の「屋敷」と呼ばれる単位とどうつながるのか、また、津波による集落移動の実態をさらに深く調査・検討することが課題である。

・ 観音講のような女性組織に関する民俗資料は少なく、三陸地方という広域から見た分布なども含めた調査が望まれる。従来から広く知られていた男性による社会組織に加え、女性の社会的役割に留意することで、社会の全体像を知ることができると考えられる。

・ 行屋については、草分けの家とウジガミ、オシラガミ祭祀の関係を読み解くことで、集落の開発の経緯を明らかにすることが望まれる。また、漁撈など生業の伝承の場、祭りの継承の場としての役割にも注目していく必要がある。

・ 今回調査された信仰に関する講に加え、信仰によらない講組織についても、集落間の係わりや人どうしのつきあいを明らかにする上で、さらなる調査が望まれる。また、大祭礼と呼ばれる、神輿渡御と直接係わらない部落も芸能を奉納する祭礼形式は、宮城県側より旧南部藩領につながる民俗である。民俗芸能の地域コミュニティの中での位置づけの大きさは、震災後いっそう注目されており、こうした祭礼形式の調査も望まれる。これらの調査を進めていくことで、復興後の地域社会のあり方を深めていくことが大切である。

*1：「ギョウヤ」は、「ジョウヤ」とも発音され、「浄屋」の文字が当てられることもあると言われる。

*2：「マケ」は「マキ」、「マギ」とも発音され、本家の名字をとって「○○マキ」、「○○マギ」と呼ばれることも多い。

３．陸前高田市の文化財等の被災状況

（１）陸前高田市における文化財等被害の概況

東日本大震災により、陸前高田の街は大きな被害を受けた。陸前高田市立博物館と海と貝のミュージアムの２つの市立博物館、埋蔵文化財保管庫、図書館の４施設が被災し、収蔵物が大きな被害を受けたことに加え、市内各地の歴史文化資源もまた被災した。

陸前高田市教育委員会では、震災後、文化財等の被害状況把握を実施し、博物館を中心に文化財レスキューに取り組んできた。国・県・市の指定文化財に加え、身近な地域で受け継がれてきた石碑、各家庭で祀られてきたオシラサマ・カマガミサマ、地域コミュニティに継承されてきた祭礼・伝統行事などの無形民俗文化財、陸前高田を代表する歴史文化資源が、地震やそれに続く津波により被災している。

震災からの復興に向け、地域の歴史文化資源を今後も継承していくため、被災文化財等の復旧・復興、中長期的な地域コミュニティの継承活動支援などに取り組んでいく必要がある。また、復興により大きくまちの姿を変える浸水被災地では、以前の場所に文化財等を復旧・復元することが難しい場合もあることから、今後の継承のあり方を復興対策局や都市整備局などの関連部局と連携しながら検討していく。

◯震災以降に実施された被災状況調査経緯

指定文化財被災状況調査（H23 年度）

調査機関：陸前高田市教育委員会

・ 指定文化財の被災状況をリスト化、それぞれの文化財について被災前及び現在状況の写真、概要等をシートに構成して整理。

文化財震災被害状況調査（H23 年度）

調査機関：陸前高田市教育委員会、陸前高田市立博物館

・ 「おしらさま・かまがみさま」、「石碑」、「虎舞」について、現地確認、関係者への聞き取り調査を実施。写真、地図、リスト、調査シートに整理。

東日本大震災民俗文化財現況調査（H25 年度）

調査機関：文化庁、東日本大震災民俗文化財現況調査実行委員会

・ 被災地域全体を扱う調査であり、陸前高田市の 20 件の無形民俗文化財が調査対象となっている。陸前高田市においては、平成 24 年９月に聞き取り調査が行われ、概要、被災状況、復旧・復興の状況がまとめられている。

（２）分野別の文化財の被災状況

ア）指定文化財の被災状況

［文化財の指定状況］

陸前高田市内の指定文化財は、国指定の史跡・中沢浜貝塚や名勝高田松原など９件、県指定の吉田家住宅や気仙町けんか七夕祭りなど 11 件、市指定の 32 件を合わせ、52 件存在する。特に、市指定のうち半数の 16 件は、各地域の伝統芸能など無形民俗文化財で構成されており、その他分野の文化財に指定を広げていくことが課題である。

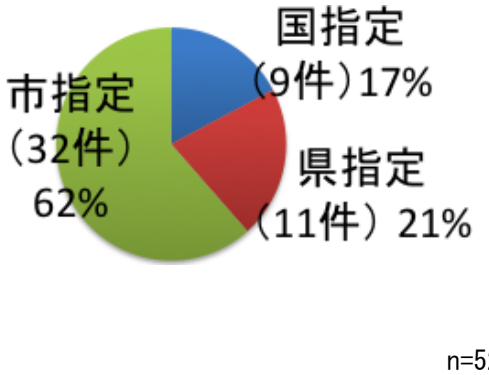


図 13：指定の種類

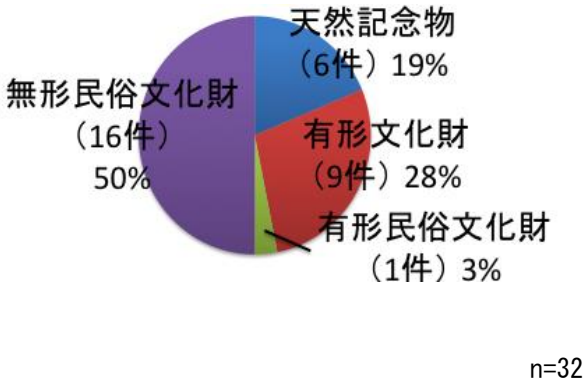


図 14：市指定文化財の種類

［被害状況］

指定文化財のうち、３割強にあたる 18 件が、東日本大震災により被害を受けた。

被害を受けた文化財のうち、流失（８％・４件）、一部流失（８％・４件）、海水損（８％・４件）と、津波による被害が大きいことが特徴である。

大きな被害を受けた文化財として、酔仙酒造の建造物（国登録有形文化財・全壊・登録抹消）、高田松原（国指定名勝・滅失）、吉田家住宅（県指定有形文化財・全壊）などがあり、伝統芸能などの無形民俗文化財の用具も流失等の被害を受けた。

有形の文化財については、市立博物館等により、文化財レスキューの作業が続けられている。

※被災状況調査出典：『指定文化財被災状況調査（H23 年度）』　調査期間：陸前高田教育委員会

図 15：被災状況の例：酔仙酒造本社事務所（国登録有形文化財）

表４：指定文化財の被害状況一覧

No.	指定内容	指定の種類	種　別	名　　称	被害状況	指定年月日
1	国指定	史跡		中沢浜貝塚	**一部法面崩落**	昭和 9 年 1 月 22 日
2		名勝		高田松原	**滅失（指定継続）**	昭和 15 年 11 月 13 日
3		天然記念物	動　物	椿島ウミネコ繁殖地		昭和 9 年 12 月 28 日
4		天然記念物		蛇ヶ崎		昭和 11 年 12 月 16 日
5		天然記念物	植　物	華蔵寺の宝珠マツ		昭和 10 年 12 月 24 日
6		登録有形文化財	建造物	酔仙酒造本社事務所	**全壊、登録抹消**	平成 11 年 8 月 23 日
7				酔仙酒造守衛所		
8				酔仙酒造購品及び用度品倉庫		
9		登録有形民俗文化財		陸前高田の漁撈用具	**一部流失、破損**	平成 20 年 3 月 13 日
10	県指定	名勝及び天然記念物		青松島		昭和 44 年 6 月 6 日
11		天然記念物		常膳寺の姥杉		昭和 44 年 6 月 6 日
12		天然記念物		普門寺のサルスベリ		昭和 56 年 12 月 4 日
13		有形文化財	建造物	普門寺三重塔		昭和 50 年 3 月 4 日
14		有形文化財	建造物	吉田家住宅	**全壊**	平成 18 年 9 月 26 日
15		有形文化財	絵　画	絹本著色愛染明王画像		昭和 49 年 2 月 15 日
16		有形文化財	彫　刻	木造伝聖観音菩薩坐像		昭和 49 年 2 月 15 日
17		有形文化財	工芸品	銅鰐口	**海水損**	昭和 49 年 2 月 15 日
18		有形文化財	古文書	吉田家文書	**海水損**	平成 7 年 4 月 28 日
19		有形民俗文化財		漆絵曳馬絵馬		昭和 61 年 8 月 26 日
20		無形民俗文化財		気仙町けんか七夕祭り	**流失**	平成 9 年 9 月 2 日
21	市指定	天然記念物		村上道慶塾の赤松	**流失**	昭和 48 年 3 月 1 日
22		天然記念物		タラヨウの巨木		昭和 48 年 3 月 1 日
23		天然記念物		円城寺の枝垂性トウヒ		昭和 48 年 3 月 1 日
24		天然記念物		龍泉寺のモミジ	**枯死**	昭和 62 年 7 月 25 日
25		天然記念物		華蔵寺のモミ	**（10 年前の台風で上 3 分の 1 が折れている）**	平成 5 年 6 月 1日
26		天然記念物		玉御前の石割ケヤキ		平成 16 年 8 月 24 日
27		有形文化財		黒崎神社の懸仏		昭和 48 年 3 月 1 日
28		有形文化財		光照寺の梵鐘		昭和 48 年 3 月 10 日
29		有形文化財		金銅装双塔文笈	**一部残存**	昭和 62 年 12 月 1 日
30		有形文化財		青銅製さしなべ	**海水損**	平成 5 年 6 月 1 日
31		有形文化財		毛抜形蕨手刀	**海水損、一部欠損**	平成 5 年 6 月 1 日
32		有形文化財		算額	**破損、一部流失**	平成 5 年 6 月 1 日
33		有形文化財		常膳寺観音堂		平成 5 年 6 月 1 日
34		有形文化財		閑董院宥健尊師堂		平成 6 年 2 月 10 日
35		有形文化財	考古資料	米谷欣司氏寄贈考古資料	**一部流失**	平成 16 年 8 月 24 日
36		有形民俗文化財		小田家のおしらがみ		昭和 48 年 3 月 1 日
37		無形民俗文化財		槻沢剣舞		昭和 53 年 5 月 27 日
38		無形民俗文化財		舞出鹿踊		昭和 53 年 5 月 27 日
39		無形民俗文化財		生出神楽		昭和 53 年 5 月 27 日
40		無形民俗文化財		雪沢田植踊		昭和 53 年 5 月 27 日
41		無形民俗文化財		二日市寅舞		昭和 53 年 5 月 27 日
42		無形民俗文化財		根岬梯子虎舞	**練習用梯子8mのみ流失**	昭和 53 年 5 月 27 日
43		無形民俗文化財		長部湊七福神舞	**全て流失**	昭和 56 年 6 月 3 日
44		無形民俗文化財		要谷たるこ踊り		昭和 56 年 6 月 3 日
45		無形民俗文化財		三ノ戸剣舞		昭和 56 年 6 月 3 日
46		無形民俗文化財		田東念仏剣舞		平成 6 年 2 月 10 日
47		無形民俗文化財		中平神楽		平成 8 年 6 月 25 日
48		無形民俗文化財		生出鹿踊		平成 8 年 6 月 25 日
49		無形民俗文化財		広田御祝い	**一部残存**	平成 21 年 3 月 26 日
50		無形民俗文化財		本宿梯子虎舞		平成 21 年 3 月 26 日
51		無形民俗文化財		新田梯子虎舞		平成 21 年 3 月 26 日
52		無形民俗文化財		槻沢梯子虎舞		平成 21 年 3 月 26 日

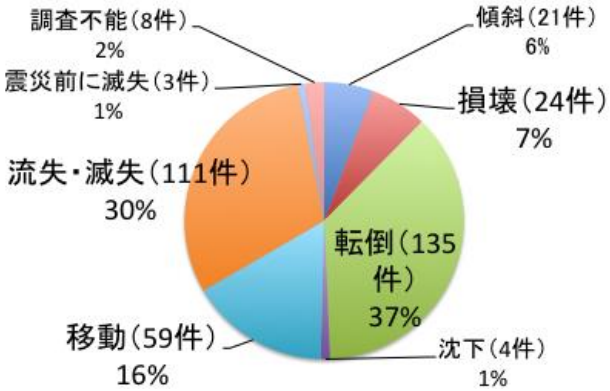
イ）石碑の被災状況

浸水被災地域を中心に、身近にあった石碑が大きな被害を受けた。石碑は、地域コミュニティや信仰の歴史を伝えるものとして、価値の高い歴史文化資源である。浸水被災地域等の大規模な復興事業の対象地に存在する石碑を、復興後のまちにいかに受け継ぎ、地域の歴史文化をまもり伝えていくのかが課題である。

平成 23 年度の調査対象となった 1,673 件の石碑のうち、およそ２割にあたる 365 件が震災により被害を受けている。被災した石碑のうち、３割が流失・滅失しているが、残りの７割は、移動、転倒、損壊などの被害を受けつつも、現在も残されている。

n=1673

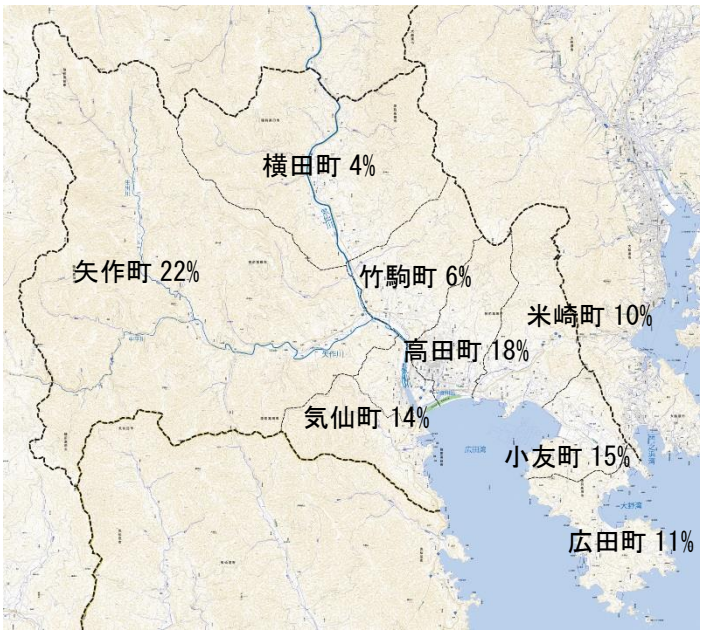
図 16：石碑の被災状況

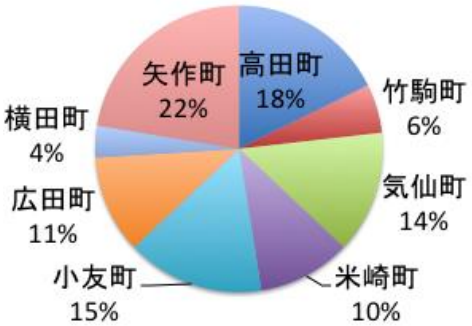


n=365

図 17：被災した石碑の被災内容内訳

被災した石碑の地域別分布を見ると、高田町、気仙町、広田町、小友町、米崎町の沿岸部に集中していることが分かる。津波浸水地域では、大部分の石碑が何らかの被害を受けている。また、内陸部でも被害を受けた石碑が存在し、特に矢作町では転倒を中心に 80 件の石碑に被害が出ている。





n=362

（震災前に滅失しているものを除く）

図 18：被災した石碑の地域別分布

※被災状況調査出典：『文化財震災被害状況調査（H23 年度）』　調査機関：陸前高田市教育委員会、陸前高田市立博物館

ウ）オシラサマ、カマガミサマの被災状況

オシラサマやカマガミサマは、イエの守護神として各家庭に祀られてきた。

オシラサマは、被災前の陸前高田市立博物館の調査により、陸前高田市内に 107 件が確認されている。これは、釜石の 73 件、遠野の 68 件をはるかにしのぎ、単独の自治体としては最多となっている。オシラサマは、陸前高田を代表する歴史文化資源といえる。

かまどの神様を祭る風習は全国に分布しているが、市内のカマガミサマのように、家の炉やかまどの近くに大きな面を掲げて祀る風習は、旧仙台藩領に限られる特徴的な文化である。カマガミサマは、家の母屋を新築する際に、大工や左官によってつくられることから、気仙大工・左官の
技との関連も指摘できる。

図 19：オシラサマの広域分布

震災後に被災調査が行われたのは、オシラサマ 71 件、カマガミサマ 8 件である。震災によりおよそ 4 割が被災し、うち 19 件が流失・位置不明などとなり失われている。被災した対象のおよそ 5 割が気仙町に集中するなど、家屋とともに流失したものが多くある。

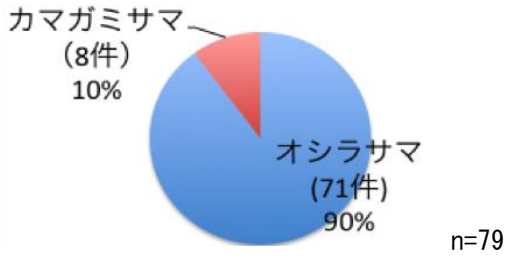


図 20：被災調査の対象内訳

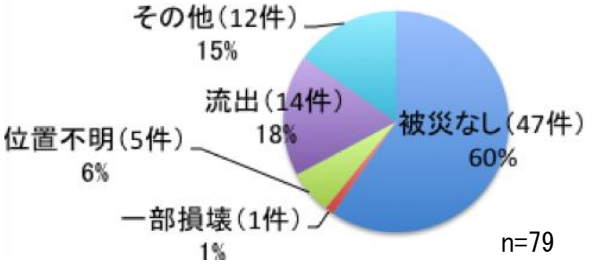


図 21：オシラサマ・カマガミサマ被災状

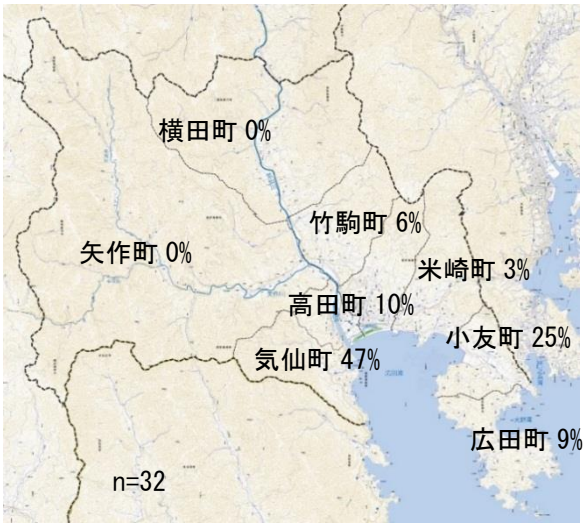


図 22：被災したオシラサマ・カマガミサマの地域別分布

※被災前のオシラサマ調査・広域分布図の出典：佐藤正彦（1997）「陸前高田のオシラサマ」 東北民俗学研究 岩崎敏夫米寿記念 第五号抜粋
※被災状況調査出典：『文化財震災被害状況調査（H23 年度）』 調査機関：陸前高田市教育委員会、陸前高田市立博物館

エ）無形民俗文化財（伝統芸能等）の被災状況

［文化財の指定状況］

市内の各地区において、虎舞、剣舞など、様々な伝統芸能が継承されてきた。

震災により、用具の流失など、36%の無形民俗文化財に被害が及んだ。沿岸部では、用具を保管していた公民館ごと流失した例が多く、一部では町内会が解散するなど、伝統芸能の継承が危ぶまれるものもある。

被害を受けた無形民俗文化財のうち、地域の継承者の努力により現在までに復旧が確認されているのは、17 件（63%）である。

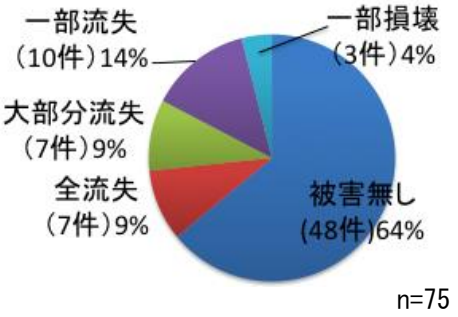


図 23：民俗文化財の被災状況

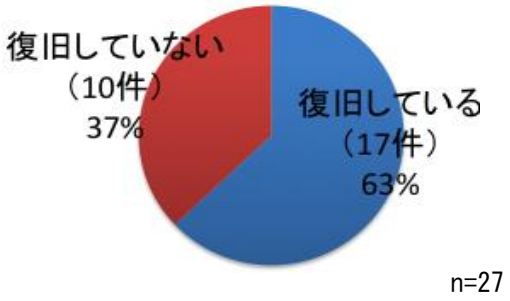


図 24：民俗文化財の復旧状況

［復旧上の課題］

一部の無形民俗文化財については、復旧・復興上の課題を調査している。これによると、調査対象となった 20 件の無形民俗文化財のうち、4 割において後継者不足の問題があげられている。被災により用具等を再び買いそろえねばならないことに起因する資金不足の問題も深刻だが、後継者不足の問題は震災前から指摘されていた問題である。無形民俗文化財の継承に向け、地域の継承団体を核とした担い手育成に、長期的に取り組んでいく必要がある。

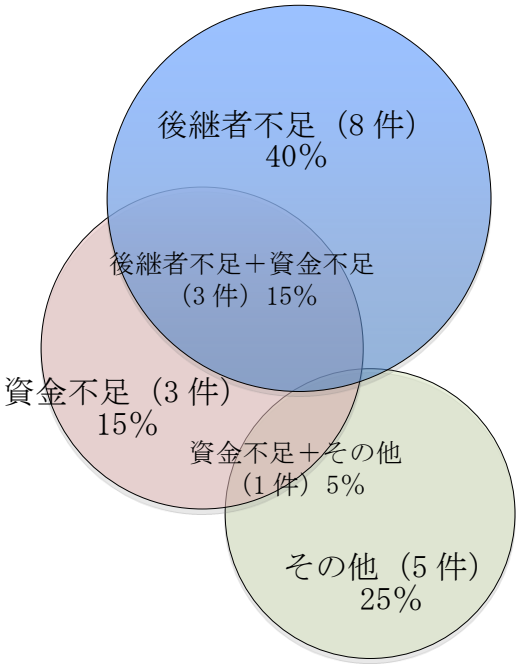


図 25：民俗文化財の復旧上の課題

※被災状況調査出典：『指定文化財被災状況調査（H23 年度）』　調査期間：陸前高田教育委員会
『文化財震災被害状況調査（H23 年度）』　調査機関：陸前高田市教育委員会、陸前高田市立博物館
『東日本大震災民俗文化財現況調査（H25 年度）』　調査機関：文化庁、東日本大震災民俗文化財現況調査実行委員会

※復旧上の課題出典：上記の『東日本大震災民俗文化財現況調査（H25 年度）』による

（３）博物館レスキューの概況

東北地方太平洋沖地震によって引き起こされた大津波により、陸前高田市内の４つの施設（陸前高田市立博物館、海と貝のミュージアム、市立図書館、埋蔵文化財保管庫）が大きな被害を受け、収蔵品が被災した。

平成 26 年５月現在、４つの施設の収蔵品約 56 万点のうち、文化財レスキューにより約 46 万点を回収し、安定化処理・修復が進められている。

非常な困難を抱えて進められた文化財レスキューであるが、こうした大規模な収蔵品の被災は、過去に例の無い事態であった。陸前高田市における文化財レスキューの精神や取組みを次世代に引き継ぎ、未来へつなぐ努力を行うことは、文化財レスキューにご協力いただいた全国の博物館関係者や専門家に対する恩返しとして、また、将来想定される他地域での被災対応の糸口として、日本全国の文化財行政に資する重要な意味がある。

◯一次レスキューの概要

- 平成 23 年３月下旬に一次レスキュー（被災した博物館等からの安全な場所への資料の移送作業）が開始された。４月下旬には、学芸員１名、元博物館長１名、博物館の嘱託職員など 11 名による、陸前高田市側のレスキュー体制を組んだ。また、「学芸員ネットワーク・いわて」のネットワークをもとに、岩手県教育委員会、岩手県立博物館、一関市、遠野市など県内の博物館や教育委員会、陸前高田市の収蔵物に詳しい専門家からの支援を受けながら資料の救出活動が展開された。
- 平成 23 年６月中旬までに、４つの施設の一次レスキューを終え、旧生出小学校および県立博物館を中心に、回収した収蔵物の搬入を終えた。

平成 23 年３月下旬	レスキュー活動の開始
平成 23 年４月１日～３日	市立図書館の資料救出活動開始
平成 23 年４月３日～20 日	海と貝のミュージアム資料救出開始
平成 23 年４月 12 日～５月 11 日	市立博物館の資料救出活動開始
平成 23 年５月 13 日～６月 17 日	埋蔵文化財保管庫資料救出活動開始
平成 23 年６月 17 日	大部分の被災収蔵品の回収作業を終え、旧生出小学校及び岩手県立博物館に搬入を完了
平成 23 年６月 29 日	ツチクジラ剥製標本を筑波の国立科学博物館に搬送
平成 23 年７月 14 日	美術資料の移送（盛岡へ）

◯救出された主な被災資料と二次レスキューの概要

- 一次レスキューの終了した平成 23 年６月中旬以降、二次レスキューが本格化した。二次レスキューは、安定化処理（劣化要因を可能な限り取り除き長期に渡り安定的に保管できる状態に処理すること）や破損箇所等の修復を中心とした作業である。
- 二次レスキューは、文化庁の東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の支援により、全国の博物館及び関連施設、専門家の協力を得ながら進めた。

【歴史資料】

- **吉田家住宅**：吉田家は、藩政時代仙台藩領気仙郡の 24 箇村を統括してきた大肝入だった。主屋は、享和２（1802）年に建造されており、県指定有形文化財となっていた。主屋、付属建物とも流失したが、主屋の部材約 1,000 本が回収され保管されている。
- **吉田家文書**：県指定文化財の 150 点の文書が、市立図書館にて被災したが、４月１日～３日に救出された。泥砂やガラス片等にまみれていたが、県立博物館で安定化処理が行われ、平成 24 年 10 月から２ヶ年計画で、国立国会図書館による抜本修復が行われた。
- **軸物及び書画**：博物館所蔵の、宗宮参治郎氏の手による 300 点以上の石碑の拓本など、貴重な軸物等が回収され、旧生出小学校で応急処置が施された後、救援委員会（東京国立博物館及びNPO 文化財保存支援機構）による安定化処理が施され、NPO 文化財保存支援機構によって抜本修復が続けられている。

図 26：安定化処理が完了した文化 13(1816)年定留（吉田家文書）

【考古資料】

- 考古資料に関しては、市立博物館に 34,000 点が、埋蔵文化財保管庫には出土した遺物及び記録類が、保管されていた。埋蔵文化財保管庫では、平成 23 年４月から６月にかけて救出作業が行われた。その結果として、史跡・中沢浜貝塚出土の遺物、骨角器、銅合金製さしなべ、小泉遺跡出土の「厨」銘墨書土器、市指定文化財である毛抜形蕨手刀など、貴重な資料が救出された。これらの資料については、旧生出小学校で洗浄・乾燥・再整理が行われている他、骨角器は奈良文化財研究所に、金属器は岩手県立博物館に移送され、本格的な修復が進められている。

図 27：市立博物館から救出された直後の考古資料

【民俗資料】

・ **陸前高田の漁撈用具等**:陸前高田市立博物館に所蔵されていた漁撈用具のうち、2,045 点が「陸前高田の漁撈用具」として、平成 20 年に国の有形登録民俗文化財に指定されている。全体の 9 割強に相当する 1,900 点あまりの資料が回収されたが、海水損しており、現在、文化庁の指導のもと安定化処理及び抜本修復を継続している。

図 28:自衛隊協力による大型資料の搬出作業（カッコ船）

・ **気仙地方の大工道具**：陸前高田市立博物館所蔵の大工道具は、気仙大工技を伝える貴重な資料である。回収された大工道具は、鉄部の錆化が進行しており、安定化処理を継続している。

・ **気仙地方の生業用具・郷土玩具など**:陸前高田市立博物館には、農具などの生業に関する民具や年中行事に関連した民俗資料 23,000 点あまりが所蔵されていた。旧生出小学校に搬入されたこれら資料について、農具等は現地において専門機関の指導を得ながら安定化処理を行っている。材質が脆弱な高田歌舞伎で使用したかんざし類、郷土玩具である高田人形などについては、緊急の安定化処理、修復が必要と判断し、文化財保存修復技術の専門家を有する昭和女子大学の協力を得て処置が行われている。

図 29：高田人形の材質強化作業（気仙地方の生活用具･遊具など）

・ **紙製資料**：明治期からの教科書、紙芝居、書簡などの紙製資料は、洗浄によってインク等の流出する資料を除くものについては安定化処理方法が岩手県博物館によって確立され、その技術指導を旧生出小学校で受けながら、作業が進められている。被災した紙製資料の量は膨大であり、旧生出小学校敷地内への冷凍庫設置、民間冷凍庫の借り上げにより、冷凍保管しながら、処理を進めているが、抜本修復までは相当の時間を要する。

・ **美術工芸資料**：油彩画、書、工芸等の美術品 156 件は関係機関・団体の協力により盛岡市内の施設に搬送し、緊急処理が行われ現在県立美術館の保管されており、26 年度から本格的修復を行うこととしている。

【自然史資料】

・ **生物標本**：海と貝のミュージアムでは、約 11 万点の貝類標本のうち、約 9 万点が回収され、旧生出小学校に半数、県立博物館に残りの半数が搬入され、全国の博物館の協力も得つつ、安定化処理が行われた。陸前高田市立博物館からは、昆虫標本、植物標本等を中心に、４万点

図 30：市博物館で被災したチョウ類標本
被災直後（左）と土砂・塩分を除去した後（右）

以上（生物標本の約９割）が救出され、県立博物館及び全国の博物館、大学等研究機関の協力を得て、安定化処理が施された。また、海と貝のミュージアムのツチクジラの剥製標本は、つくば市の国立科学博物館標本資料センターに移送され、安定化処理及び修復が進められている。その他の動物剥製は岡山理科大学、山階鳥類研究所（鳥類剥製）によって、安定化処理、抜本修復が進められている。

・ **地質標本**：陸前高田市立博物館に所蔵されていた地質標本は、日本地質学会、日本古生物学会に所属する標本管理に熟達した全国の地質学系学芸員らによって、平成 23 年に洗浄・乾燥が、平成 24 年に分類・同定作業が進められ、平成 24 年 10 月現在、3,283 点の標本が整理されている。今後未同定の動物群の同定整理が予定されている。

◯文化財レスキューにおける課題点

・ **一次レスキューでは「まず自らが動く」ことが大切**：緊急的な対応が必要な一次レスキューに際しては、早期に地元関係者が立ち上がって活動を開始することが重要だった。加えて、県内の博物館関係者や研究者等、陸前高田市の文化財や収蔵物の特性を知る専門家による支援が重要な役割を果たしたことから、動きの速い地域連携体制を構築し、初動期のレスキュー活動に活かすことも課題である。

・ **文化財レスキュー初動期の体制構築**：今回の被災では、教育委員会職員の多くが殉職し、初期には学芸員１名でレスキュー活動を開始せざるを得ない状況であったため、被災状況の発信や外部への救援の連絡が困難な状況だった。そうした状況を想定し、日常的に、災害の発生を踏まえた体制構築やレスキュー活動のフロー作成等を行っておくことが課題である。

・ **レスキューの優先順位**：回収で最も難しいのは、回収を実施する順序の判断だった。例えば、海と貝のミュージアムの収蔵品の多くは貝類であり、回収対象が判別しやすいため、早期の一次レスキューを実施した。また、市立博物館の昆虫標本、植物標本等のように、腐敗・劣化が進行しやすい資料についても、早期の回収と安定化処理が求められた。こうしたレスキューの優先順位を定めておくことも大切である。

・ **専門的知識を持つボランティアの活用**：海水損という特殊な被害を受けた今回の震災では、急激な乾燥を行わないなど、一次レスキューを含め、専門家による判断・指導が求められる状況だった。したがって、被災時に中心となって文化財レスキューに参加したボランティアは、博物館等の嘱託職員など、ある程度の専門知識のある人材に限定された。こうした被災時に緊急的に活用できるボランティア体制についても、日常的に整備しておくことが課題である。

・ **二次レスキューでは「全国的な関係機関の協力を求める」ことが重要**：二次レスキューでは、泥砂の除去や脱塩などの安定化処理、修復作業などが行われている。安定化処理については、技術が確立されていない点も多く、レスキュー対象の文化財等の特性を見極めな

がら、科学的な処理を含めた専門的な保存技術が必要とされる。そのため、二次レスキューに際しては、救援委員会及び全国の博物館、関係者の協力を得られることが重要であり、より広域的な連携が必要となる。こうした経験を踏まえ、今回の文化財レスキューで得られた技術の蓄積をまとめるとともに、全国的な支援を円滑に受け入れる体制づくりの検討も今後の課題である。

- **長期化する安定化処理**：国際的に例を見ない文化財の海水損は、その方法論を確立しながら安定化処理を進める必要があり、長期化することは必至である。油画、水彩画などの美術資料などをはじめとして処理が困難な特殊資料については早急な方法論の確立が必要である。
- **保管場所の確保**：４つの文化施設から救出された資料は約 46 万点であり、現地においてはこれらをすべて保管できる施設がない現状である。また、今後安定化処理が終了し、抜本修復が行われ資料が再生できてもその返却をすべて受けることは困難である。したがって、協力をいただいている機関等に修復後も経過観察とともに資料保管を依頼している状態である。閉校となった校舎は文化財の保管には劣悪な環境にあるため、今後、保管環境の整備、保管場所の確保が重要な課題となることから、平時からの被災文化財の保管環境、保管場所について検討する必要がある。

文化財レスキューに関する図出典：岩手県立博物館・昭和女子大学光葉博物館『2011.3.11 平成の大津波被害と博物館−被災資料の再生をめざして−』： 2013

４．文化財等保存活用計画

（１）文化財等保存活用の基本理念と基本方針

〇地域文化財等保存活用の基本理念

陸前高田市の自然・歴史文化資源の保存・継承・活用を通じて、市民アイデンティティの育成と、今後のまちづくりや地域の個性である「風景となる自然環境」や「生活文化」の構築につながるよう、基本理念を下のように定める。

［文化財保存活用の基本理念］

伝えよう豊かな風土と生活文化

育もうアイデンティティと誇り

まちづくりに活かそう地域の DNA

世界文化遺産奈良コンファレンス(1994 年)では、歴史文化資源について、「我々の世界の文化と遺産の多様性は、すべての人類にとってかけがえのない精神的および知的豊かさの源泉である。我々の世界の文化と遺産の多様性を保護しおよび向上させることは、人類の発展の重要な側面として積極的に促進されるべきである。」としている。

ここでいう「文化」とは、長い時間の積み重ねのなかで、居住者の生活と深く関わりつつ、その形態や意匠、技術や用途、機能、立地や環境が変容しながらも、市民が継承し、発展させてきた「生きた」ものと位置づける。自然・歴史文化資源においても、市民一人一人の生活文化の経験が積み重なり集合したものが、都市・地域の個性を表現しているものといえる。

本市における文化財等保存活用計画の目的も、まちづくりの目標に資することである。陸前高田市を形成してきた歴史に裏打ちされた「自然・歴史文化資源」の活用により、「先人ののこした歴史と伝統のあるまち・陸前高田市を愛し、豊かな心をもち、広い視野にたって力をあわせ、より住みよいまちづくりに努める」こと、「海と緑と太陽との共生・海浜新都市の創造」などに寄与するものである。

また、1300 年に渡る歴史を積み重ねてきた地域文化、120 年以上の長きにわたりコミュニティを育んできた市域の 8 町（旧 10 か村）の「目に見えない」文化が空間と密接に関わってきた陸前高田市の特性を鑑み、記憶や想い出に残る場所の継承・再生を重視しながら、自然や文化財の保存活用を進めることが大切な観点である。

※「アイデンティティ」とは、ここでは、【陸前高田の人と自然・歴史・文化・産業などの魅力の、発見、認識すること】の意味で使用する。
※「地域の DNA とは」、ここでは、【陸前高田の魅力を未来に引継ぐ力の源泉】の意味で使用する。

◯地域文化財等保存活用の基本方針

基本理念を受け、陸前高田市の歴史文化資源の保存活用を進めるに際しての基本方針を以下のように定める。

［文化財保存活用の基本方針］

豊かな自然・歴史・文化の価値に気づき、つたえ、活かす

基本方針１.「気づき」: ふるさとの豊かな自然・歴史・文化の価値に気づくこと

ふるさとの豊かな自然・歴史・文化の再生・継承は、陸前高田の自然環境や歴史文化を掘り起こし、その特徴を理解し、その価値や魅力に【気づく】ことから始まる。そこで発掘・理解された文化財等を分かりやすく公開展示し、市民一人一人にも【気づいて】いただくことによって、歴史文化資源の価値が受け継がれていく。行政と市民・民間とが連携して自然環境や歴史文化を学ぶ機会を設けることでも【気づき】、もっと知りたい、深く理解したい市民とともに「知」の楽しみを分かち合う、生涯学習に資する情報発信から【気づく】ことも、保存活用を進めるための大切な方策である。

基本方針２.「つたえ」: ふるさとの豊かな自然・歴史・文化の価値をつたえること

【気づく】ことと同時に重視されるのが、文化財の収集保存を通して市民の財産であることを【つたえ】ることである。また文化財等調査に基づき、指定文化財を拡充することの意味を【つたえ】、市民や民間との協働により文化財等をまもり【つたえ】、災害時の文化財の救援・修復体制を拡充するなどの文化財レスキュー体制の整備を【つたえ】ることが、文化財等を再生・継承する施策を市民とともに進めることにつながる。

基本方針３.「活かす」: ふるさとの豊かな自然・歴史・文化の価値を活かすこと

【気づき】、【つたえ】ることに加えて、豊かな自然・歴史・文化をストーリー化して、ふるさとの誇りとして学校教育や社会教育を推進していくことは最も大切な【活かす】ことにつながる。そして、豊かな自然・歴史・文化を活用した新たなブランドづくり・地域づくりも、まちの価値や魅力を【活かす】ことであり、「陸前高田らしさ」を伝える歴史文化をまちづくりや観光に活かしていくこともまた、文化財等を【活かす】重要な方策である。

（２）保存活用の方策・施策

歴史文化資源の保存・継承・活用のための基本方針である「気づき」、「つたえ」、「活かす」の実現のため、以下の 12 の方策を柱とする。本方策に取組む際には、市内各地区の特性に応じた歴史文化資源のまとまりや、地区ごとの事業の展開も考慮しながら、歴史文化資源の保存活用を進める生涯学習の部局だけでなく、多様な部局間連携によって取り組むこととする。

基本方針	１２の方策	施策
気づき	＜総合調査・研究＞ 豊かな自然・歴史・文化を掘り起こす	・ 歴史文化資源の総合目録づくり ・ 重要な文化財等の継続的な研究・調査 ・ 市民グループ等と連携した歴史文化財調査活動支援
	＜展示＞わかりやすく伝える 文化財等の展示公開	・ 屋外展示の拡充による「まちぐるみ博物館」の構築 ・ 市立博物館の再建に向けた、「地域文化」がわかりやすく伝わる展示 ・ 市立博物館の展示体制の充実
	＜学習機会＞行政と民間が協力して 歴史文化の学びの場をつくる	・ 学校教育用の歴史文化資源マップや学年別・分野別資料の制作 ・ 歴史文化資源を活かした地域と学校教育の連携
	＜情報発信＞自然・歴史・文化を 「深く知りたい」欲求に応える	・ 陸前高田市立博物館デジタルミュージアムの開設 ・ 博物館研究紀要および博物館だよりの発行再開
つたえ	＜指定文化財の拡充＞調査に基づき、 指定文化財を拡充する	・ 調査分析に基づく、関連文化財群を意識した戦略的な文化財指定対象拡大・格上げ ・ 「市民登録文化財」制度の新設なども含めた、多様な指定・評価方法の実施
	＜収集保存＞市民みんなの財産である 収蔵物を大切にまもる	・ 博物館における適切な収集保存体制の強化 ・ 埋蔵文化財等に関する適切な記録保存実施 ・ 民有の文化財等の適切な管理にむけたアドバイスの実施
	＜文化財保護・伝承活動＞民間との協働 により文化財等をまもり伝える	・ 伝統行事など、地域活動の継承体制構築 ・ 「民話・伝承の里」づくり活動の実施 ・ 地域コミュニティとともに歴史文化資源をまもり伝える
	＜文化財レスキュー体制の整備＞災害時 の文化財などの救援・修復体制を充実する	・ 震災による陸前高田市における文化財レスキューの記録作成 ・ 恒常的な文化財レスキュー体制の構築
活かす	＜観光＞歴史文化のストーリー性を観光 に活かす	・ 「陸前高田の歴史文化が人を呼ぶ」観光ルートの設定 ・ 観光ガイドや地域の保存活用の担い手との連携
	＜生涯学習＞陸前高田の誇りを伝える 社会教育を推進する	・ 博物館における歴史文化に関する公開講座・イベントの開催 ・ 「博物館出前博物館」や「博物館教室」実施 ・ 博物館による恒常的な学校教育支援の実施
	＜地域づくり＞歴史文化を活用した 新たな陸前高田ブランドの創出	・ 歴史文化による陸前高田ブランド後押し ・ 歴史文化を背景とした地域産品の育成 ・ 気仙大工・左官の伝統技術の継承 ・ 地域の食文化を観光資源としての活用
	＜まちづくり＞歴史文化の薫る まちづくりに展開する	・ 歴史文化基本構想の策定 ・ 地域性の高い歴史文化を育んできた、景観的変化に富んだ風景の継承・復元 ・ 博物館による恒常的な学校教育支援の実施 ・ 豊かな自然・歴史・文化を総体として扱う、総合博物館の再建

図 31：基本方針と 12 の方策

ア）「気づき」

＜総合調査・研究＞豊かな自然・歴史・文化を掘り起こす

陸前高田市の市内各地区は、広田湾や外海・気仙川や矢作川・各地区の山々などの自然環境、農林業や水産漁業などの生業との関わり、海の交易路や陸上の街道などによって、特色ある地域性を形成してきた。こうした周辺環境を含めた歴史文化資源を、生業や生活文化との関わりの中で地域住民が継承してきたことは、今後の保存・継承・活用を考える上でも重要な視点である。

今後、復興事業による地域景観や生活環境の大きな変貌、少子高齢化による農山村の土地利用の変遷などの影響により、従前の生活のなかで培われてきた自然や歴史文化との関わりが希薄になっていくことが懸念される。

このため、陸前高田市のアイデンティティを継承していくための核となる、歴史文化資源を適切に保存・活用することに資する、基礎的な調査と現状把握の取組みを市民とともに継続的に実施していくことが求められる。

◯「歴史文化資源の総合目録」づくり

［保存活用の考え方］

陸前高田市の有形・無形の歴史文化資源を、総合的かつ継続的に把握するため、従来からの「文化財保存台帳」に加え、「自然・歴史文化資源の総合的な目録作成」に取り組む必要がある。

目録は、自然・歴史文化資源の保存活用施策の充実を図るための基礎的資料となる。こうした目録作成は、全国的にも重視されている。指定文化財に限らず市内の自然・歴史文化資源を網羅的に収集する取組みは、早期に実現すべき課題である。

すでに、横田地区では、資源調査活動として地域内の自然や歴史文化に関する資源収集を行い、「横田町資源カード」として数百項目に渡る内容が整理されてきた。こうした活動の今後の継続を支援するとともに、市内各地域でもどうようの取組みを進め、保存活用に向けた地域住民の主体的な取組みの広がりにつながることが期待される。

［保存活用施策の展開方法］

- **自然・歴史・文化に関する歴史文化資源の総合目録作成（短期課題）**：目録作成に際しては、陸前高田市の自然・歴史文化特性を伝えるために重要と考えられる要素を、指定・未指定に関わらず収集・評価・分析を進めていく。個別の自然・歴史文化資源に関する概要・位置・所有者・保存状態などの調査項目に加え、自然・歴史文化の重層性を理解しつつ具体の活用施策に繋げていくため、関連文化財群や、周辺環境との関係についても配慮した調査を実施する。
- **市民と協力しながら目録の拡充を進める（中長期課題）**：目録は、文化財部局のみならず、地域の歴史文化研究グループやNPO、小中学校など市民との協働により内容の充実を図る。

［活用の参考事例］

横田地域農村景観を考える会（陸前高田市横田町）

平成８年に設立された団体であり、当初から、「地元学」による自然・歴史文化資源の発見、首都圏の人を招いた「横田ツアー」、地域の小学校・PTA との連携したイベント実施等が取り組まれてきた。また、収集した地域資源をカード、絵地図化し、パンフレット作成も行われた。活動成果は、「川の駅よこた」設立の動機ともなっている。

図 32：横田町資源カードの例（原本は震災により流失）

○重要な文化財等の継続的な研究・調査

［保存活用の考え方］

地域の自然・歴史文化を適切に保存・活用するため、陸前高田市特有の自然・歴史文化を象徴する文化財等を継続的に調査・研究し、それを基に保存活用施策や、文化財指定の拡充などを検討することが重要である。

［保存活用施策の展開方法］

- **震災復興を契機にあらためて自然・歴史文化資源を掘り起こす調査の実施（浸水被災区域・短期課題）**：復興後のまちに継承していくため、浸水地域を中心とした自然・歴史文化資源の掘り起こしと把握の取組みを進める。復興と関連して緊急の対処が必要な被災文化財等として、「石碑」、「遺跡」、「大肝入吉田家住宅などの建造物」等があるが、「昔話・民話」や「震災体験」など、人々の記憶に関する歴史文化資源を記録し、後世に伝えることも課題である。
- **継続的な歴史文化資源の調査・研究の実施（中長期課題）**：陸前高田の歴史文化を象徴する歴史文化資源には、気仙大工の文化を受け継ぐ建造物等の有形文化財、民具やオシラサマ・カマガミサマなどの有形文化財、貝塚遺跡や中世城館など市内に多数存在する史跡・埋蔵文化財、祭りや伝統芸能などの無形民俗文化財、名勝「高田松原」や天然記念物を含む自然環境や地質・地形、これら文化財等と一体となった文化的景観など、多様なものがある。それぞれの特性に応じた専門家による研究・調査を今後も継続的に実施し、陸前高田市の文

化財等の把握・分析に取り組む。また、現在までに得られている発掘調査等のデータを集約・分析し、各時代の集落や周辺環境の広がりを複眼的に理解することも今後の課題である。また、調査・研究の推進にあたっては、県内外の博物館、大学との連携を今後も進めていく。

［継続的な調査が望まれるポイント１］

陸前高田市の中世を描き出す

調査の進んでいない経塚や板碑（中世の石造塔婆・供養塔）などの古代・中世の遺跡・遺構が数多く市内に見られ、文献資料が少ない地域の中世社会と歴史的展開を復元する上で重要な手がかりと考えられる。古代から当地に存在していた金氏や、中世以降に流入したと考えられる千葉氏など、市内各地の遺跡・遺構を形成したと見られる勢力との関係を含め、陸前高田市の中世の歴史を解明する発掘・調査活動が課題である。

図 33：中世板碑の例
（上長部観音堂の板碑群）

［継続的な調査が望まれるポイント２］

生活に根ざした文化的景観や民俗文化

祭りや年中行事など、日常生活の中にもまもり伝えたい歴史文化資源が多く残されている。各地区を代表する神社と祭りや、いわゆる「行屋」と呼ばれる地域内の集会施設と「講文化」など、地域コミュニティの中で育まれた文化的景観や民俗文化を調査し、次世代に継承していくことが課題である。

また、市内に残される民話・伝承についても、地域特有の歴史文化を伝える大切な資産である。例えば、高田町に残される「武日長者」の伝承は、ヤマトタケルノミコトの東征伝説との関わりが指摘され、豊かな産物を背景に重要な拠点となっていた古代の気仙地方の姿を知る手がかりの一つと考えられる。

［県内外の博物館、大学との研究の推進について］

すでに、県内外の研究者が博物館と連携し、研究だけでなく博物館講座の講師や、特別展示の指導助言をいただくなど、成果を挙げている。今後も、県内外の博物館、大学、研究者との連携を進めていくことが重要である。

こうした連携を進めていく上では、博物館の資料・データ公開等により研究を支援する体制整備を行い、研究者の成果を可能な限り博物館へ還元していただくとともに、本市の自然・歴史,民俗等研究への助言を行っていただけるような仕組みづくりを進めていくことが重要である。

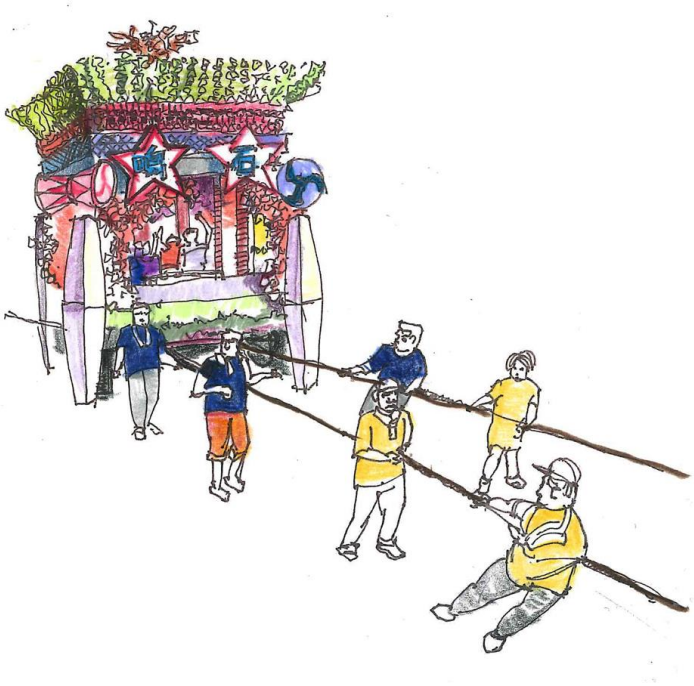
・ **博物館専門研究員制度の拡充（中長期課題）**：被災前の博物館において、調査研究を効果的に推進するための専門研究員制度を実施し、調査研究及び各種講座等の講師としての活動を行ってきた。今後、博物館の再建に併せ、博物館専門研究員制度の拡充を検討する。

［博物館専門研究員制度について］

博物館専門研究員制度は、市民の中から自然、歴史、民俗等専門的な知識や経験を有する方々を博物館専門研究員として委嘱する制度である。これまで、昆虫１名、植物１名、歴史１名、古文書１名の、計４名の専門研究員を委嘱してきた。

専門研究員の活動としては、各分野における研究の推進、博物館各講座の講師としての指導、研究の成果を博物館紀要として発刊し広く公開することなどである。

市民とともに自然・歴史・文化を進めるための基礎的な取組みとして、今後も博物館研究員制度の拡充と活用を進める。



◯市民グループ等と連携した歴史文化調査活動支援

［保存活用の考え方］

歴史文化は、江戸時代以前から続く旧村落や集落を単位とした住民生活の営みの中で継承されてきた。自然・歴史文化資源の保存と歴史文化資源を活かすまちづくりを考える上で、市民の理解と取組みは必須である。

今後も日常的な市民生活のなかで歴史文化が継承されることが望まれるが、少子高齢化の影響と東日本大震災での被害により地域コミュニティの基盤が継承困難になっており、保存活用の担い手不足が懸念される。

こうした状況に対応すべく、意欲的な市民・団体などによる精力的な取組みも見られる。すでに、「陸前高田古文書研究会」では、吉田家文書をはじめ古文書の解読を行う研究会を開催している。こうした、地域の学習と伝承の場を運営していくため、各地区における地縁組織の活用や、関連団体や企業などとの連携も重要である。

［保存活用施策の展開方法］

- **市内の歴史文化研究グループなどのリスト化と支援（短期課題）**：市内で歴史文化研究を行っている団体・個人のほか、保存活用への展開も視野に入れて観光・産業関連の団体・個人なども含め、協力者の輪を広げることが大切である。関係者・協力者のリスト化と併せ、調査研究活動の情報提供などの支援を進めるとともに、自然・歴史文化資源の総合目録作成などの調査活動での連携を推進する。
- **地域コミュニティ単位での歴史文化調査活動の支援（中長期課題）**：市内の各地区、各集落で活動している、自治会やPTAなどの地縁組織や、民俗芸能の保存団体などの情報把握を進め、地区間の横の連携を強める。市内各地区の歴史文化資源の保存状況や活用課題などを共有し、関連施策の展開に活かす。
- **歴史文化資源の調査・保存活用に向けた協議会の設置（中長期課題）**：市役所内の関連部局に加え、市民組織や有識者、関連団体を加えた協議会を設けるなど、情報・意識の共有を図り、保存活用に関わる多様な人々の連携の下に、保存活用方策の検討を進める体制づくりを検討する。

［活用の参考事例］

陸前高田古文書研究会

県指定文化財の吉田家文書を始め、陸前高田市に関係の深い古文書の解読を行っている。今後は、研究会所蔵の郷土資料等の保管・整理場所の確保や、研究会で得られた知見を教育やまちづくりに活かしていく施策整備など、行政も交えた連携を図っていくことが望まれる。

ア）「気づき」

＜展示＞わかりやすく伝える文化財等の展示公開

文化財の公開は、市民生活と文化財の関係を再認識し、歴史文化との結びつきを強め、文化財の保存活用への市民理解を促進し、歴史文化を市民の誇りに変えていく重要な機会となる。そのため、市民が総合的に歴史文化と生活の関わりを理解でき、かつ、来訪者などにとっても分かりやすい形で歴史文化資源が展示されることが望まれる。

◯屋外展示の拡充による「まちぐるみ博物館」の構築（文化財公開制度の拡充）

［保存活用の考え方］

陸前高田市の市内一円を、エコミュージアムという考えも取り入れ「屋根のない博物館」として認識し、歴史文化資源を市民と行政が一体となって保存・活用していくための新たなまちづくりを「まちぐるみ博物館」と位置付ける。陸前高田の歴史文化の魅力を、次世代に向け愛着や誇りを持って伝えると共に、陸前高田を訪れた人々にも体感しながら分かりやすく伝えられるよう、「まちぐるみ博物館」の取組みの一環として、歴史文化資源を活用した屋外展示の充実を図る。

実現に向けては、観光部局などとの連携によるガイドツアールートの設定や展示サイン等の作成などの環境整備と並行して進めていくことが望まれる。

［保存活用施策の展開方法］

- **屋外展示の充実（短期～中長期課題）**：遺跡等の散策路整備、屋外展示の充実、見学施設の整備など、重要遺跡等の整備を進める。また、遺跡等の基本情報を記載した統一的なサインの設置を検討する。
- **屋外展示施設等の適切な維持管理の実施（短期～中長期課題）**：重要遺跡等の屋外展示施設等は、整備後も維持管理の努力を続けていくことが大切である。維持修繕の必要性や利用状況などを調査し、適切な管理を行っていくため、定期的な「文化財等巡回パトロール」を実施する。
- **文化財公開制度の拡充（中長期課題）**：私有の建築物・遺跡・遺構についても、学習・観光面に寄与できる可能性のあるものについて、公開に向けた環境整備・仕組みづくりを推進する。
- **屋外展示と連携したインターネットを利用した学習情報提供（短期課題）**：屋外展示に関する整備と合わせ、歴史文化資源に関するサイン等と連動し、現地からインターネットを利用して学習情報を得るシステムを検討する。

［屋外展示の候補１］

国史跡・中沢浜貝塚（陸前高田市広田町）

昭和９年に国指定史跡となった中沢浜貝塚は、数次に渡る発掘調査が実施されており、縄文時代の早期～平安までの貝塚遺跡であることが分かっている。この貝塚は、広田湾の豊かな水産資源を生活基盤とした縄文時代の人々の生活を知ることのできる格好の材料といえる。中沢浜貝塚では、地域の防災性強化も踏まえた歴史防災公園から史跡公園としての整備を進める。また、貝塚近傍の泊港との連携も含め、観光資源としての活用も視野に入れた展開も検討する。

図 34：中沢浜貝塚

［屋外展示の候補２］

市内５５ヶ所の中世城館遺跡

市内 55 ヶ所の中世城館遺構のうち、広田湾を囲む「二日市城」、「高田城」「米ヶ崎城」などは、複数の曲輪を持つ大規模な城館跡であり、陸前高田市の中世をうかがい知ることのできる大切な遺跡である。これらのうち、「高田城」の一部が本丸公園として公開されているが、その他の中世城館遺跡についても、地権者の理解を得られたものから順に、調査と公開に向けた環境整備を検討する。

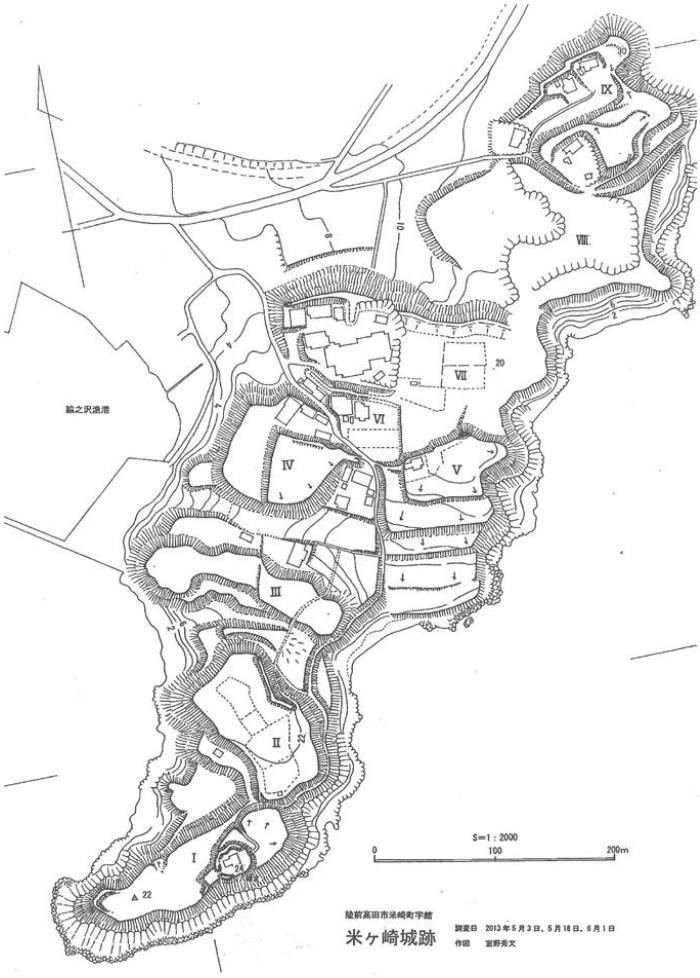


図 35：中世城館跡の例　（米ヶ崎城跡）

◯陸前高田市立博物館の再建に向けた「地域文化」がわかりやすく伝わる展示の工夫

［保存活用の考え方］

陸前高田市立博物館は、まちの復興に併せて再建される予定である。博物館の再建に向けて、博物館の展示物を制作していく必要がある。展示にあたっては、コンパクトかつ要点を踏まえた展示手法や、自然・歴史・民俗・文化・まつり・生業・産業・景観などと一体的に形成されてきた陸前高田の自然・歴史文化資源を、テーマ性・ストーリー性に即して、分かりやすく展示する方法について検討する必要がある。

［保存活用施策の展開方法］

- **自然・歴史文化資源の周辺環境も含めた文化的景観に関する展示物の制作（短期課題）**：豊かな自然を背景に形成された貝塚遺跡や中世城館、現代の集落の姿、自然環境を含めた地域景観など、周辺環境とともに理解したい自然・歴史文化資源について、復元図や復元模型の作製などを検討する。
- **現代に受け継がれる民俗文化や生活文化に関する展示物の制作（中長期課題）**：祭りや民俗芸能、暮らしの文化、伝承や民話など、集落や各家庭で現在も受け継がれている自然・歴史文化資源に関する展示物の制作を、今後の調査等も踏まえて検討する。
- **「水の災害と復興の歴史と教訓の伝承」に係る展示物の制作（短期課題）**：甚大な被害をもたらした今次津波や以前の津波の被害状況、被災前後の自然環境の変化、関係者の証言等を基に、地域の防災教育に資する展示内容を検討する。また、震災前の今泉地区街並み調査の資料などを活用し、被災前の街の姿を伝える展示物制作を検討する。

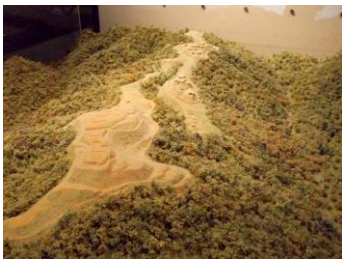


図 36：周辺環境と併せて理解できる中世城館模型の例（東北歴博）

図 37：かつての暮らしを伝える展示物の例（東北歴博）

［活用の参考事例］

大船渡市立博物館（大船渡市）

大船渡市の博物館は、比較的小規模ながら、歴史・考古・自然・民俗文化から震災関連の展示まで、要点を踏まえた幅広い展示内容に特徴がある。被災前の陸前高田市には、陸前高田市立博物館と海と貝のミュージアムの２館があったが、復興後は総合博物館として集約する。大船渡のような例を参考に、要点を踏まえた総合的な展示や、屋外展示の充実も合わせ、博物館展示機能の充実を図る。

図 38：大船渡市博物館：貝層の展示

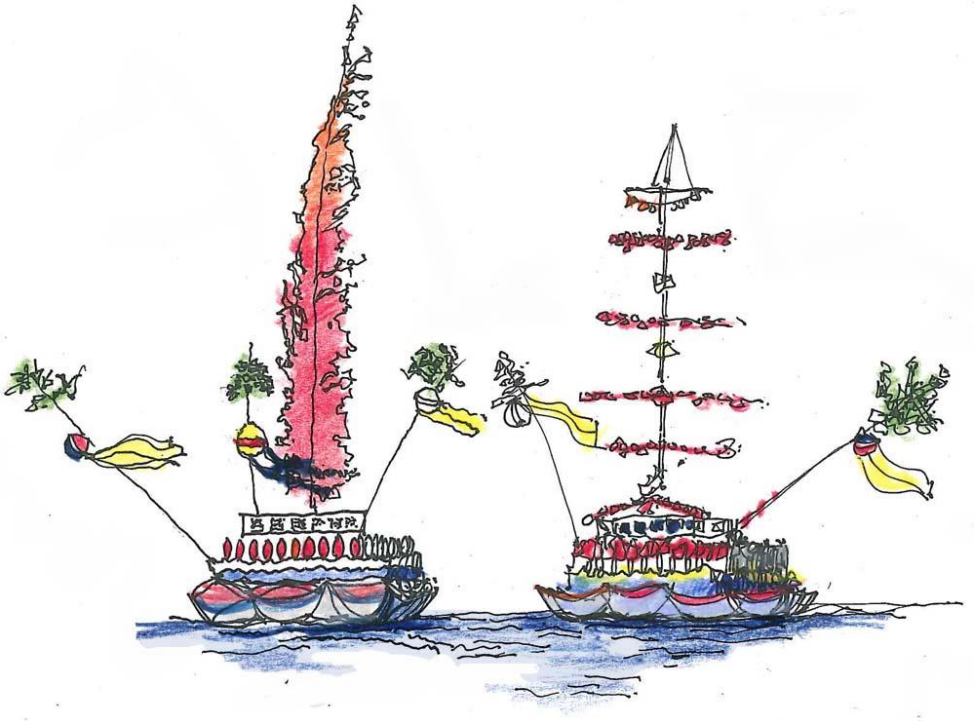
◯陸前高田市立博物館の展示体制の充実

［保存活用の考え方］

常設展に加え、これまでにも行われてきた特別展、移動博物館の取組みを再開し、展示体制の充実に取り組むことが課題である。

［保存活用施策の展開方法］

- **特別展の開催再開（中長期課題）**：再建後の陸前高田市立博物館においても、特別展（夏季は自然史中心、秋季は人文中心）を継続して開催し、市民及び県内外の人々への本市の特色ある自然、歴史、文化の視点からのメッセージを発信していく。
- **移動博物館の再開（中長期課題）**：再建後の陸前高田市立博物館においても、市民に、本市の豊かな自然、歴史、文化に気づき、誇りをもっていただけけるよう、地区公民館、小中学校の要望に対応し、博物館資料を活用しての移動展示公開の取組みを進める。



ア）「気づき」

＜学習機会＞行政と民間が協力して歴史文化の学びの場をつくる

地域に愛着を持ち、陸前高田市の歴史文化ひいては郷土を誇りに思う気持ちを育むため、小中学校の教育現場を支援する取組みを進める。

陸前高田市立博物館を中心に、学校教育との連携を進めてきたこれまでの経験を活かし、学習指導要領に応じた資料提供を実施していくほか、小学校高学年や中学校の児童・生徒向けに、陸前高田市の歴史文化を通史として語る資料の作成も今後の課題である。

地域の中で次世代に受け継いでいくべき私有の歴史文化資源について、学校教育の一環として見学させていただくことも視野に入れ、地域内でご協力いただける方を募っていくことも大切である。

◯学校教育用の歴史文化資源マップや学年別・分野別資料の制作

［保存活用の考え方］

歴史文化資源の総合目録を活用して、学校教育の場で活用できる歴史教育の副教材や副読本の制作に取り組む。

［保存活用施策の展開方法］

・ **学年別・分野別の教育用資料の制作**：就学年次別の歴史教育・地域教育に活用できる、地図や写真、模式図、イラスト等を中心とした資料作成に取り組む。また、学習指導要領に対応した、主として分野別の資料提供を実施する。

［就学年次別の自然・歴史教育資料のイメージ］

小学校生活科（１～２年生）：博物館や遺跡等の公共物とのかかわり、身近な自然、七夕などの季節行事や虎舞など地域行事に関する資料

小学校社会科（３～４年生）：地形の様子や使われ方（海岸、田畑、果樹園、山林等）および古くから残る寺社や建物、古くから残る暮らしの道具、地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事、地域の発展に尽くした先人などに関する資料

（５～６年生）：農業や水産業の努力や苦労、地形や自然環境を生かす工夫に関する資料、神話や言い伝え、中沢浜貝塚やその他の貝塚、大仏の造営と気仙地方の砂金、大庄屋（大肝いり）吉田家など陸前高田市の歴史を通史として理解できる副読本

小学校理科（３～４年生）：陸前高田の自然や身近な自然などに関する資料

小学校理科（５～６年生）：気仙の地層や化石など特徴的な土地のつくりと変化に係る資料

小学校国語科（１～６年生）：陸前高田の昔話に関する資料

中学校社会科（地理的分野・歴史的分野）

：地域の歴史や自然を自ら調べるにあたっての助けとなる統計資料や地図、年表を含む、陸前高田市の歴史を通史として理解できる副読本や、地理的分野の資料集　など

総合的学習（小学校３年～中学生）：地域の水産業や農業、オシラサマなど地域の特性を生かした学習プログラム、地域の伝統芸能の体験学習に関する資料

・ **小学校区別の歴史文化資源マップの制作（短期課題）**：小学校区の単位を基本に、身近な歴史文化資源を知り、見学等に活用できる歴史文化資源マップを制作する。マップの制作にあたっては、すでに市内の各地域で市民によりつくられている資源マップを活用しながら、地域の市民とともに紹介すべき歴史文化資源の選定を進める。

・ **市史の活用と小中学校向け歴史教育副読本の制作（中長期課題）**：先史時代から現代までの陸前高田市域の通史として理解できる教育用副読本の編集が望まれている。副読本の制作は、市史および最新の調査研究の成果を踏まえて実施する。

［活用の参考事例］

地域の歴史文化資源マップ（高田町、長部地区、横田町など）

市内の各地区では、すでに歴史文化資源のマップづくりが市民の手で進められてきた。教育用の歴史文化資源マップ作成にあたっては、こうした先人の努力と成果を参考にしながら進めていくことが大切である。

図 39：地域の歴史文化資源マップの例（高田町史跡マップ）

◯歴史文化資源を活かした地域と学校教育の連携

［保存活用の考え方］

地域ごとの歴史文化資源を次世代に継承していくため、学校教育の中で実際の歴史文化資源に触れることは、子どもたちにとって重要な体験となる。歴史文化資源の見学や体験を学校教育の中で行うため、市民の協力が必要である。

［保存活用施策の展開方法］

- **学校教育での見学に対する市民の協力（短期課題）**：私有の歴史文化資源の見学をお願いできる地域の市民を、小中学校ごとに募る。
- **総合的な学習の時間などを活用した、地域行事や伝統芸能の体験（中長期課題）**：地域行事や伝統芸能を次世代に引き継ぐため、学校教育との連携を検討する。
- **博物館子ども研究室の再開（中長期課題）**：被災前の陸前高田市立博物館では、「博物館こども研究室」として、児童生徒の自然史、歴史、民俗などに関心を高め、自ら研究しようとするこども達に、博物館施設を開放してきた。博物館再建に併せ、博物館こども研究室の再開を検討する。

［博物館こども研究室について］

博物館こども研究室は、市内の小中高校生を対象に、こどもたちが自ら研究をする際に博物館を開放する仕組みである。博物館内に研究室を常設し、研究に必要な器具・機材、文献などを用意していた。また、こどもたちの自由研究を助けるため、学芸員による指導も行っていた。活動の成果は、冊子にまとめて広く公開する試みもされていた。

再建後の陸前高田市立博物館でも、博物館こども教室を開設し、陸前高田市の自然・歴史・文化の教育普及に資する活動の実施を検討する。

ア）「気づき」

＜情報発信＞自然・歴史・文化を「深く知りたい」欲求に応える

被災前の陸前高田市立博物館では、博物館職員によるホームページを利用した情報提供などの試みがなされてきた。今後の博物館の再建と併せて、市民に対しての成人教室、市民講座などの生涯学習場所の提供や市外に向けてのホームページの活用など地域学習や観光に資する情報提供の促進を図る。

◯陸前高田市立博物館デジタルミュージアムの開設

［保存活用の考え方］

歴史文化資源の総合目録やこれまでの博物館の蓄積を基に、陸前高田の歴史文化をストーリーとして分かりやすく伝えることを目標に、インターネット上に公開するデジタルミュージアムを構想する。デジタルミュージアムでは、歴史文化資源の保存活用に資する内容を整理・付加し、市民や観光客の「歴史文化を深く知りたい」欲求に応えるコンテンツの整備を図る。

［保存活用施策の展開方法］

- **デジタルミュージアム（ホームページ上の博物館）の構築（短期～中長期課題）**：展示内容の更新が容易であり、復興の進展や市立博物館の再建に先行した情報提供を開始できることなどの利点を活かし、歴史文化の総合窓口となるデジタルミュージアムを設置する。デジタルミュージアムは「４つの関連文化財群と 12 の物語」に沿った分かりやすい構成や、「歴史文化資源の総合目録」との連携に配慮する。また、市内各地区における地域住民の文化財保存・継承・活用活動の進展状況も併せて展示することにより、地域学習や観光面への相乗効果を高める。当初のコンテンツとして、被災文化財等の調査のデータ化についても検討する。
- **デジタルアーカイブ（ホームページ上の電子図書館）の構築（短期～中長期課題）**：例えば陸前高田市老人クラブ連合会による「陸前高田物語」や、合併前の町村史など、現在は入手困難な歴史文化関連書籍類をデジタルアーカイブ（電子図書館）として博物館ホームページに掲載することで、多くの市民のみならず専門家や歴史研究家等による研究活動への活用を促進する。

［市民に公開したい郷土資料の例］

『陸前高田物語』第一集～第十集、記念特集号

陸前高田市老人クラブ連合会の編集した、民話や、かつての暮らしを寄稿者それぞれに綴った本である。最近では聞くことができなくなっている昔話や伝承や、かつての暮らしに関する内容が豊富に掲載されており、こどもから大人まで楽しめる、陸前高田市の民俗文化を知る上で価値の高い資料である。現在は入手困難な本となっており、公開を進めることで生涯学習に役立てていくことが望まれる。

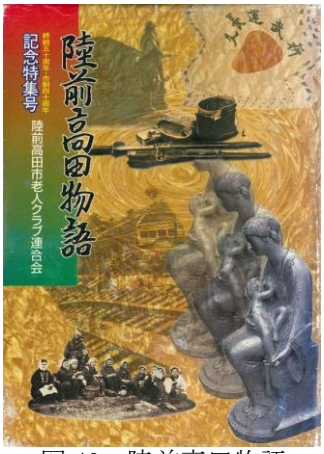


図 40：陸前高田物語

「廣田尋常高等小學校、廣田村實業補習學校編 1932（1981）
『廣田村郷土教育資料第一輯～第三輯』」

陸前高田市内では、旧町村ごとの郷土資料が残されている。写真の例は、廣田尋常高等小学校で昭和初期に用いられていた資料を復刻した物である。こうした郷土資料の多くもまた、絶版となっており、身近な郷土の歴史に触れられる環境を整えるため、電子図書館による公開が望まれる。

図 41：廣田村郷土教育資料

◯博物館紀要および博物館だよりの発行再開

［保存活用の考え方］

陸前高田市立博物館では、紀要や博物館だよりを発行し、研究内容の公開に努めてきた。震災により、一時中断しているが、博物館再建に併せ、教育普及の手段としてこうした取組みの再開を検討する。

［保存活用施策の展開方法］

- **博物館研究紀要の発刊再開（中長期課題）**：博物館研究紀要は、平成７年より専門研究員、学芸員が執筆し研究の成果を博物館紀要としてまとめ毎年発刊し、現在までに 13 号を発刊している。博物館再建に併せ、研究紀要の発刊の再開を検討する。
- **博物館だよりの発行再開（中長期課題）**：博物館活動の理解及び利用促進のため、中断している博物館だよりの定期的な発行再開およびホームページ上での公開を検討する。

イ）「つたえ」

＜指定文化財の拡充＞調査に基づき、指定文化財を拡充する

市内には、震災で滅失している物を含め、国指定 9 件、県指定 11 件、市指定 32 件の指定文化財がある（25 ページ参照）。これらの指定文化財については、重要度に応じた指定の拡充を検討していく必要がある。また、未指定の自然・歴史文化資源についても、陸前高田の自然や歴史文化の特徴を伝える観点から、専門家による調査・分析・評価を経た上で、適切な文化財指定を行っていくことが望まれる。

加えて、現在の制度に沿った指定の拡充に加え、「市民登録文化財」制度など、柔軟な文化財指定制度の構築についても今後の継続的な検討事項とする。

◯調査分析に基づく、関連文化財群を意識した戦略的な文化財指定拡充

［保存活用の考え方］

文化財指定の拡充は、専門家による調査分析に基づくことが大切である。加えて、陸前高田の自然・歴史・文化を総合的、重層的に学び伝えるために、「４つの関連文化財群と 12 の物語」に示した「陸前高田らしさ」を伝えるために必要不可欠な自然・歴史文化資源の指定や、各時代や地域性に配慮した多分野にわたる文化財指定が望まれる。学校教育・社会教育、観光面等への波及効果も意識し、公開や博物館での収集保存の可能性を踏まえた文化財指定を行っていく観点も大切である。

［保存活用施策］

- **４つの関連文化財群と 12 の物語を伝える文化財指定の拡大（短期～中長期課題）**：関連文化財群を踏まえて陸前高田の歴史文化を分かりやすく伝えるため、以下に示す歴史文化資源を中心に調査・評価を進め、文化財指定を検討する。

・「海と川の資源と生活にまつわる歴史文化」：「海上七夕」などの祭礼、沿岸部を中心に現在も続く講の行事、沿岸部の縄文時代などの遺跡と出土品 ・「山の資源と生活にまつわる歴史文化」：「玉山金山」などの金山遺跡「炯屋」などの製鉄遺跡、「松坂堰」などの農業土木遺構、地質的特徴のある場所や化石の産出地、オシラサマやカマガミサマ ・「交通・歴史・交流にまつわる歴史文化」：市神宮など商業と関連する資産、小泉遺跡など古代遺跡と出土品 ・「まちとコミュニティにまつわる歴史文化」：代表的な中世城館、中世の板碑・経塚、市内各所に現存する古文書類、「高田町けんか七夕」などの祭礼・伝統芸能、寺社など気仙大工・左官関連の建築物

- **現在の指定文化財の指定格上げ（短期～中長期課題）**：文化財指定の拡大と併せ、現在の指定文化財については、より上位の指定をめざし、調査研究を進めていく。

◯「市民登録文化財」制度の新設なども含めた、多様な指定・評価方法の実施

［保存活用の考え方］

自然、歴史文化の保存活用の主役は市民であり、市民とともに自然、歴史文化への理解を深めながら、文化財の保護に取組むことが望まれる。特に、個人所有の文化財等や、地域の生活文化に関わるものなど、現行法定の指定制度の範囲にすぐには馴染まないものに関して、「市民文化財」として登録し、将来の文化財指定を含む保存・継承のあり方を検討する、新たな文化財指定・評価制度の創設を検討する。

［保存活用施策］

・ **市民登録文化財制度の登録と運用（中長期課題）**:「歴史文化資源の総合目録づくり」や「歴史文化の調査・保存活用に向けた協議会の設置」と連携し、市民登録文化財の運用を担う体制を検討する。また、市民文化財登録の対象となった文化財等は、所有者の理解を得た上で専門家の調査等を経て、指定文化財としていくことも検討する。市民登録文化財として検討したい歴史文化資源の例は、以下の通りである。

・地域の生活文化：年中行事、村社ごとの祭礼など
・個人所有の歴史文化資源：気仙大工の手による民家や蔵、氏神など各家庭で祀られている信仰の対象など
・各地域を代表する民話・伝承など

イ）「つたえ」

＜収集保存＞市民みんなの財産である収蔵物を大切にまもる

陸前高田市立博物館は、漁具、農具などの民具等を中心に、市民からの寄贈による収蔵資料により成り立ってきた特徴があり、官民の協力により文化財等の収集保存が図られてきた。今後も、博物館による文化財レスキュー作業を継続するとともに、市民からの寄贈による文化財等の継続的な収集や、陸前高田の歴史文化を伝える上で必要な資料の積極的な収集保存を進め、新たに建設される博物館で、適切な保存を図る体制づくりを進める。

また、今後散逸の懸念される民有の文化財等についても、継続的な調査を行うとともに、博物館での収集保存や、民間と連携した保存管理の体制づくりを進める。

◯博物館における適切な収集保存体制の強化

［保存活用の考え方］

民間所有の文化財等について、継続的な調査を行うとともに、博物館で保存を行うことが望ましいものについては、所有者の理解を得ながら博物館での収集保存を進める。

［保存活用施策］

- **中近世の文化財等の収集保存強化（短期～中長期課題）**：各地域の市民により保存されている、陸前高田の歴史文化を語る上で重要な古文書類、石碑等について、重点的に収集保存を進める。
- **自然史関連の収集保存強化（短期～中長期）**：被災前の博物館では、陸前高田市の自然に関する収蔵資料として、植物標本、蝶類や貝類、地質等に関する大量の標本を収集してきた。今後も、同様の取組みを進めるとともに、自然・文化・歴史に関する総合博物館に資する、４つの関連文化財群と 12 の物語を伝えるのに充分な自然史関連の収集保存を検討する。具体的には、地質等を理解するための地質標本や、動植物・魚類等の標本収集が考えられる。
- **遺跡等の状況を伝える収集保存強化（短期～中長期）**：埋蔵文化財調査による出土品の収集保存と併せ、集落遺構の一部や、貝塚の貝層など、博物館での展示にも活用できる遺跡の一部を収集保存することを検討する。
- **民俗資料収集協力員制度の拡充（中長期課題）**：すでに、民俗資料収集協力員制度を確立し、資料情報の把握や資料収集の推進をおこなってきた。その成果として、特に、漁具の一部は「陸前高田の漁労用具」として国の登録無形民俗文化財に指定され、本市の重要な基盤（基幹）産業の一つである漁業（水産業）の歴史を知るうえで重要な資料となっている。今後も本制度の拡充を検討する。

図 42：民俗資料の受け入れ風景

◯埋蔵文化財等に関する適切な記録保存の実施

［保存活用の考え方］

復興事業の実施にあたり、市内では大規模な土木工事が増加している。陸前高田市では、遺跡地図により遺跡の位置を把握しており、工事等が行われる遺跡については、法律に基づいた調査記録の実施や保存方法の検討を適切に行っていくことが必要である。

［保存活用施策］

- **適切な埋蔵文化財調査の実施（短期～中長期課題・岩手県教育委員会との連携）**：遺跡地図に基づき、法律で定められた適切な埋蔵文化財調査を実施し、復興事業等により失われつつある遺跡に関しても記録として残す取り組みを進める。緊急性の高い復興事業等の状況に併せ、重要遺跡などの場合には、岩手県教育委員会や文化庁及び研究機関などと連携し、可能な限り迅速な調査を実施できるよう努める。
- **遺跡地図の更新（中長期課題）**：調査に基づく遺跡の位置づけの更新や新たな遺跡等の発見等、今後の調査等の進展に併せ、適切な時期に遺跡地図を更新する。

◯民有の文化財等の適切な管理にむけたアドバイスの実施

［保存活用の考え方］

オシラサマ・カマガミサマをはじめとする各家庭の信仰の対象や、各家庭に伝わる古文書類、年中行事や伝統芸能など、博物館での収集保存が必ずしも適していない文化財等に関しては、博物館学芸員等を中心に、今後も継承していくために適切な管理方法に関するアドバイスを実施する。

［保存活用施策］

- **文化財保存アドバイザーの派遣（中長期課題）**：各地域、または各家庭で保存されている文化財等に関しては、歴史文化資源の総合目録作成を通じた実態把握を行うとともに、市民からの要請に応じた、保存管理のアドバイザーを派遣する体制づくりを検討する。

イ）「つたえ」

＜文化財保護・伝承活動＞民間との協働により文化財等をまもり伝える

陸前高田市の歴史文化は、海・河・山などの地域の自然環境を背景とした、江戸時代以前から続く旧村落やさらに小さな集落を単位とした住民生活の営みのなかで継承されてきた。文化財保存・継承・活用の仕組みや枠組みを考える上でも、市民の理解と継承のための具体的なアクションプランが求められる。

特に、伝統行事や地域の民話・伝承等を次世代に受け継ぐ取組みは、市民が主体的な担い手となることが期待される。

◯伝統行事など、地域活動の継承体制構築

［保存活用の考え方］

市内各地域で行われている伝統的祭礼は、指定文化財、未指定文化財を含め、地域の保存会などの努力により継承されており、地域コミュニティ結束のシンボルとなってきた。しかし、震災による人的・物的被害、少子高齢化の影響等により、地域の伝統芸能の存続が危ぶまれる状況も見られる。また、かつては集落毎の神社を核に営まれていた祭礼が、村社ごとの例大祭に集約される傾向もある。

震災からの復旧支援に加え、伝統行事の担い手育成等も含め、中長期的な継承活動の支援が必要である。

［保存活用施策］

- **市内の伝統芸能保存団体のリスト化（短期課題）**：地域の歴史文化の継承を考える上では、こうした伝統的祭礼を活性化し、今後も子ども、孫へと受け継いでいく取組みが大切である。市内の無形文化財の継承には、各地区で保存団体を中心に取り組まれている。保存団体間の連携と運営状況の共有のため、保存団体リストを作成し、行政も共に継承上の課題を共有する体制づくりを行っていく。
- **伝統行事等の活性化・後継者確保の支援（中長期課題）**：地域の保存団体等を中心とした継承がはかれるよう、次世代の担い手育成に取り組む。市内外から担い手や後継者を確保・育成する仕組みづくりも検討する。

◯「民話・伝承の里」づくり活動の実施

［保存活用の考え方］

東北地方では、遠野出身の佐々木喜善を媒介として柳田国男により紹介された遠野地方の民話が全国的に有名であるが、陸前高田市内にもこれに負けないバラエティー豊かな民話や伝承が残されており、これらの継承と広く伝えていくことが課題である。現在の 50 代以下の世代ではあまり知らなくなっている、かつての暮らしの様子や地域に伝わる民話・伝承などを通して、先人の知識や生活体験を受け継ぐことは、地域文化を継承する上で大切である。

［保存活用施策］

・ **「陸前高田おはなし会」の実施（短期・中長期課題）**：幼稚園・保育園や小学校や地域コミュニティが中心となり、高齢者の昔話を子ども達が聞く会の実施を検討する。子ども達が楽しみながら地域の歴史文化に親しみ、民俗文化を次世代に継承することを目指す。

・ **「陸前高田むかしばなし絵本」の刊行（中長期課題）**：代表的な地域の民話・伝承については、子ども達が自主的に学習できるよう、絵本としての刊行を検討する。

［市内各地域に伝わる民話・伝承の例］

以下に示す民話・伝承は、地域ごとに語り伝えられてきたもののなかから、特定の集落や場所、地形等と結びつきの強い物語である。集落等の由来や、古代の伝説などが含まれている貴重なものであり、地域ごとの「おはなし会」や「絵本」の形で残していきたい内容である。

・ 高田町：武日長者の伝承（糠の森、姉歯橋、姉歯の松など）、小泉の湧泉、和野の伝承（沼の主、座敷ワラシ）
・ 気仙町：白米城、泉増寺と鏡屋御前、百牛塚、大江千里公と金剛寺
・ 広田町：赤沼の片目鰻、高館の伝承、龍神の神楽、十二字沼の主、椿島の弁天様、根岬の豺（さい）の神
・ 小友町：森崎の水晶林、蛇ヶ崎の大蛇伝承、蝦夷との戦いの伝承（蛇ヶ崎、千人塚など）、小百合あらし、衣地と弘法様、小友のお大師様
・ 米崎町：米ヶ崎城の伝承、箱根山の姥石、普門寺のお不動様
・ 矢作町：雪沢金山とオソトキ、千把萱、若生の滝と姫塚、馬洗い淵の河童、湯漬畑の蛇塚、宝鏡寺の虎猫、鬼のマアヤ、歯無しの狼、笹の田の狐
・ 竹駒町：玉山金山の伝承、鮭の大助、無極寺と竜の玉
・ 横田町：菖蒲姫の伝承、機織り沼の竜、横田流れ、河童と横田膏

◯地域コミュニティとともに歴史文化資源をまもり伝える

［保存活用の考え方］

地域ごとの歴史文化資源を地域コミュニティが主役となって維持管理する仕組みづくりを進める。

［保存活用施策］

・ **文化財愛護団体の育成（中長期課題）**：地域コミュニティを基本とした保存管理を担う文化財愛護団体を組織し、指定管理者制度等により遺跡等の保存管理を行っていくことを検討する。地域の小中学生などの参加も含め、担い手の幅を広げる組織づくりに取り組む。

イ）「つたえ」

＜文化財レスキュー体制の整備＞
災害時の文化財などの救援・修復体制を充実する

東日本大震災により２つの博物館は被災、収蔵品が大きな被害を受けた。現在は、旧生出小学校において、回収された収蔵品のレスキューが続けられているほか、全国の博物館やボランティア団体の協力も得て作業が進められてきた。

被災による大きな混乱の中、全国からの支援のもと文化財レスキューを実施したが、今後は、同様の被災の際にも円滑な文化財レスキューが行える体制づくりが望まれる。文化財レスキューの体制は、陸前高田市の文化財レスキューに役立つだけでなく、今回お世話になった全国の博物館等が被災した際に、陸前高田市が貢献し、恩返しをする意味でも大切な取組みである。

◯震災による陸前高田市における文化財レスキューの記録作成

［保存活用の考え方］

陸前高田市における文化財レスキューの実態を把握し、今後の同様なレスキュー活動に資するため、震災以降の取組みの検証と分析を行っておく必要がある。

・ **文化財レスキュー記録の作成（短期課題）**：これまでの活動を記録に留め、レスキュー活動の課題点の洗い出しを進め、「文化財レスキュー記録」として取りまとめる。

◯恒常的な文化財レスキュー体制の構築

［保存活用の考え方］

今後の博物館被災に備え、マニュアル整備や博物館防災計画の策定を進める。また、被災時に重要となった、市外の博物館・研究機関等との連携体制をあらかじめ整えておくことも課題である。

・ **文化財レスキューマニュアル、文化財等防災計画等の策定（中長期課題）**：今回の文化財レスキューでは、いずれも大量に存在した、古文書・書籍等の「紙媒体の資料・史料」や、昆虫や貝類等の「自然史関連の標本類」のレスキューが困難を極めた。こうした経験を活かしていくため、「文化財レスキューマニュアル」として、文化財等の種別のレスキュー方法や留意点をまとめることを検討する。また、津波に限らず、地震、火災など、想定される様々な災害形態に対応できるよう、文化財等をまもっていくに当って必要な体制、レスキュー方策等をまとめた「文化財等防災計画」の策定を今後検討する。

・ **県立博物館や他の博物館との連絡・連携体制の確立（中長期課題）**：発災後の初動期の文化財等の救出から、その後の修復活動まで、全国の博物館による支援が大きな役割を果たした。今後の災害発生を想定し、博物館・研究機関間の相互支援を円滑に進めるため、連絡体制の構築や、連携体制の検討を実施する。

・ **「文化財防火デー」にかかる活動の継続（中長期課題）**：震災前から、文化財所蔵者に対する防火意識の啓発、防火設備の整備に努めると同時に、防火訓練の奨励を目的に、「文化財防火デー」に関する活動を実施してきた。今後も、文化財を多く所有している寺社などと協力しながら、市民の防災に対する意識啓発のため、「文化財防火デー」にかかる取組みを継続させる。

ウ）「活かす」

＜観光＞歴史文化のストーリー性を観光に活かす

「岩手の湘南」ともいわれる温暖な気候を活かし、高田松原を中心とした夏季の観光客が中心だった震災前の状況に比べ、震災復興期の現在は、観光客が減少しており、陸前高田の魅力を充分に伝え、市内の観光関連産業を育成するには困難な状況が続いている。

しかし、震災以降の本市では、復旧・復興へのボランティア活動や、「奇跡の一本松」などの震災遺構への観光を目的とした来街者もいる。これらの来訪者に対して市内の歴史文化に関わる名所や施設への循環移動につながるよう、陸前高田の持つ文化財の特性を深く知る機会や情報の提供の充実が求められる。

そのために、自然・歴史文化資源を活用して「陸前高田ならでは」の見どころを総合的にアピールしつつ観光客を誘導することを目標とし、「自然・歴史文化が人を呼ぶ」観光価値の提示に、浸水被災地域のみならず全市をあげて取り組んでいく必要がある。

また、自然・歴史文化資源の保存・継承・活用の観点から、市内の既存の観光拠点との連携、施設運営関係者や市内の歴史文化勉強会など関係者を中心とした交流・滞在型観光のコーディネーター育成を進めていくことが重要である。

◯「陸前高田の歴史文化が人を呼ぶ」観光ルートの設定

［保存活用の考え方］

市内に点在する自然・歴史文化資源を観光資源としてネットワーク化し、拠点施設を核とした情報提供の拡充を図ることで、現在は来訪者にとって分かりにくい見どころ・観光資源を顕在化することが重要である。そのため、インターネット上での情報提供、観光ルートマップの作成・配布などにより、観光をターゲットとした分かり易い情報を提供し、自然・歴史文化資源へのアクセス性を高める。

また、観光をキーワードとした歴史文化活用体制の構築に向けては、市内の既存観光拠点である「川の駅よこた」、「霊泉　玉乃湯」、「ホロタイの郷　炭の家」、「気仙大工左官伝承館」、「杉の家はこね」などの施設、農業協同組合や漁業協同組合等と連携した情報提供、魅力的な観光メニューの提供を検討する。

観光ルート設定にあたっては、「三陸ジオパーク」や「みちのく潮風トレイル」等と連携する広域的な取組みへの参加も視野に入れた検討を実施する。

［保存活用施策の展開方法］

- **４つの関連文化財群と 12 の物語をテーマとした、テーマ別の観光ルートマップの提供（短期課題・商工観光事業との連携）**：気仙大工・左官、信仰の歴史、三陸海岸の風景、産金の文化、先史時代の遺跡など、関連文化財群と 12 の物語のテーマに沿ったマップを作成し、観光資源となりうる歴史文化資源のネットワーク強化を図る。また、既存の観光拠点等における観光メニューを取り込みつつ、体験・交流を意識してマップの内容の充実を図る。

・ **三陸ジオパークとの連携（中長期課題）**：平成 25 年に認定された三陸ジオパークは、青森・岩手・宮城に渡る三陸地域沿岸において、地球環境の営みを学ぶことのできるジオパークである。すでに、陸前高田市内でも、ジオサイトとして「高田松原」、「氷上山」、「気仙産金」が取り上げられ、「氷上花こう岩」、「古生代ペルム紀の化石産地」などの地質的特徴についても言及されている。陸前高田市に置ける歴史文化資源の総合目録等を活用し、さらなる内容の充実とジオサイトの拡大や、沿岸部の遊歩道整備などを検討するとともに、観光分野の広域連携の一環としてジオパークを位置づける。

・ **みちのく潮風トレイルとの連携（中長期課題）**：東北地方太平洋沿岸地域に整備するトレイルコースである、「みちのく潮風トレイル」は、「ジオパーク」の取組みにより広がりを持たせた、風景・歴史・風俗・食文化等の奥深さを知る長距離自然歩道であり、環境省を中心に今後整備が計画されている。自然・歴史文化資源の観光活用に資するトレイルとの連携を強化し、自然環境と地域の暮らしを体感できるスポットの提案などの取組みを進める。

◯観光ガイドや地域の保存活用の担い手との連携

［保存活用の考え方］

市内の観光ガイドは、自然･歴史文化資源の紹介を含め、独自のノウハウを蓄積している。また、歴史文化の体験の場として、地域の伝統芸能などの歴史文化資源も、観光資源としての活用が望まれる。こうした市民の取組みとの連携を強めることが、交流・滞在型観光を実現する上で重要である。

［保存活用施策の展開方法］

・ **観光ガイドとの連携（短期課題・商工観光事業の連携）**：観光ガイドとの連携は、観光客のニーズを知り、効果的な観光案内を進める上で大切である。観光ルートマップで取り上げるべき要素の抽出を、観光ガイドを交えて行うことで、市内ガイドの際にも利用できるルートマップ作成に取組む。

・ **年中行事や伝統芸能の情報発信（中長期課題・商工観光事業との連携）**：市内の年中行事や伝統芸能のうち、運営者の了解をとれるものについては、マップに掲載して積極的に観光情報として発信していくことで、観光客等の見学・参加を促す。

［活用の参考事例］

気仙三十三観音

観世音菩薩の自在三十三身説にちなんだ三十三観音として、西国三十三観音、奥羽三十三観音などが全国的に有名である。気仙三十三観音は、享保二年（1717）に高田村の肝入・佐々木三郎左衛門の御詠歌奉納によるものとされている。33 の札所のうち、21 が陸前高田市内にあり、気仙町今泉地区を出発し、長部地区、矢作町、竹駒町、横田町を経て、住田町、大船渡市内を巡り、広田町、小友町、米崎町、高田町を巡る行程となっていた。本市においては、東日本大震災により７か所の札所が観音堂の流出等の被災を受けたが、ＮＰＯなどの活動を通した復興が試みられている。今後、江戸時代の観光ルートである「気仙三十三観音」巡礼路を再興することにより、観光資源等としての活用が期待できる。

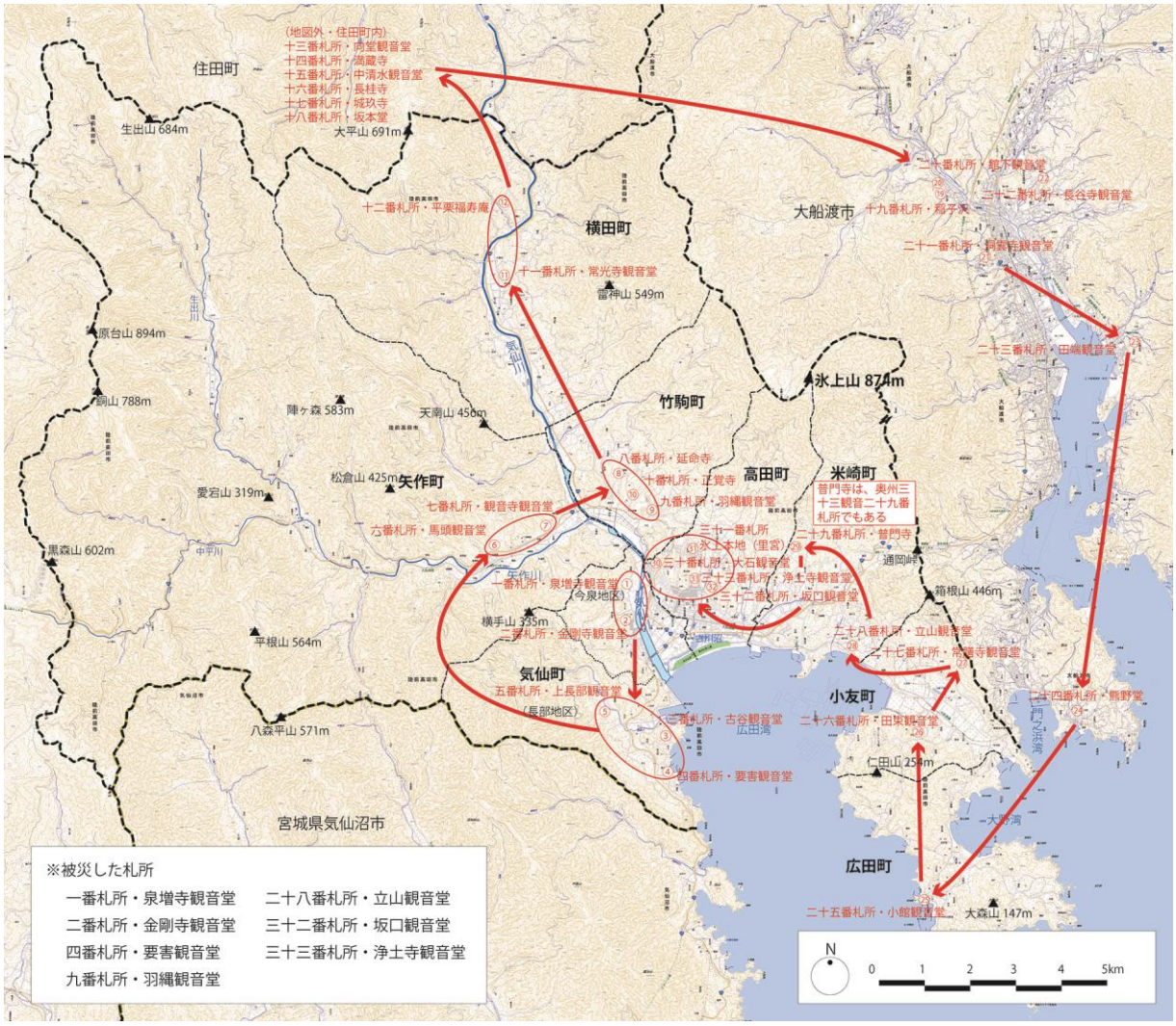


図 43：気仙三十三観音

ウ）「活かす」

＜生涯学習＞陸前高田の誇りを伝える社会教育・学校教育を推進する

陸前高田の自然、歴史文化を今後も継承していくためには、その担い手としての市民の役割が大変重要である。そのため、社会教育や学校教育により広く市民に、自然、歴史文化は資源であるという魅力を伝えていくことが望まれる。

こうした社会教育・学校教育の実践のため、再建後の陸前高田市立博物館を中心に、地域住民との密接な関わりに重点を置いた取り組みを拡大していくことが必要である。

◯博物館における歴史文化、自然に関する公開講座・イベントの開催

［保存活用の考え方］

被災前から、陸前高田市立博物館では市民向けの公開講座や、自然・歴史文化資源を巡る歩く事業などを開催してきた。市民に歴史文化、自然を分かりやすく伝えるため、こうした取組みを今後も実施する。

［保存活用施策の展開方法］

- **市民向けの地元学講座やシンポジウムの再開（短期～中長期課題）**：これまでにも、陸前高田市立博物館を中心に、市民向けの歴史文化、自然の地元学講座を開催してきたが、今後、再開を検討する。また、４つの関連文化財群と 12 の物語を活用するなど、単独の歴史文化資源だけでなく、陸前高田の歴史文化の重層性と自然、歴史文化は資源であるということを理解できるような公開講座や専門家を招いたシンポジウムを、シリーズとして開催することを検討する。これらの開催にあたっては、大学や研究機関との連携を検討する。

図 44：専門研究員の講師による歴史学講座

- **歴史文化資源を巡る「歩く文化財巡り」の再開（中長期課題）**：すでに震災前に、市内を旧町単位で８か所に分け、それぞれの地域の自然、歴史、民俗に関する文化財を実際に歩いて見て学ぶ機会として位置づけ、開催してきた。自然・歴史文化資源に実際に触れながら学ぶ楽しみを共有するため、テーマ別、地域別のまち歩きイベントの再開を検討する。
- **自然観察会の開催（短期課題）**：本市の豊かな自然を学ぶ機会として、児童生徒や一般市民を対象に、博物館が中心となって他機関、団体との連携により観察会を開催してきた。震災後すでに再開している取組みの一つであり、今後も継続した開催に取り組む。

◯「博物館出前講座」や「博物館教室」の実施

［保存活用の考え方］

地域での自然、歴史文化の学び・伝承活動に資するため、地域からの要請に応じて博物館関係者や専門家と協力し、出前講座や博物館教室の再開を検討する。

［保存活用施策の展開方法］

- **学校・集会所・公民館等での「博物館出前講座」の実施（短期課題）**：地域での自然、歴史文化の伝承、伝統芸能等の継承など、地域の抱えるテーマに応じた講座開催を実施し、地域コミュニティを活性化する方策として、各地区・各集落・市民団体等の要請に応じた講座開催の実施を検討する。「博物館出前講座」は、震災後すでに再開している取組みの一つであり、今後も継続した開催を実施していく。
- **市内小中学校や団体の要請による「博物館教室」を再開する体制構築（中長期課題）**：「博物館教室」は、市内小中学校、団体等の要請により博物館で展示資料、収蔵資料に手を触れながら学芸員を講師に授業形式で実践する試みであり、博物館展示資料、収蔵資料を活用した取組みとして、震災前から行われていたものである。震災により一時中断しているが、博物館の再建に併せ、再開を検討する。

◯博物館による恒常的な学校教育支援の実施

［保存活用の考え方］

被災前の陸前高田市立博物館では、教育現場との連携を重視した活動を行ってきた。震災により一部中断している取組みもあるが、教育資料の作成協力と合わせ、以前からの取組みも博物館の任務として位置付け、再開を検討する。

［保存活用施策の展開方法］

- **学校教育向けの博物館収蔵物の貸与の実施（短期～中長期課題）**：被災以前の陸前高田市立博物館では、一部の展示物を小中学校の歴史教育に活用するため、収蔵資料の貸与や「移動博物館」の試みがされてきた。博物館レスキューの進展に合わせ、今後、同様の取組みを検討する。
- **小中学校教諭向けの博物館利用研修会の再開（短期～中長期課題）**：学校教育の中で博物館を有効に活用していく事を目的とした、博物館利用研修会の再開を目指す。
- **「博物館こどもの日」の再開（中長期課題）**：陸前高田市立博物館では、毎週土曜日を博物館こどもの日として、無料入館による博物館利用促進を図ってきた。同時に「博物館こども研究室」を利用した自由研究を奨励するなど、博物館を利用した学習機会を提供してきた。再建後の博物館でも、「博物館こどもの日」の再開を検討する。

３）「活かす」

＜地域づくり＞歴史文化、自然を活用した新たな陸前高田ブランドの創出

自然・歴史文化資源を背景とした産業化や地域産品を束ねることにより、「陸前高田ブランド」として全国に認知される、商品群やイメージの形成を支援する。

海・山・川に囲まれ、豊かな資源に恵まれた陸前高田市では、歴史的に見ても様々な特産品が生まれてきた。現在も主産業となっている食品・水産加工だけでなく、北限の気候風土に育まれた椿油やお茶、ゆずなど伝統的な産物の活用、気仙杉の産地としての特性と気仙大工の技術を組み合わせた新たな産業化など、陸前高田市の産業活性化に資する、優良な地域産品を生み出す努力も必要とされる。

◯歴史文化、自然を活用して陸前高田ブランドを後押しする

［保存活用の考え方］

「地域のブランド化」にあたっては、高級品を取り揃えることではなく、他には無い「陸前高田らしさ」を打ち出し、観光客や消費者に訴えかけていく観点が大切である。自然、歴史文化を背景としたブランド化を考えていくことで、独自性の高い「陸前高田らしさ」を発信する取組みを進める。

［保存活用施策の展開方法］

- **自然、歴史文化と特産品の関わりを伝えるパンフレット等の作成（短期課題・商工観光事業や農林水産関連事業との連携）**:「陸前高田らしさ」を伝える特産品を選定し、歴史文化の観点から独自性をアピールするパンフレット等の作成に取組む。
- **地域の観光・産業に関するイベントとの連携（短期課題・商工観光事業や農林水産関連事業との連携）**: 米崎町の農産物を活かした「米崎町ふれあいりんごまつり」や、広田町の水産物を活かした「広田半島大漁まつり」、横田町の「あゆの里まつり」、矢作町の「生出木炭まつり」など、地域産品を活かした地域特性豊かな観光・産業に関するイベントが各地区で開催されてきた。こうした観光的祭りは、震災以降休止を余儀なくされているものもあるが、地域の生活文化を学習できる価値の高い試みである。また、地域コミュニティ活性化、自然、歴史文化の継承に向けた効果も期待されることから、地域経済の活性化につながるよう、自然、歴史文化との連携した生活文化を周知するイベントの支援対策を講じる。

◯歴史文化、自然を背景とした地域産品を育成する

［保存活用の考え方］

歴史に育まれてきた地域産品を活かした取組みにより、「陸前高田らしさ」のブランド化を強化することが望まれる。江戸時代以降に奨励された気仙茶や椿油などの三陸海岸でも温暖な気候を活かした産物や、豊かな森林資源を活用した気仙杉などは、現代でも産業としての復興の可能性の高い地域産品であり、自然、歴史文化に着眼した地域産品の育成活用を図る。

［保存活用施策の展開方法］

- **漆文化の伝承（中長期課題・農林水産事業との連携）**：漆栽培については、昭和 50 年代初頭までは市内で漆かき職人が仕事を続けていたとされるが、現在では産業として失われている。かつては日本全国にあった漆栽培は、現在は岩手県二戸市など特定の地域で行われているのみである。一方で、国産の質の高い安全な漆原材料の需要は高まっており、漆文化の伝承の観点から産業としての復興の可能性を探る。
- **気仙茶や椿油等のブランド化（中長期課題・農林水産事業との連携）**：江戸時代の仙台藩による農業振興と関連する農産物として、気仙茶の栽培、椿油の栽培などがあり、かつてほどの規模ではないものの、現在でも栽培・商品化が続けられている。気仙茶、椿油とも、陸前高田市の温暖な気候を活かした、北限の栽培地であり、特色ある農産物としての可能性を有している。こうした農産物の生産拡大・販路拡大に向け、歴史性を踏まえたブランド化や、観光産業との連携を進める。また、広田湾沿岸部を中心に残る北限のツバキについては、沿岸部の歴史文化資源の保存活用と連携しながら、地域植生の回復による地域景観保全の推進とあわせた取組みを検討する。
- **農林水産業の六次産業化の推進（中長期課題・農林水産事業との連携）**：地域の特産品は、農林漁業などの一次産業のみならず、加工業を含めた二次産業、あるいは産品の販売・提供をふくめた三次産業まで、多くの産業に関わる重要な要素であり、その販売促進により、地域経済の活性化に結び付くものである。地域産品の育成にあたっては、自然、歴史文化に結びつけながら、地域産品の商品化（二次産業）、販売促進（三次産業）まで含めた六次産業化を検討する。

◯気仙大工左官の伝統技術を受け継ぐ

［保存活用の考え方］

陸前高田市の林業史を特徴付ける気仙杉は、岩手県気仙郡から下閉伊郡南部地方で生産されており、江戸時代の気仙大工の発展と関わりのある特産品である。気仙大工は、江戸時代から続いた大工集団であり、東北を中心に、遠くは関東まで様々な建築物を残した技術集団だった。「気仙杉」ブランドの再興に向けた取組みと合わせ、気仙大工の伝統技術の継承に向けた取組を進めることが重要である。

［保存活用施策の展開方法］

- **商品としての「気仙杉」の復興（中長期課題・農林水産事業との連携）**：陸前高田市森林組合に加え、隣接する住田町・大船渡市が構成する気仙地方森林組合との連携も視野に入れ、気仙杉を用いた商品開発への仕組みづくりを検討する。
- **気仙大工左官伝承館・杉の家はこねを活用した技術伝承の場の運営（中長期課題・建設関連事業、陸前高田職業訓練協会との連携）**：気仙杉の産業化にあたって、伝統ある気仙大工の技術継承と合わせた取組みを図っていくことで、相乗効果を高める検討を行う。

◯地域の食文化を観光資源として活かす

［保存活用の考え方］

地域の食文化を知ることは、住民にとって地域の伝統や気候風土と深く結びついた身近な歴史文化、自然を理解することに繋がり、観光客などにとっても分かりやすく地域文化を知るきっかけとなりうる。

伝統ある食文化の継承・発展、地域の農山漁村の活性化の意味でも、食文化を題材とした産業化・観光化の取組は効果が高いと考えられる。「食育推進基本計画」（文部科学省、平成18 年）の中でも、基本的な方針の一つとして「伝統的な食文化、環境と調和した生産等への配意及び農山漁村の活性化と食料自給率向上への貢献」がうたわれており、具体的な食文化として、「正月、雛祭り、端午の節句などの年中行事食、その地方独特の料理である郷土料理、親から子に、その地域や家で代々受け継がれてきた伝統食など」があげられている。

すでに、岩手県農業改良普及センターでは、地域の食文化を活用したレシピ集の作成や、市内の観光イベント等での市民団体等による郷土料理の提供などに取組んでいる。今後も、こうした取組を進めるとともに、歴史文化、自然の継承の観点から支援を検討する。

［保存活用施策の展開方法］

- **陸前高田の歴史と風土に根ざした食文化に関する情報収集・発信（短期課題・農林水産事業との連携）**：地域の食文化のリスト化、レシピ集の作成、学校給食での活用などにより、陸前高田の食文化をアピールする各種試みに取り組む。こうした地域の食文化の情報収集・発信にあたっては、横田町の気仙川の川蟹を利用した「かにのふわふわ」のような「市内各地区の食文化の特性」のほか、伝統的祭礼や季節行事等と関連した食文化の視点に加え、来

客時に供される「煮しめ」のようなごく日常的な食文化についても地域の食文化を伝える大切な要素であり、観光客などの来訪者から見れば陸前高田らしい食文化の一端として捉えられるため、情報収集・発信の対象に含めていくことが大切である。

- **地域の食文化を象徴する「陸前高田ふるさとメニュー」の活用を図る（中長期課題・農林水産事業・商工観光事業との連携）**：すでに市内の飲食店や観光拠点では、陸前高田の産物を活用した飲食メニューの提供が行われているが、自然、歴史文化の保存と継承の観点から、こうしたものの情報収集と合わせ、地域の食文化を象徴する料理に関して、「陸前高田ふるさとメニュー」の活用を図るなど、地域活性化に資する取組みを進める。

ウ）「活かす」

＜まちづくり＞歴史文化の薫るまちづくりに展開する

この文化財等保存活用計画の基本理念「伝えよう豊かな風土と生活文化、育もうアイデンティティと誇り、まちづくりに活かそう地域のDNA」を実現するため、中長期を見据えた「まちづくり」に歴史文化を位置づけて展開していくことが望まれる。

市の制定する関連上位計画への反映や、陸前高田市立博物館等の公共施設の設置を含め、歴史文化を活かしたまちづくりを着実に進める制度や仕組みづくりにも取り組んでいく。

◯陸前高田市歴史文化基本構想の策定

［保存活用の考え方］

歴史文化基本構想は、歴史文化資源を扱う上での判断基準となる行政計画である。陸前高田らしさを活かした文化財行政や歴史文化を活かした街づくりを進めていく上で、情報の蓄積や施策の一貫性を図る上で必要な考え方をまとめるものであり、この陸前高田市文化財等保存活用計画をより強い形で市政に位置づけ、市民に向けて発信していくため、策定が望まれる。

［保存活用施策の展開方法］

・ **歴史文化基本構想を策定する（中長期課題）**：この陸前高田市文化財等保存活用計画は、歴史文化基本構想の骨子に相当する。加えて、歴史文化構想の内容として、歴史文化保存区域（関連文化財群の核となる区域）の指定や、保存活用の施策のさらなる追加も望まれる。歴史文化基本構想の策定を中長期の課題として位置付け、関係機関や市役所内の関連部局等との連携を強めつつ、策定に向けた検討を今後も継続して実施する。

◯地域性の高い歴史文化を育んできた、景観的変化に富んだ風景の継承・復元

［保存活用の考え方］

鏡のように静かな広田湾と荒々しいリアス海岸のそと海、気仙川・矢作川と川からのびる深い沢、各地区にそびえる山々、椿など北限の植生、気仙大工の技を伝える装飾性の高い蔵などの建築物、長い歴史により育まれた集落など、次々に立ち現れる変化のある景観が、陸前高田の特徴と言える。また、被災した気仙町今泉の伝統的な街並みや沿岸部の近代建築物なども、陸前高田の歴史文化を伝える重要な歴史文化資産だった。

こうした、地形や自然環境を含めた地域ごとの風景、生活文化を含めた文化的景観をまもっていくことは、歴史文化の保存活用に資する重要な課題である。中長期の課題として歴史文化基本構想による保存地区を定めていくことに加え、基礎作業としての記録保存や、景観計画等の関連計画への展開、地域植生を回復する取組みにも併せて取り組むことが望まれる。

［保存活用施策の展開方法］

・ **被災前の街並みや現存する集落や建築物、人との関わりにより育まれてきた植生などに関する記録保存に取り組む（短期～中長期課題・景観形成事業との連携）**：すでに、気仙町今泉地区において、被災前の建物調査を取りまとめる取組みが進められているが、他地区においても震災前の建物や集落、植生などについて、図面、写真、聞き取り調査等による記録を今後検討する。また、浸水被災地域に限らず、気仙大工による家屋や蔵、矢作町に多く見られるスレートなど地域の建築材料、「イグネ」と呼ばれる屋敷林、高田や今泉の宿場の街並み、地形とともに形づくられてきた農村や漁村の集落特性など、基礎的作業として地域景観を形づくる要素を明らかにする調査を行う必要もある。

・ **集落等の街並みのガイドライン策定、景観計画等への展開（中長期課題・復興事業との連携）**：長い時間によって育まれてきた地域の歴史文化を継承するとともにこれからの街づくりに活用するため、景観計画や都市計画マスタープランなどへの反映や、集落ごとの街並み特性の継承を目的としたガイドラインの策定等を検討する。

・ **地域植生の回復に向けた、ガイドライン策定や植林活動等の実施（短期～中長期課題・復興事業との連携）**：ツバキなどの北限の植生をはじめ、陸前高田に特有の地域植生を回復するための活動等の実施を検討する。また、自然植生だけでなく、寺社の境内や個人の庭など、人との関わりの中で育まれた植生についても、歴史文化を伝える重要な要素であることから、重要な樹木等の文化財指定に取り組むとともに、陸前高田らしい地域景観に向けた植栽のあり方に関するガイドラインの策定についても、今後検討する。

◯豊かな自然・歴史・文化を総体として扱う、総合博物館を再建する

［保存活用の考え方］

陸前高田市立博物館は、岩手県第一号登録の総合博物館として、昭和 34 年に旧気仙町役場庁舎に開設、その後、展示内容の充実をはかるため、昭和 54 年に新博物館に移転・開館した。また、平成６年には、海と貝のミュージアムも開館していた。２つの博物館は、震災により大きな被害を受け、休止を余儀なくされているが、震災復興の中で平成 30 年度の再建を目指す。

再建後の博物館は、陸前高田市の自然、歴史、文化を扱う総合博物館となる予定である。再建にあたり、従来からの収集保存・展示公開・教育普及・連携の拠点機能に加え、生涯学習や観光拠点のキーステーション（拠点施設）としての役割を新たに位置づける。

総合博物館の再建にあたっては、平成 26 年度から博物館基本構想の策定を開始し、設計構想及び設計を経て、平成 30 年度の竣工・開館を目指す。被災前の博物館は、自然・歴史文化を扱う「市立博物館」と、主に自然史を扱う「海と貝のミュージアム」に分かれていたが、再建後は、これら全てを一体的に扱い、陸前高田市の自然・歴史文化を総合的に学習できる総合博物館として、機能の充実を図る。

［保存活用施策の展開方法］

・ **歴史文化を活かした街づくりのキーステーションとしての博物館の役割を高める（短期課題）**屋外展示の充実による「まちぐるみ博物館」の実施と合わせ、再建後の博物館を生涯学習や観光の拠点施設として位置づける。すでに、博物館では学校教育や社会教育等の支援に取り組んできたが、今後は学習・観光に関するレファレンス機能の充実や、パンフレット配布や相談窓口の充実による情報提供の場としての機能の充実を図る。

エ）震災復興に向けた緊急対策

環境省による『災害廃棄物対策指針』（平成 26 年 3 月）においても、「歴史的遺産、文化財等が他の災害廃棄物と混在しないような措置を行い、保護・保全に努める」ことが求められており、復興事業を進めるため被災地の歴史文化資源の取扱いを定める必要がある。

復興事業による影響が考えられる歴史文化資源のうち、遺跡等の埋蔵文化財については、法定の埋蔵文化財調査の実施を進めていくが、浸水被災地にあった「石碑」など私有の文化財等や、指定文化財となっている「吉田家住宅」については、復興事業によるかさ上げ対象地に存在していることから、その記録と保護、再建方法の検討に早期に取り組む必要がある。

すでに浸水被災地域の文化財等に関しては、被災状況に関する調査が実施されている。今後は、復興後のまちに優先的に再建すべき文化財等の評価や、再建場所と手段の確保について、関連部局との連携のもと取組んでいく。

◯浸水被災地域の石碑等の保存・再建

［保存活用の視点］

土地のかさ上げをともなう土地区画整理事業など、大規模な復興事業により、陸前高田のまちの姿は大きく変貌していくが、そこに暮らす市民にとって、これまでの歴史・文化が引き継がれた自らの故郷であると感じられることが大切である。また、陸前高田の石碑は、地域の信仰やコミュニティ、道標などの人の往来の痕跡、かつての津波の記念碑、地域の先人やまちの由来を伝えるものなど、地域の生活文化を伝える大切な財産である。街並みや道路の形が大きく変わった新しい市街地においては、従前の場所に石碑が再建されるだけでも、まちの歴史を振り返り、かつてのまちの姿を思い起こす大切な要素になりうる。

浸水被災地域では、多数の石碑が津波被災時に流出、倒壊の被害を受けているが、その後の追跡調査により大部分は発見され、保管されている。こうした石碑を復興後の市街地に再建することは、地域の原風景を呼び戻し、地域の生活文化継承に資する、復興のシンボルにもなりうる取組みである。復興事業の対象地にある石碑については、復興後の再建場所や保存管理の方法を含め、総合的な保存・活用策を検討する。

［保存活用施策の展開方法］

- **石碑情報の集約（緊急課題）**：すでに石碑の被災状況の調査が実施されているが、調査情報のマップ化や、個別の石碑について既往調査に基づく内容に関する情報、所有権の状況等、関連情報を含めて集約し、保存・再建に向けた基礎資料を整理する。また、所有者や地域の保存・再建に係る意向を集約していくことも必要である。
- **優先的に保存すべき石碑の評価（緊急課題）**：陸前高田市文化財調査委員会において、被災した石碑等の評価・検討を進める。中世の板碑のように文化財的価値の高い石碑や、高田町内の「市神宮」や「五本松石碑群」のように地域住民に広く知られ地域の歴史文化を伝え

る上で重要と考えられる石碑については、所有者の確定と再建意向の確認、再建場所の確保などの検討を優先的に行うほか、将来の文化財指定に向けた検討を進める。

- **調査の不十分な石碑に関する調査実施（緊急課題）**：中世の板碑など、現在までの調査が充分でないが学術的に保存対象とすべきと判断される石碑類について、緊急的な調査を実施する。
- **復興事業対象地等からの石碑の回収・移動（緊急課題・区画整理事業などとの連携）**：復興事業による土地のかさ上げなど、土地造成が行われる地域においては、工事の期間中、石碑を移動・保管する必要があることから、回収・移動手段と保管場所の確保を検討する。また、所有者意向等が確認できないなど将来的に再建場所が確保しにくい石碑の発生が予測されること、石碑再建に向けた取組みが長期間に及ぶ可能性が想定されることから、新しいまちづくりのなかで整備される公園等に石碑を保存する場所を確保することを検討する。石碑の回収・移動に関しては、復興事業等の進捗順に応じて取組む必要があることから、復興対策局など関連部局との緊密な連携のもと実施する。

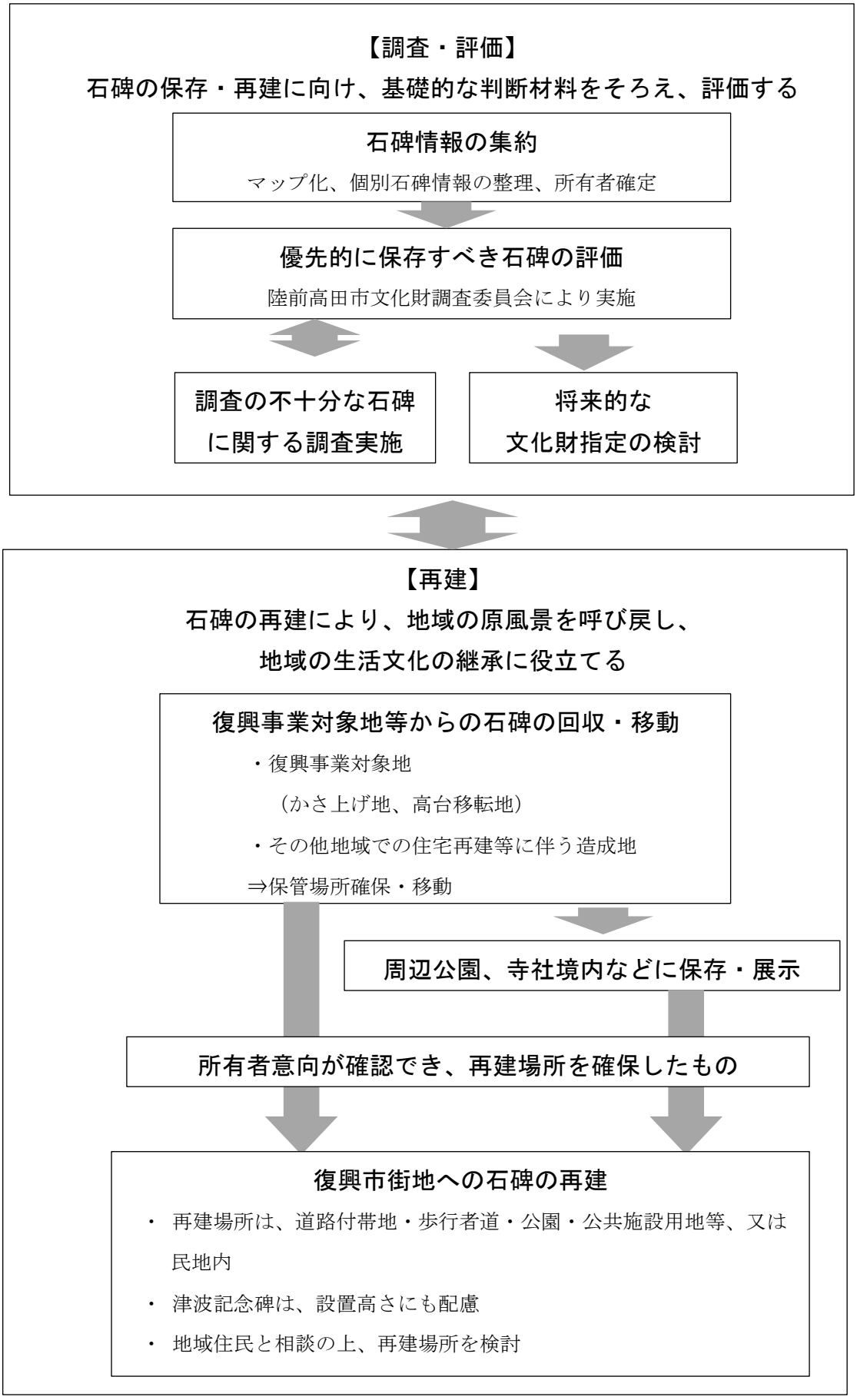


図 45：石碑の保存・再建に係る施策

○今泉地区の歴史文化を受け継ぐまちの再生

［保存活用の考え方］

津波浸水地域の気仙町今泉地区は、大肝入吉田家住宅をはじめとする近世宿場町の面影を残す街並みなど、ながく地域のアイデンティティとなってきた文化財等が、大きな被害を受けた。

陸前高田市震災復興計画の「重点計画の推進」では、今泉地区を「歴史文化を受け継ぐまちの再生」を行う地区と位置づけ、「藩政時代に気仙地方の郡政の中心地として栄えたところであり、これまで培われ、築き上げられてきた歴史・文化を受け継ぎ、後世に継承するべく、大肝入屋敷(大庄屋)や街道の復元など、地域特性や景観に配慮したまちづくりを進めます。」という整備方針が示されている。

かぎ型の街道形状、間口が狭く奥行きの深い敷地に建つ「脇通路型」の町屋建築、御足軽屋敷の街並み、街道から奥まった大肝入屋敷など、宿場町の歴史文化を色濃く残す街並みが被災前の今泉地区の特徴だったが、復興事業により、高台移転や浸水地区のかさ上げ、道路位置や形状の変更、敷地形状の変更、住宅中心から複合用途への土地利用の変化など、様々な要因により、復興後の街の姿は大きく変わるが、今泉地区においては、歴史公園の整備を含め、歴史文化を受け継ぐまちの再生が求められる。

［保存活用施策］

- **大肝入吉田家住宅の再建（緊急課題・復興事業などとの連携）**：吉田家住宅は、近世の気仙郡政を担った大肝入屋敷であり、岩手県の指定文化財となっている。震災により全壊したが、土台及び屋根部分を中心に建築部材を 1,020 本収集し、一時保管されている。今後、従前と近い位置への再建により、文化財指定を維持しながら、今泉地区のシンボルとしての再生に向けた検討を進める。また、再建の検討に先駆けた緊急的な取組みとして、以下がある。
  - ◇ 部材特定結果と仕口調査に基づく主屋・文庫蔵等の復元設計や、復元に使用可能な収集部材の判定、具体的使用箇所特定のための架構図・展開図の作成など
  - ◇ 再建までの部材保管場所・施設の確保、再建に向けた支援体制の確立など
- **かぎ型道路の継承（緊急課題・区画整理事業などとの連携）**：クランク状に折れ曲がった今泉地区の道路は、近世の宿場町特有の形状であり、地域の歴史文化を継承する基本的な都市骨格として、復興後も維持されることが望ましいと考えられる。また、かぎ型部分と直線部分で構成された街路形状は、地域で継承されてきた躍動感のある「気仙町けんか七夕」を育んできた舞台でもある。様々な要因により、復興後の街の姿は大きく変わるが、今泉地区においては、歴史公園の整備を含め歴史文化を受け継ぐまちの再生が求められる。

図 46：江戸期 19 世紀初頃の今泉集落模型（東北工業大学高橋研究室製作）

図 47：震災前の大肝入吉田家住宅模型（八戸工業大学月舘研究室製作）

◯名勝高田松原の再生

［保存活用の視点］

高田松原は、昭和 15 年に国の名勝に指定され、陸前高田市を代表する景観として、市民に愛されてきた。毎年夏期には、市外からの観光客も多く訪れ、観光資源としても重要な場所だった。

高田松原の再生に関しては、国交省東北地方整備局、岩手県、陸前高田市および有識者による、「岩手県における復興祈念公園基本計画検討調査有識者委員会」が、平成 26 年８月に設置され、基本計画の策定にむけて、検討が進められている。

以下の「高田松原名勝指定の概要」の中にも、周辺の地域の景観・環境を含む名勝の指定理由が示されており、名勝高田松原を地域の人々との関わりと歴史、松林とその周辺のコントラストが織りなす景勝地として再生することにより、震災により失われた自然環境や風土、そして地域に暮らす人々の絆を取り戻し、郷土景観とともに「高田らしさ」の再生を図る。

陸前高田市の大切な歴史文化資源でもある高田松原については、前述の有識者委員会での議論を注視しながら、今後も再生に向けた検討を進める。

［高田松原名勝指定の概要］

１．種別　名勝
２．名称　高田松原
３．指定年月日および告示番号　昭和 15 年 11 月 13 日　内務省告示第 592 号
４．管理団体　陸前高田市
５．指定基準
　名称の３（花樹、花草、紅葉、緑樹などの叢生する場所）
　　８（砂丘、砂嘴(さし)、海浜、島嶼）
６．説明
東北地方稀ニ見ル壯大優美ナル松原ニシテ前ニ廣田灣ヲ控ヘ後ニ氷上山、雷神山等ノ翠巒ヲ繞ラシ山紫水明ノ一勝區ヲ成セリ樹種ハ黒松ヲ主トシ林相整美樹下荊棘ノ繁茂スルモノナク境地清淨ニシテ林内ノ逍遙ニ適ス

図 48：名勝高田松原のかつての様子と現在

（３）保存活用の方策・施策一覧

陸前高田市における地域文化財等の保存活用にあたっては、「伝えよう豊かな風土と生活文化、育もうアイデンティティと誇り、まちづくりに活かそう地域の DNA」をテーマとし、下記に示すように、復興計画の進捗と併せて、『豊かな自然・歴史・文化の価値に「気づき」、「つたえ」、「活かす」』という３つの基本方針のもと、今後２～３年の短期的課題として既存の人的資源や施設との連携を主とした取り組みを進め、今後４～１０年の中長期的課題として産業化や新たな施設整備を核とした取り組みを進めるものとする。

こうした取組みを通じて、今後 10 年以降の長期的には、「豊かな風土と生活文化を伝えるまち」、「陸前高田のアイデンティティを育むまち」、「地域の DNA が活かされたまち」を目指すものとする。

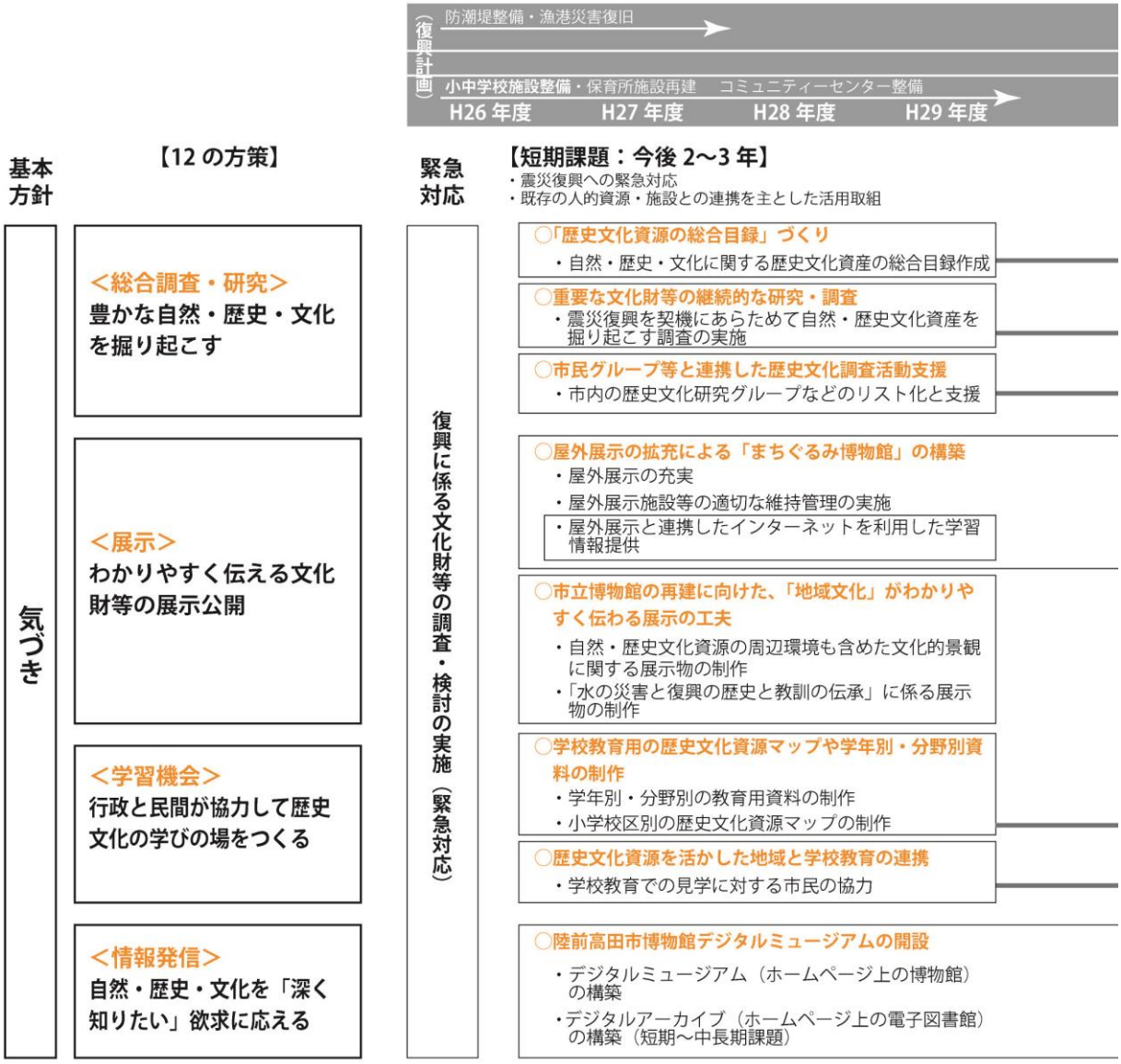
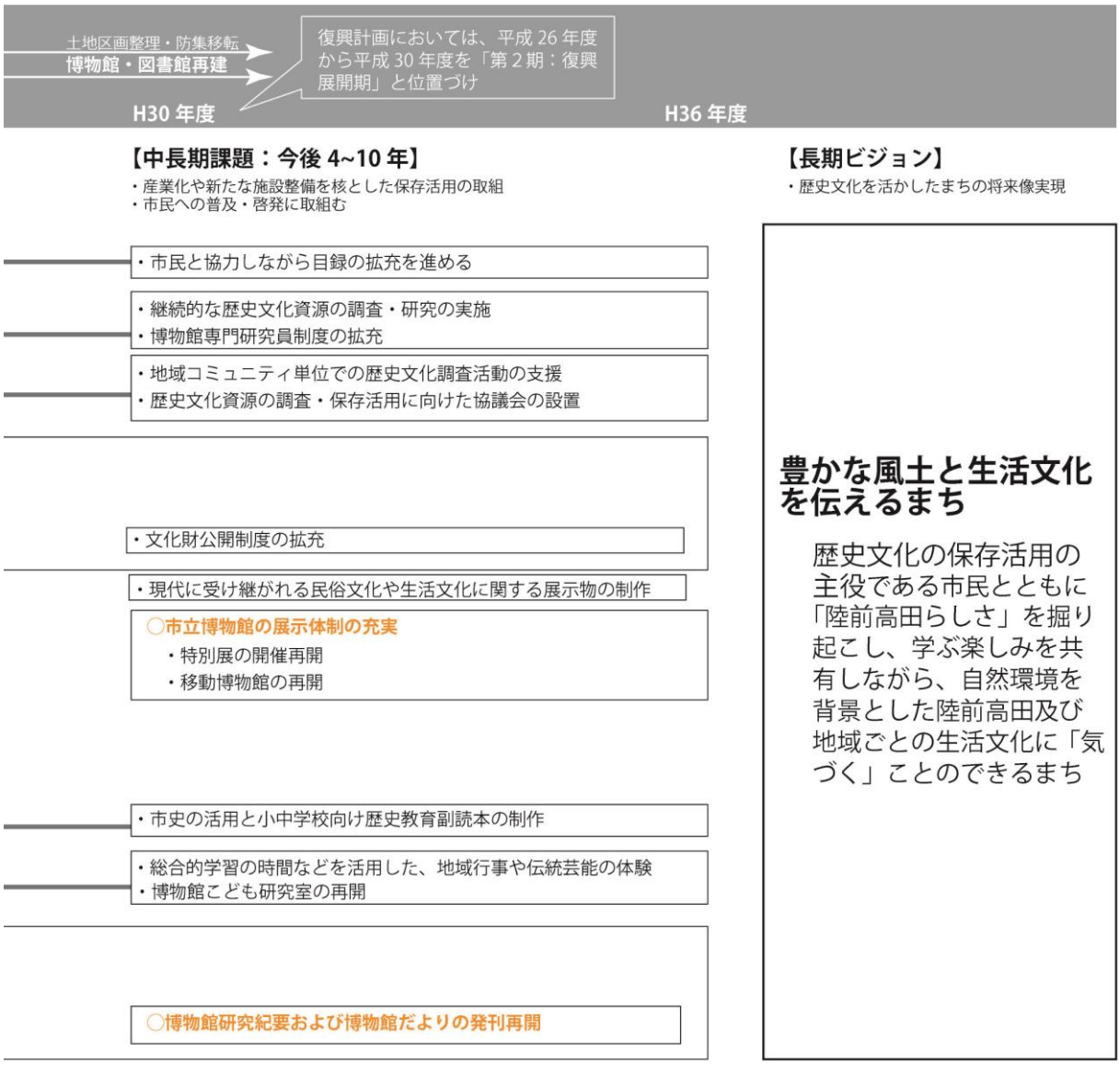


図 49：保存活用の方策・施策の展開

将来のまちの目標である「豊かな風土と生活文化を伝えるまち」では、自然・歴史文化の保存活用の主役である市民とともに「陸前高田らしさ」を掘り起こし、学ぶ楽しみを共有しながら、自然環境を背景とした陸前高田及び地域ごとの生活文化に「気づく」ことのできるまちが目標である。

「陸前高田のアイデンティティを育むまち」では、「陸前高田らしさ」を市民の誇りとし、歴史文化の伝承の担い手である市民とともに、有形・無形の文化財を次世代に「つたえ」るまちが目標である。

「地域の DNA が活かされたまち」では、固有の歴史文化を活かした観光や各種産業への取組み、学校教育や生涯教育への継続的取組みにより、周辺環境を含めた陸前高田の文化的景観を受け継ぐ、歴史文化を「活かす」まちが目標である。



（復興計画）

防潮堤整備・漁港災害復旧 →

小中学校施設整備・保育所施設再建　コミュニティーセンター整備 →

H26 年度　H27 年度　H28 年度　H29 年度

基本方針	【12 の方策】	緊急対応	【短期課題：今後 2～3 年】 ・震災復興への緊急対応 ・既存の人的資源・施設との連携を主とした活用取組
つたえ	＜指定文化財の拡充＞ 調査に基づき、指定文化財を拡充する	文化財等の復旧・復元の実施（緊急対応） 浸水地域の文化財等対象（石碑、今泉地区等）	○調査分析に基づく、関連文化財群を意識した戦略的な文化財指定拡充
	＜収集保存＞ 市民みんなの財産である収蔵物を大切にまもる		○博物館における適切な収集保存体制の強化 ○埋蔵文化財等に関する適切な記録保存の実施 ・適切な埋蔵文化財調査の実施（岩手県教育委員会との連携）
	＜文化財保護・伝承活動＞ 民間との協働により文化財等をまもり伝える		○伝統行事など、地域活動の継承体制構築 ・市内の伝統芸能保存団体のリスト化 ○「民話・伝承の里」づくり活動の実施 ・「陸前高田おはなし会」の実施
	＜文化財レスキュー体制の整備＞ 災害時の文化財などの救援・修復体制を充実する		○震災による陸前高田市における文化財レスキューの記録作成 ・文化財レスキュー記録の作成
活かす	＜観光＞ 歴史文化のストーリー性を観光に活かす		○「陸前高田の歴史文化が人を呼ぶ」観光ルートの設定 ・４つの関連文化財群と 12 の物語をテーマとした、テーマ別の観光ルートマップの提供（商工観光課との連携） ○観光ガイドや地域の保存活用の担い手との連携 ・観光ガイドとの連携（商工観光課との連携）
	＜生涯学習＞ 陸前高田の誇りを伝える社会教育を推進する		○博物館における歴史文化、自然に関する公開講座・イベントの開催 ・自然観察会の再開 ○「博物館出前講座」や「博物館教室」の実施 ・学校・集会所・公民館等での「博物館出前講座」の実施 ○博物館による恒常的な学校教育支援の実施
	＜地域づくり＞ 歴史文化を活用した新たな陸前高田ブランドの創出		○歴史文化を活用して陸前高田ブランドを後押しする ・歴史文化、自然と特産品の関わりを伝えるパンフレット等の作成（商工観光課、農林水産部との連携） ・地域の観光・産業に関するイベントとの連携（商工観光課や農林水産部との連携） ○地域の食文化を観光資源として活かす ・陸前高田の歴史と風土に根ざした食文化に関する情報収集・発信（農林水産部との連携）
	＜まちづくり＞ 歴史文化の薫るまちづくりに展開する		○陸前高田市文化財等保存活用計画（本計画）の策定 ○地域性の高い歴史文化を育んできた、景観的変化に富んだ風景の継承・復元 ・被災前の街並みや現存する集落や建築物、人との関わりにより育まれてきた植生などに関する記録保存に取組む（建設部や都市整備局との連携） ・地域植生の回復に向けたガイドライン策定や植林活動等の実施（都市整備局との連携） ○豊かな自然・歴史・文化を総体として扱う、総合博物館を再建する ・歴史文化を活かしたまちづくりのキーステーションとしての博物館の役割を高める

土地区画整理・防集移転
博物館・図書館再建

復興計画においては、平成 26 年度から平成 30 年度を「第 2 期：復興展開期」と位置づけ

H30 年度　　H36 年度

【中長期課題：今後 4~10 年】

・産業化や新たな施設整備を核とした保存活用の取組
・市民への普及・啓発に取組む

・４つの関連文化財群と 12 のストーリーを伝える文化財指定の拡大
・現在の指定文化財の指定格上げ

○「市民登録文化財」制度の新設なども含めた、多様な指定・評価方法の実施
・市民登録文化財制度の登録と運用

・中近世の文化財等の収集保存強化　・自然史関連の収集保存強化
・遺跡等の状況を伝える収集保存強化
・民俗資料収集員制度の拡充

・遺跡地図の更新

○民有の文化財等の適切な管理にむけたアドバイスの実施
・文化財保存アドバイザーの派遣

・伝統行事等の活性化・後継者確保の支援

・「陸前高田むかしばなし絵本」の刊行

○地域コミュニティとともに歴史文化資源をまもり伝える
・文化財愛護団体の育成

○恒常的な文化財レスキュー体制の構築
・文化財レスキューマニュアル、文化財等防災計画等の策定
・県立博物館や他の博物館との連絡・連携体制の確立
・「文化財防火デー」にかかる活動の継続

・三陸ジオパーク、みちのく潮風トレイルとの連携

・年中行事や伝統芸能の情報発信（商工観光課との連携）

・市民向けの地元学講座やシンポジウムの再開
・歴史文化資源を巡る「歩く文化財巡り」の再開

・市内小中学校や団体の要請による「博物館教室」を再開する体制構築

・学校教育向けの博物館収蔵物の貸与の実施
・小中学校教諭向けの博物館利用研修の再開
・「博物館子どもの日」の再開

○歴史文化、自然を背景とした地域産品を育成する
・漆文化の伝承（農林水産部との連携）
・気仙茶や椿油等のブランド化（農林水産部との連携）
・農林水産業の六次産業化の推進（農林水産部との連携）

○気仙大工左官の伝統技術を受け継ぐ
・商品としての「気仙杉」の復興（農林水産部との連携）
・気仙大工左官伝承館を活用した技術伝承の場の運営（建設部との連携）

・地域の食文化を象徴する「陸前高田ふるさとメニュー」の活用を図る（農林水産部・商工観光課との連携）

○陸前高田市歴史文化基本構想を策定する

・集落等の街並みのガイドライン策定、景観計画等への展開（まちづくり戦略室、建設部、都市整備局などとの連携）
・地域植生の回復に向けた、ガイドライン策定（都市整備局との連携）

【長期ビジョン】

・歴史文化を活かしたまちの将来像実現

陸前高田のアイデンティティを育むまち

「陸前高田らしさ」を市民の誇りとし、歴史文化の伝承の担い手である市民とともに、有形・無形の文化財を次世代に「つたえ」るまち

地域の DNA が活かされたまち

固有の歴史文化を活かした観光や各種産業への取組み、学校教育や生涯教育への継続的取組みにより、周辺環境を含めた陸前高田の文化的景観を受け継ぐ、歴史文化を「活かす」まち

陸前高田市文化財等保存活用計画策定調査業務報告書

発　行　　平成 26 年 9 月 30 日
発行者　　陸前高田市教育委員会
　　岩手県陸前高田市高田町鳴石 42-5
印刷者　　株式会社スペースビジョン研究所
　　大阪府大阪市中央区谷町 2 丁目 9 番 3 号ガレリア大手前ビル